

協同教育実践資料 9

仲間と学び合う中で、

ともに高まる子をめざして

—「話す」「読む」「聞く」「書く」活動を通して

名張市立つつじが丘小学校 著

山本美一・杉江修治 監修

日本協同教育学会

学習指導方法の転換と研究的実践

名張市立つつじが丘小学校

校長 山本 美一

本校の研究は、「良好な人間関係は教育の基盤である」「学習指導の基本は学習者の学習への動機付けである」「学習指導では原理の一貫性と目標の統合性を図ることが必要である」という協同学習の基本仮定と、「参加」「協同」「成就」の基本原理を機軸に、「統合の理論」と「同時学習の原理」を用いて、「仲間と学び合う中で、ともに高まる子をめざして」の研究テーマのもと、研究的実践を試みてきた。

平成17年度当時、本校では学級経営上の課題が様々に存在していたため、中京大学の杉江修治教授が研究されている協同学習、即ち、人間関係を基盤とし、教科指導目標と態度的諸目標の同時達成を図る学習指導の原理を導入し、研究的実践に取り組むことでその課題を解決していこうとした。そして、平成19年度より名張市教育委員会指定学校教育研究推進校の指定を受け、それまでの研究に、「確かな学力」「生きる力」を身に付けさせ、社会の形成者としてふさわしい資質を形成し、自己実現を図るための力を育む指導方法の研究も併せ、学びの学校文化を育もうと研究的実践に挑戦してきた。

本校の進めてきた研究内容の真髄は次の三つに集約されると考えている。

一つ目は、教師の仕事「教える」ことから「子どもの学びを支援する」という教師の学習指導観の転換、二つ目は、学習単元と授業展開共、その内容・見通し・手順を教師だけでなく子どもも知って学習を進める、教師主導型から子ども主導型への授業展開の転換、三つ目は、学力形成をグローバル・スタンダードという新しい概念からも捉え、PISA型読解力で求められている「key competencies（キー・コンピテンシー）」⇒個人の人生にわたる根源的な学習力も、学力の要素として位置づけたことの三点である。

本来、研究として進める研究内容であれば、研究の仮説としてこれら三点の研究内容は研究スタートから想定し、ゴールとして設定するべきものだと考えるのであるが、本校の研究はそういう研究のルールを外した研究として進めてきた。それが、「実践研究」と言わず「研究的実践」という言葉で表しているところである。

その理由は、子どもの事実に基づき、その事実を動かす実践を積み重ねる中で見えてくる理論とか方法を集積することで研究の内容を蓄積し、その蓄積した研内容を基に実践を進め、更に、その事実を動かす実践の中から理論とか方法を研究内容として、また、蓄積していくという、研究・実践の繰り返し方法を取ろうとしてきたからである。ある研究方法に事実を当てはめ、事実をその研究内容に合わせて作り上げようとする研究とは、別の方法を用いた研究推進方法を取ってきたからである。それ故、研究の内容も、事実の変化に対応することで、年次ごとにグレードを上げることができ、前述の三点に到達できたと考えている。

最後に、この研究推進は学校経営の要としてそれなりの戦略と戦術を描いてきたのであるが、スーパーバイザーとしての杉江修治先生のお力を得ることなくして成し得なかったことに、この紙面を借りて深く感謝とお礼を申し上げるところである。また、併せて、名張市教育委員会事務局指導主事の先生方並びに、多くの先生方から本校の研究推進に係り、ご指導頂いたことに感謝とお礼申し上げたいと思う。

目次

学習指導方法の転換と研究的実践・・・・・・・・・・3

教師の同僚性と学校の再生・・・・・・・・・・6

I 研究の概要・・・・・・・・・・8

1 研究的実践スタート時の子どもの人間関係・学力・指導方法 9

2 研究の概要 12

3 全体会発表資料 18

II つつじが丘小学校の実践・・・・・・・・・・27

1 1年生の実践 28

2 2年生の実践 46

3 3年生の実践 62

4 4年生の実践 74

5 5年生の実践 90

6 6年生の実践 107

7 特別支援学級の実践 121

教師の同僚性と学校の再生

中京大学 杉江 修治

つつじが丘小学校に最初にかがったのは、2005年の8月下旬、夏休み校内研修会の折であった。この年赴任された山本美一校長先生とは、前任校の名張市立百合小学校からのご縁があり、声がかかったのである。

つつじが丘小学校は当時、さまざまな教育課題を抱えていた。学級の荒れはそれを象徴する現象であった。そのような事例は、今の日本では少なくない。どのように解決していくのか、試行錯誤が全国でなされている。そしてその多くは十分な解決に至らないまま、教師たちが消耗していくという実態となっている。

つつじが丘小学校が、協同学習研究の立場から授業づくりを重ねてきた私に声をかけた背景には、日々繰り返し重ねられている、ある意味末梢の対応に終始するのではなく、学習指導の本質に立ち返ってこの問題に依拠していこうという構えがあったように思う。

2005年度は、夏休みの研修会以降、4回の授業参観を伴う校内研修会で学校を訪問した。その半年間は私にとってきわめて刺激的であった。

夏休みには、協同原理に基づく授業改善の視点と方法をお話した。児童観、学力観、指導観の点検からはじまり、子どもの主体的学習活動を促すための3つの観点、「参加」「協同」「成就」の意義と、授業へのその導入手法について、事例を交えて紹介した。その内容は、教師が「教える」というこれまでの学習指導観から、教師は子どもの学びを「支援する」ものだというように、教師の役割について180度の転換を求めるものであった。このような視点の転換は、最近の教育実践論などで、ことばとして語られることはめずらしくない。しかし、本気で実践を変えようという動きが求められることはなかった。ことばだけの教育学、教育実践学が蔓延しているのである。

この折の、つつじが丘小学校の先生方の当初の反応は、さほどかんばしいものではなかった。従来の教師主導の授業の枠の中での工夫というところに発想がとどまっていることは明らかであった。

10月中旬に、初めてつつじが丘小学校の授業を拝見した。最初の教室に入った折の風景は今でも忘れられない。低学年のクラスの子どもたちが、南側は窓際一杯まで、北側は廊下側の壁一杯まで、机と机を離して、整然と座っていたのである。一人ひとりが切り離され、孤立し、学級が学習集団としての体裁をなしていない。机を合わせると子ども同士で騒いでしまう。騒がないように机を離す。この対応はよく行われているけれど、問題解決に一步踏み込むことのない、浅い着想である。騒ぐのは子どもが悪いという考えが底にある。子どもが騒いでしまうような授業の方に問題があるとは考えなかったのである。私は、授業時間の経過とともに、後ろで観察しているだけで、子どもたちの中にストレスが増していく様子を見取ることができた。教師の一方的な授業を、孤立の中で聞いてわかる子どもは多くない。子どもたちは1分刻みで自分の力のなさを思い知らされていたのである。

この日は二つの提案をした。一つは、授業を通して子どもたちにどんな学力をつけようとしているのかを常に考えながら授業を進めてほしいということであった。もう一つは学級集団の力、共に学ぶ仲間がもたらす力への配慮をしてほしいということであった。

12月はじめの研修会で拝見した5、6年生の授業では、さまざまなチャレンジが見られた。机配置は学級集団としてのまとまりを示すものとなっていた。児童がじっくり自力で考え、グループで学び合う姿を見ることができた。一斉形態の学習でも、仲間に伝えよう、仲間の意見を聞こうという子どもたちの構えを見取ることができた。

1月下旬の、1、2、3年生の授業では、つつじが丘小学校の実践の、さらに確実な変化を見ることができた。指導案も、学習活動の欄を一わたりみれば、子どもたちの1時間の動きを十分に予想できる記述になっていた。また、子ども主体の学びづくりへの工夫を随所に見ることができた。すでにこの時点で、協同学習のモデルとして全国に発信可能な実践をいくつも見るようになるようになっていたのである。大きな変化であった。

それ以降の3年間、私は年に5、6度つつじが丘小学校を訪問してきた。教師の移動はあったが、つつじが丘小学校は子どもの主体的学びの文化を維持発展させてきた。一定の方式を確立して、それを踏襲していくというような実践は、必ずと言っていいほど停滞を呼び、形骸化していく。現状に満足することなくよりよい実践を追究していく構えが必要であるし、よりよい実践への想像力を絶やさないことが必要である。

つつじが丘小学校の教師集団は、教師の同僚性をみごとに育んできたように思う。よりよい実践をしたい、よりよい子どもの育ちを支援したいという、教師ならばだれでももっている思いを、互いに理解し合うことで仲間相互の信頼が生まれる。職員室の話題は当たり障りのない世間話から、教師本来の仕事に関わる内容に変わっていく。信頼に支えられた関係とはそのようなものである。そういった環境で仕事をする教師であってこそ、子ども同士の信頼関係、子どもと教師の信頼関係に配慮ができるようになるはずである。

つつじが丘小学校では、2007年度以降、教材面での積極的な挑戦が次々になされるようになってきている。教科書を教える教師から、教科書を通して本物の学力を育てる教師へと変化してきている。挑戦を促すのは、同僚性に支えられた教師集団の力である。協同学習の原理を踏まえた学習指導の進め方を基礎に、子どもの底力を育てる教材研究が深まってきている。今回の発表会では、その点にも注目していただけたらと思う。

なお、2005年度から、つつじが丘小学校のリーダーとして学校経営に努力されてきた山本校長先生は、今年度で勇退される。私は、つつじが丘小学校の先生方の研究態度に心動かされる一方で、山本先生の学校経営の手法にも学ぶところが多かった。お忙しい中、是非にと私がお願いしたこともあって、昨年度『校長学—教師の育ちを促す学校経営』、今年度『続・校長学—学びの学校文化を育む学校経営』の2冊の著書を一粒社から上梓いただいた。理論をもち、その実現を本気で図る校長が、今いかに必要か。全国の協同学習実践づくりのお手伝いで多くの学校を回る中、私はこのことを強く実感している。

力量あるリーダーと、同僚性を育みながら支え合う誠実なスタッフが織りなしてきたつつじが丘小学校の研究成果は、確かな子どもの育ちに向けて努力を傾けることこそ学校の仕事だと考える学校づくりにある。子どもは確実に幅広い力をつけてきている。「学校の自立」のありかたの好事例としても、つつじが丘小学校の実践は評価されるべきだろう。

すばらしい実践展開の事例に、身近に触れさせていただいたことに深く感謝している。あわせて、つつじが丘小学校の次のステップへの発展を楽しみにしたい。

I 研究の概要

I - 1 研究的実践スタート時の子どもの人間関係・学力・指導方法

私が名張市立つつじが丘小学校に赴任したのは、2005（平成 17）年④月で、当時の児童数は 5 月 1 日現在 6 4 2 名、4 年後の現在の児童数とほとんど変化していない状況であった。しかし、2009（平成 21）年 2 月の時点で、児童の実態を比較したとき、大きな変化に気付かされる。そのことを、「子どもたちの人間関係」「子どもたちの学力」「教師の指導方法」の 3 点から述べてみたいと思う。

1 子どもたちの人間関係

赴任先が内定した 3 月末日、前任者との引継ぎの中で、保護者の学校（としか言われなかったが、担任と管理職、特に、校長という意味が含まれていると解釈していた。）へのクレームが多くて、職員もビビッてしまっています。といった内容の話を聞かされた。が、それ以前に情報として入手していた中に、校長への厳しいクレームがあると聞いていたので、これから学校を預かるものとして最初に対面を果たし、学校への注文を聞く必要があると考え、赴任した翌日はその保護者への家庭訪問であった。そこから、本校での校長の仕事がスタートしたのであった。

家庭訪問で明らかになったことの発端は、やはり、学級内で起こった子ども同士の喧嘩で、やった、やられたという喧嘩の原因の水掛け論が嵩じてのこじれと、そのこじれた原因は、その一回限りのけんかだけでなく、過去に遡って何度か喧嘩を繰り返し（その相手だけでなく何人も）、そのたびに、加害者というレッテルを貼られ、自分の子どもの悪さばかりを非難されてきたことに対する反発も含まれての、こじれという結果になっていたのであった。そして、担任だけでは収まらず、学校はどう考えているのか、校長はどう考えているのか、という批判になり、更に、学校の対応に満足せず、教育委員会へ対応を求めるまでに発展していたのであった。

このことは、この当事者、また、この事案だけでなく、何度となく別な事案でも問題化し、その都度、担任、教職員、学校が振り回され、挙句は、教育委員会への直訴から、更に、学校が指導の名の下、批判され、教職員・校長とも不安になり疲れ果ててきていたのであった。

赴任した年度の着任式・始業式・入学式当日のことである。児童数が多く、着任式・始業式は運動場で行い、入学式は体育館で新 1 年生とその保護者並びに、5・6 年生・教職員で行ったのであるが、二つのことが印象に残っている。

一つは、着任式・始業式では子どもたちの聞く姿勢の弱さと、廊下・教室での私語の多さであった。

全体に聞く姿勢が弱く、常時隣の人とおしゃべりをしていて、前に立って話をしている人の話を聞いているのかどうか不明な状態で式が進行していた。当然、担任や担任外の教師がそばに行き注意をするが、注意をした時だけ話が止まり、居なくなるとまた話し始めるという状態であった。

式が終わり、教室に戻って行くとき、我先に人の波をかき分けて走る子、ワイワイがやがやとおしゃべりをして戻る子、教室前まで来ても廊下でウロウロして騒いでいる子等、一つひとつの行事に区切りをつけるでもなく、だらだらとしながら教師の大きな声での指示で動いていくという状態であった。当然、廊下・階段を全力で駆け回る子が多く、怪我の心配がつきまっていた。

二つ目は、保護者の学校不信がみられたことであった。

始業式が終わり教室に戻った6年生が、教室内でふざけっこから取っ組み合いになり、廊下側の窓ガラスを割ったのであるが、そのことを保護者に連絡すると、うちの子はなんで悪いのか、学校の対応に問題があると逆におこられてしまったのである。

子どもは子どもで自分の正当性を主張し、親はその言葉のまま受け取り、学校はうちの子ばかりをせめるという学校不信を、これまでの学校の対応の中で作られてしまっていたということであった。

4月のスタート時がこんな調子であったことから、当然、この後の一年間は想像に難くないと思うのである。

授業中は私語が多く、立ち歩き、口論、喧嘩があり、授業の中断、教室の飛び出し等が頻繁に起こり、職員室で仕事をしている教職員に、緊急に呼び出しがあり、教室に飛んでいったり、教室を飛び出した子どもを探しに行ったりと、職員室も常時出勤できるよう緊張状態になっていた。

更に、子どものことで保護者から電話が入り、クレーム対応に追われ、担任も本来の仕事に集中できず、教職員も過度の緊張状態で日々業務を進めていた。

この原因は、子どもたちの間に、良好な人間関係が築けていなかった（教師は人間関係作りに努力していたのであるが報われていなかった）ことに起因していたのである。が、当時は、日々の生徒指導・保護者対応に追われ、何故、そういうようになるのかも分からず、ただただ、大変な学校だからという思いで過ぎていたのであった。

2 子どもたちの学力

2005（平成17）年4月時点での学力調査（文部科学省や学校独自調査）のデータが無いので、正確なことは言えないが、子どもたちの学習意欲や態度、学習後の各教科毎のテスト結果、また、前年度末の学習成績の記録をたどって推測してみると、各教科目標の達成度には大きなばらつきが見られる。特に、国語科・算数科においては成績が偏っており、教科目標達成に関して、到達できている子と到達できていない子の差がはっきり出ており、それに、学習意欲や態度が重なっている。

また、それぞれの学年に上がるまでに、学級内で授業が成立しにくい状況を経験している学年の子どもたちの中には、段階ごとに学習を進めていく算数科でつまづいている子ども見られ、教師の努力にも係らず学年目標に達成できず、格差を広げていっている状況が見られた。

更に、目標達成が困難な子どもたちは、学習意欲を低下させ、学習態度にもむらが出、学級の全員が集中して取り組んだり、力を合わせて目標を達成していくモチベーションも高まりにくい状況であった。

当然、授業中はざわざわした雰囲気となり、特別支援にかかる子どもたちも過度に反応してしまったり、また、さまざまな原因で授業中しんどくなったりする子ども、喧嘩をして腹をたてて飛び出したりする子どもがあったりと、途中で授業を中断せざるを得ない状況が所々の学級で見られた。同じように、休み時間などは廊下を全力で走り回る子どもも多く、当たったりして怪我也見られた。

3 教師の指導方法

指導方法の転換を図ってきた現時点、2009（平成 21）年 2 月から遡って振り返ると、全員が教師主導型の教え込み授業を進め、教師対子ども一対一対応での授業展開であった。教師の一方的な熱意でもって、どの教師も必死になって教え込みの授業を展開していた。この授業風景を、初めて本校の授業を参観された杉江先生は、本書 6 ページからの原稿「教師の同僚性と学校の再生」の中で、次のように記されている。

10 月中旬に、初めてつつじが丘小学校の授業を拝見した。最初の教室に入ったおりの風景は今でも忘れられない。低学年のクラスの子どもたちが、南側は窓際一杯まで、北側は廊下側の窓一杯まで、机と机を離して、整然と座っていたのである。一人ひとりが切り離され、孤立し、学級が学習集団としての体裁をなしていない。机を合わせると子ども同士で騒いでしまう。騒がないように机を離す。・・・授業時間の経過とともに、後ろで観察しているだけで、子どもたちの中にストレスが増していく様子を見取ることができた。教師の一方的な授業を、孤立の中で聞いて分かる子どもは多くない。子どもたちは一分刻みで自分の力なさを思い知らされていたのである。

以上、概略であるが、2005（平成 17）年度のスタート時の様子である。教職員は現在以上に努力を傾け、子どもを良くしたいと必死に取り組んでいたのであるが、その努力とは裏腹に、現象として現れてくる子どもたちの姿は、教職員の努力を裏切ることの連続であったと記憶している。そして、その結果、更に追い討ちをかけるように教職員の努力が続けられたのであるが、結果は良ならず、その悪循環の中で子どもも教職員も喘いでいたのであった。同時に、子どもを介して伝わる、学級・学年・学校の姿は、保護者にとってマイナスのイメージが強く、我が子だけでも何とかしたいという保護者の願いが、これまたクレームとして学校に届けられていたのだと思う。

赴任した当時、子どもたちが見せるさまざまなマイナスの現象面を見るにつけ、それは、どの子ども良くなりたいという子ども自身の願いの裏返しであり、また、教職員の必死に努力を重ねる姿は、子どもを何とかして良くしたいという教職員の強い願いがあると、見取ったところから、学校経営の出発を図ろうとしたのであった。

（山本 美一）

I-2 研究の概要

この研究の前提には、本校がすべての教育活動を通して目指す「人間性豊かで、心身ともに調和のとれた、たくましい子どもを育てる」という学校教育目標があり、「ともに学び合い高め合える子」「自分のことが好きといえる子」「目標をもって前向きに取り組む子」という3つのめざす子ども像がある。

1 研究テーマ

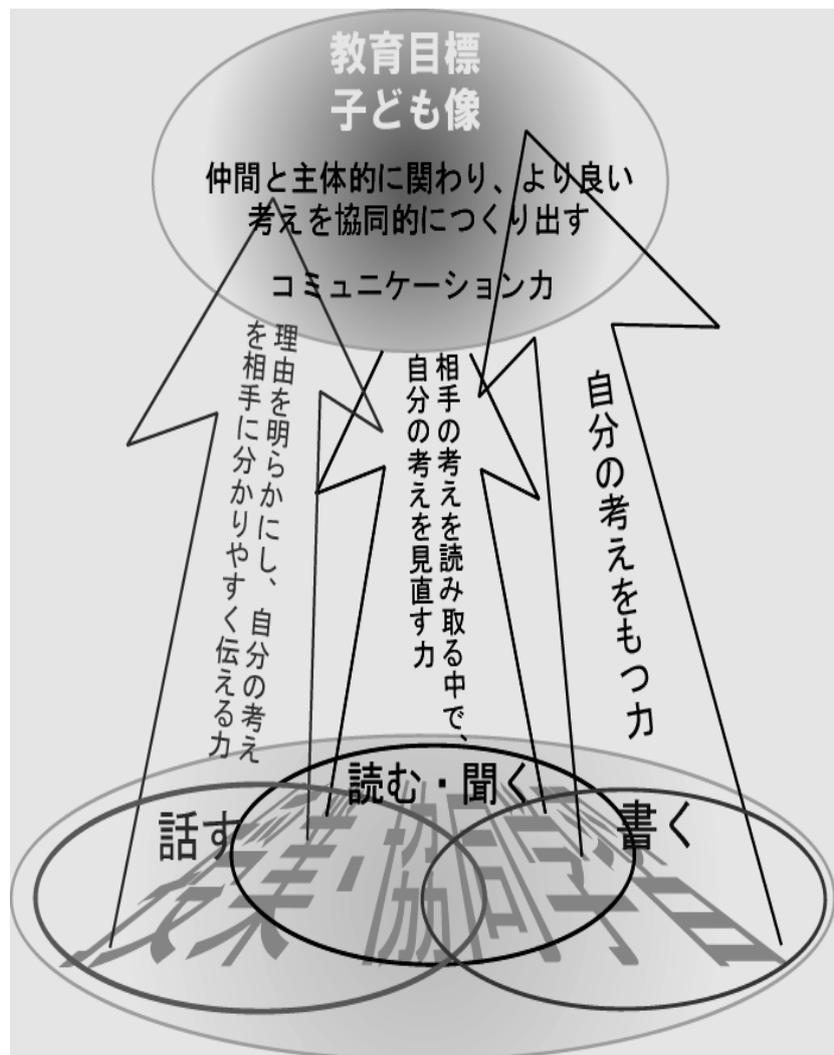
「仲間と学び合う中で、ともに高まる子をめざして」
～「読む」「話す」「聞く」「書く」活動を通して～

2 主題設定の理由

子どもの学力低下が最も関心の高い教育課題となってきた中で、未来に生きる子どもに必要なのは、「生きる力」や「確かな学力」を身に付けることである。一人ひとりの可能性を見つけ、社会の形成者としてのふさわしい資質を育成し、豊かな自己実現を図ることである。

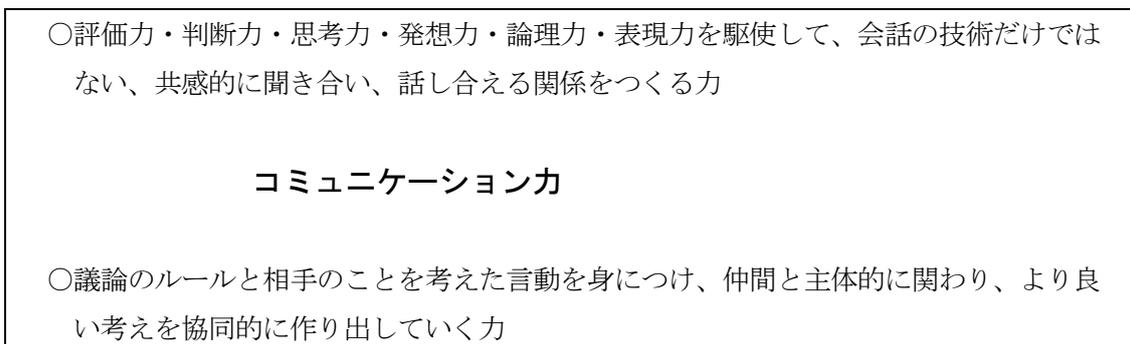
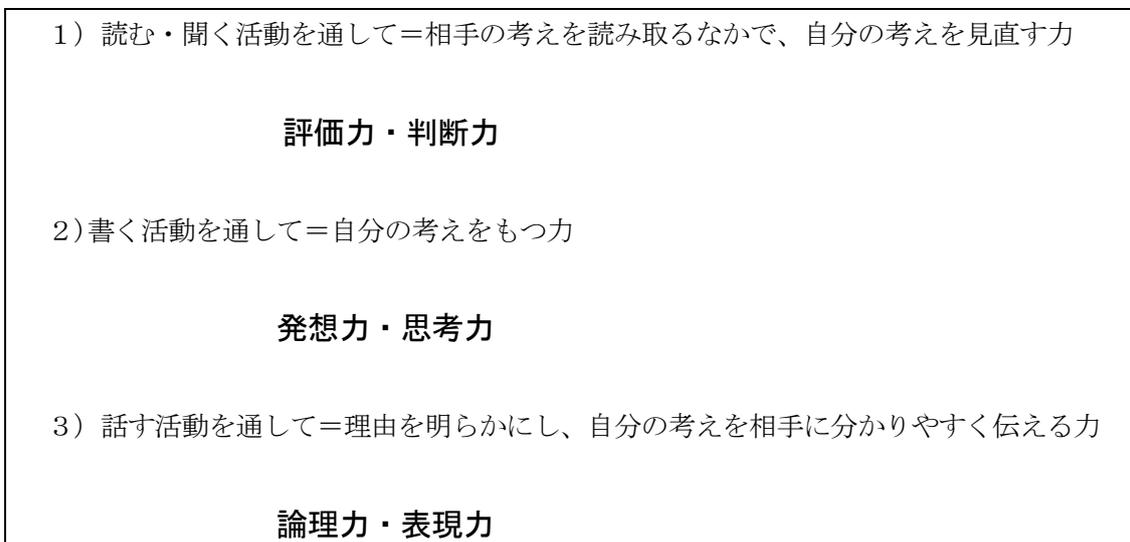
そのような中で、本校では副主題の「読む」「話す」「聞く」「書く」活動を通して、協同学習の手法を取り入れながら、学力の獲得と、互いに高め合う学びの実現を目指し、上記の教育目標とめざす子ども像に迫ろうとしてきた。そして、一つの課題を仲間と共に解決に向かう経験が、社会性を育て、現実の社会で生きる力をつけていくものである

と考える。そこで、目標をもって前向きに生きる子ども、将来に夢をもつ子どもの育成を願って、研究的実践を重ねてきた。

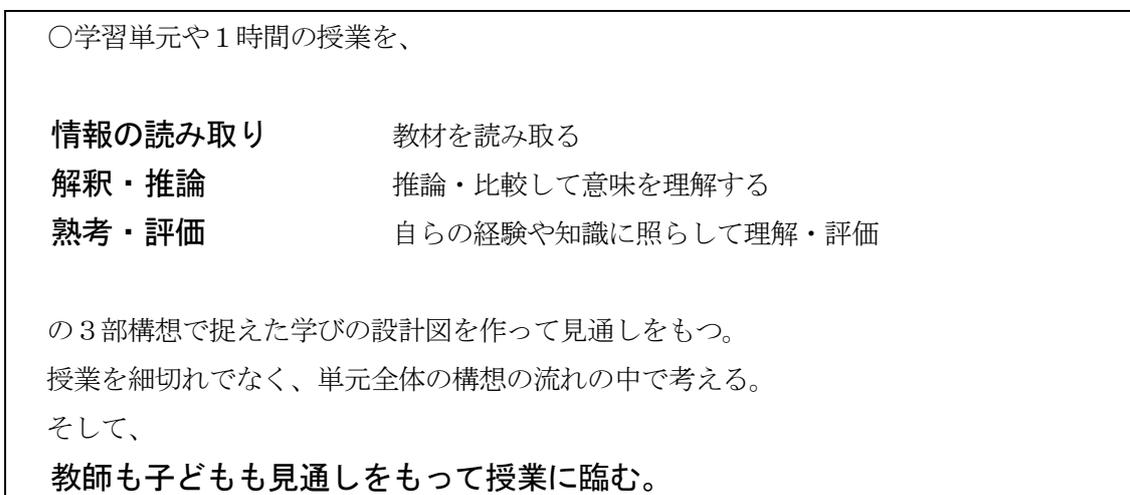


3 研究内容

(1) つけたい学力の明確化



(2) 見通しをもった単元構想



(3) 学びへの参加度を上げる協同学習の手法

授業展開の基本的な流れ

課題設定	各時間に設定した課題（題材との対話）をもとに、多様な考えを引き出す。
相互交流	ペアやグループによる学び合い（人との対話）により、考えを深める。
振り返り	学びの振り返り（自分との対話）により、次への課題解決の活動につなぐ。

4 考察とまとめ

教科目標の達成と望ましい集団を支える人間関係づくりを、授業の中で同時に機能させるために、個人・小グループ・一斉など、さまざまな形態を駆使した授業展開ができてきている。

そして、その話し合いを中心とした仲間との学び合いは、自分が仲間を高めているのだという有用感をもたせ、主体的な学習の動機づけにつながっていると考えられる。

さらに、単元のねらいや学習内容を明確にして見通しをもつことで、教師側にゆとりが生まれ、子どもも意欲的に学習に参加するようになってきている。

子どもの参加度を高めようとする取り組みにより、多面的に授業を組み立てることができるようになった。例えば、

- ・「ゴール」を見据えた課題の設定
- ・グループ交流での役割分担
- ・机の配置の工夫
- ・対立や比較を生む学習課題の文章表現のこだわり
- ・相互指名による発言リレー

などである。

職員の同僚性を高めることを目的として「私のレベルアップ術」の交流会を行なうことで、お互いが刺激し合い、レベルアップを図ろうという意識が生まれてきた。また、その中で、成長した子どもたちの姿も確認し合うことができた。

授業を子ども主体のものにするため、授業のゴールや手順をより明確に示していくなど、更に教師側の授業に対する意識変革を進め、日常生活や授業への参加度を増やす実践的研究を続けていかななくてはならない。

情報の読み取り、解釈・推論、熟考・評価の授業展開は、国際社会・成熟社会・移民社会に対応する人材を育むための学力を形成するということを踏まえ、授業づくりの発想の転換を今後も意欲的に進めていきたい。

5 概要の解説

本校の教育目標は「人間性豊かで、心身ともに調和のとれた、たくましい子どもを育てる」である。よく見かける教育目標であり、どこの学校も似たり寄ったりのことばが使われている。この「よく見かける」「似たり寄ったり」というのが、昨今の多くの子どもたちの実態と求められる能力を示していると思われる。逆に考えると、「自分をなかなか表現することができない」「友だちとうまく交わることができない」「自分の考えをもてない」実態があり、何か困難な局面に遭遇すると自分の力で乗り越えられないひ弱な子どもたちが多く存在するからこそ教育目標として掲げているということになる。

ただ、子どもたちは最初から「自分を表現できない」「友だちと交われない」「自分の考えがない」訳ではない。その方法を教えてもらっていないのである。では、その方法はどこでどのように教えるのかと考えた時、1日の大半を過ごす学校の効用を無視することはできない。また、学校生活の中のほとんどを占める授業の中にそれを求めることは考えてみればいたって当たり前のことであり、この時間を使わない手はない。「人間性豊かな」「心身ともにたくましい」子を作るのは、授業でなされるのがいちばん効率的で、効果的である。そして、「よく見かける」「似たり寄ったり」の教育目標がお題目で終わるのか、きちんとゴールとして設定され生きてはたらくものになるかという分かれ目にもなる。

では、その貴重な授業に何を求めるのか。授業で何をすれば「めざす子ども像」に迫れるのか。その前に、今までの授業では何がだめだったのかを考えてみる必要がある。これまでの一般的な授業では、教師が教壇の前に立ち、子どもに「教えて」いた。何を？。教科学習の中の知識を。では、学級活動では？。教師が子どもに指示を出し、その通りに子どもたちが動くことを求めていた。そして、どこに向かうのかゴールはどこにあるのか教えられもせず。そんな中で、一部のいわゆる「できる子」が教師に認められ、仲間からも認められてきた。この構図は、教師と一部の子どものキャッチボールである。そして、その一部の子も自分の考えで動いていたかといえど否としか言えまい。そこには「自分の考えをもつ」「自分を表現する」「友だちと交わる」などという要素は存在しない。よく言われる「確かな学力」や「生きる力」は育たないのである。

と考えると、自ずから答えは導き出される。これまでの授業でなかったものを作ればいいわけである。一部の子でない「全員」が、知識だけを得るのではなく自分で答えを導く授業、教師との関係だけを結ぶのではなく、これから共に生きていくであろう仲間ともに創り上げる授業、そしてどこに向かうのかを誰もが分かっている、それに向かって解決の階段を上っていこうとする授業。これらの授業が毎日行われるのと受け身的な授業が毎日行われるのとではその差は歴然である。1日5時間としても、200日で1000時間の積み上げである。「貴重な」授業という所以である。

いちばん分からなかったのは、そして他の学校でも躓いていると思われるのが、これらの要素のうちのどれを優先するのかということである。“鶏が先か卵が先か”ではないが、「授業改革」と「仲間づくり」はどちらが先なのか。本校の授業を見ると答えはひとつ、“同時達成”。もちろん、良好な人間関係がベースにある。しかし、「仲間づくり」ができないと、そればかりにこだわっていると次に進めない。子どもの成長は待ってくれない。そうやっているうちに1年が過ぎてしまう。社会では問題は仲間とともに解決するものである。仲間とともに解決できる授業を作れば、同時達成は相乗作用

しながら実現する。

同じような関係に狭義の「基礎・基本」と「応用力（活用力）」の問題がある。“「基礎・基本」ができていないのに応用力なんて無理”という声も聞こえてくる。これも、結論から言えば“同時達成”である。問題解決するために基礎・基本が必要であるということは活用している間に自ら気づく、もっといえば活用している間に基礎・基本が身につく。さらに言うなら、活用できない「基礎・基本」は単なる「知識」であり、「基礎・基本」ではない。活用することができてこそ「基礎・基本」であると考え。

さて、本校の研究の具体的な内容は現在3つ。

まず、授業でどんな力をつけたいのかを明確にさせる。

最終的には「ひとつの課題を仲間とともに解決に向かっていく、または答えを導き出し創り上げていく力」。これを「コミュニケーション力」と呼んでいる。狭義の「コミュニケーション力」ではなく、仲間の存在（考え）を尊重し、それをも自らに取り込みながらさらに自らをも高めていく過程を通して、より良い考えを作り出していく力である。これは奇しくも新しい学習指導要領の中の「言語活動」とリンクしている。本校でも窓口は国語科としているが、国語科のみにとどまらず、あらゆる教科や教育活動で自然的に導入されている。その手順としては、①「読む」「聞く」活動を通して相手や教材の考えを読み取りながら自分の考えを見直す（評価力・判断力）。②「書く」活動を通してじっくりと自分を見つめ直し、自分の考えを再構築する（思考力・発想力）。③「話す」活動を通して理由を明らかにし、相手に分かりやすく伝える（論理力・表現力）。これらは、便宜上①②③としたが、そして授業を作っていく点で流れ的に①②③としていくことが多いが、必ずしもこの順になるわけではない。相互にスパイラル作用がはたらき、「コミュニケーション力」に到達する。

次に、単元や1時間の授業のゴール設定を明らかにさせる。

授業は子どもたちのものである。子どもたちにつけたい力をつけるためのものであるから、なにができればOKなのか、授業の主体者である子どもたちがゴールを知っているのは当然のことである。また、乱暴な言い方をあえてするならば、ゴールに到達できればベストであるが、到達できなくてもなぜ到達できなかったのか、どうすれば到達できるようになるか考えられればOKであろう。この単元でできなくても、次の単元でできるかもしれない。今年できなくても、来年になればできるかもしれない。つける力は「コミュニケーション力」であるのだから、トータルとして考えればよいと思う。ゴールに到達することよりも、その過程においてどう考え、どう考えを仲間と共有し、どう自分を表現して（伝えて）どんな力をつけたかを大事にしたいと考える。

さらに、学びへの参加度を上げるための協同学習の手法を取り入れる。

貴重な授業を一部の子どものものにしないために、全ての子どもたちが「学び」を獲得するために、学べる授業を設定する。それは、練り合うことのできる具体的な「課題の設定」であり、お互いの考えを聞くことで自分の考えを深めることのできる「相互交流」であり、そのあともう一度自分に返してさらに自分の中で深く考えるための「振り返り」である。

これらの取り組みを進めて大きく変わったことは、“子ども”であることは間違いないが、“教師”も飛躍的に変化した。教師がどこにいるか分からないという授業が増えた。と同時に子どもが前面に出てくるから、子どもの満足度が高い。6月と11月に実施した学校生活意欲調査（Q-U）では、2回

とも満足度が学校全体で 86%というとんでもなく高い数値を得た。保護者アンケートの「子どもは学校へ行くのが楽しいと言っている。」という項目でも、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が合わせて昨年度 92%、今年度 1 回目 92%、2 回目 93%である。ここからも、子どもの満足感はどこにあるのかが分かる。子どもは授業にみんなで参加してみんなで創り上げることが楽しいと感じるのである。そして、それが学校の第一条件なのである。

その満足感を得るために、教師は「仕掛け」をする。子どもたちの多様な考えを引き出し、対立や比較を生むような具体的な課題設定をする。みんなが参加できるように役割分担をきめ細やかにする。お互いの考えをより理解するために机の配置を工夫したり、発言の方法を考える。しかし、これらは全て枝葉末節の手段にすぎない。教師が子どもにどんな力をつけなければならないかをどこまで理解しているかに全てが集約される。ともすれば、教師はその「仕掛け」の部分に目を向けがちである。研究会でも、質問は“どのようにグループを決めますか？”“グループは何人が適当ですか？”“子どもたちで話し合わせて教師のねらう結果に到達しない時はどうしますか？”“子どもたちが教材の作者の意図と違う主題に到達したらどうしますか？”などなど。それも大切かもしれないが、教師が本当にねらっている子どもの姿がはっきりともっていさせずれば、それらの質問にあるような現象が出てきても試行錯誤のうえ修正は自然とできるものであるし、ぶれてしまうような課題設定はしないはずである。私たちは、単なる見かけの「授業改革」ではなく、「授業改革」を手段とした教師の「意識改革」「教育観改革」を通して、“これからの時代を生きていく力をもった子どもたちを育てる”ことを目指しているのだから。

課題はまだまだ山積している。しかし、子どもの力はまんざらでもない。というより無限である。子どもたちを過小評価してはいけない。課題はむしろ教師の方にあるだろう。教師の意識改革ができさせずれば、学校教育もそれこそ“まんざらでもない”。

(相楽代利子)

I - 3 全体発表資料

目次
学校教育目標
めざす子ども像
研究の概要
Ⅰ. 研究テーマ
Ⅱ. 主題設定の理由
Ⅲ. 研究内容 1. 学力
①読む・聞く／②書く／③話す
2. 単元構想
学びの設計図
3. 協同学習
授業展開の基本
Ⅳ. 考察とまとめ
同時達成／有用感／参加度／同僚性／意識変革／社会に対応する人材

学校教育目標 人間性豊かで、 心身ともに調和のとれた、 たくましい子どもを育てる	学校目標は、人間性豊かで、心身ともに調和のとれた たくましい子どもを育てる
めざす子ども像 ともに学び合い高めあえる子 自分のことが好きと言える子 目標をもって前向きに取り組む子	めざす子ども像は、「ともに学び合える子」「自分のこ とが好きと言える子」「目標をもって前向きに取り組む 子」です

一度積み上げた ものを壊すには、 かなりの勇気と エネルギーが 必要です。 しかし…	プロローグです。 これまで、長い年月をかけて積み重ねてきたものを崩してしまうことは、 大変な勇気が要ります。それは教育実践でも同じですし、このプレゼンで もそうです。このプレゼン原稿、実は2作目です。苦労して作ったからこ そ、リセットするにはエネルギーが要りました。 「しかし・・・」の後に続く言葉は、「それをしなければ何も変わらない から」という脅迫的な意味合いではなく、「そうすることで、とても楽にな りますよ」というような意味で付け足したのです。本校のリセットぶりは、 授業を参観していただいて伝わりましたか？このプレゼンでさらに、確信 していただけたらいいなと思います。
---	--

I. 研究テーマ

**「仲間と学び合う中で、
ともに高まる子をめざして」**

～「読む」「話す」「聞く」「書く」活動を通して～

研究テーマは、「仲間と学び合う中で、ともに高まる子をめざして」、サブテーマを「読む」「話す」「聞く」「書く」活動を通して、としました。

II. 主題設定の理由

学力の低下
希薄な人間関係

確かな学力
良好な人間関係

互いに高めあう学びの追究

現実の社会で生きる力
前向きに、将来に夢をもつ子ども

学校教育に求められるのは、基礎的・基本的な内容を基盤とし、自ら学び、考える意欲に支えられた豊かな人間性や生き方を育む取組でしょう。それは裏返せば、急速に激しく変化する社会自体に欠けているものだからです。

本校でも、基礎学力や学習習慣、子ども同士のつながりについて問題点を抱えていました。その理由を、児童数が多いからとしていた観がありました。そして、確

かな学力と良好な人間関係と別々にして、取り組みを進めてきていましたが、協同学習に出会い、その手法を取り入れながら、互いに高め合う学びを追究することで、その2つが同時に手に入るのではないかと考えました。私たち大人が予想しない、厳しい現実の社会で生きていくための力を獲得し、将来に対しいつも夢をもてる子どもの育成を願って、研究と実践を進めてきました。

III. 研究内容

1. 学力
2. 単元構想
3. 協同学習

研究内容について、
3つのキーワードをもとに説明していきます。

Ⅲ. 研究内容

1. 学力

学力観の意識改革

コミュニケーション力

**仲間と主体的に関わり、
より良い考えを
協同的に作り出す力**

報の交換といった狭い意味の能力や技能などではなく、画面に示したように、仲間というコミュニティーの中に自ら進んで関わり、仲間との切磋琢磨を通じてより良い考えを作り出せる力を指します。

研究主題の設定でも話したように、基礎学力の定着だけを目指す取組では立ち行かなくなっている時代です。

学力観が、世界的な変化を突きつけられているのです。

自分の身の回りの様々な出来事に関連付けて考えられる力をつけることが、今、必要であると考えます。

一つ目は、学力です。

先の学校教育目標やめざす子ども像に迫るために、研究的実践を重ねてきました。

学びの中で、子どもたちにつけたい力は何かを明確にし、それがどのように生きて働く力へつながるのか？という視点から、子どもたちにつけてほしい力を、「コミュニケーション力」としました。コミュニケーション力こそが、子どもたちに獲得して欲しい力と考えました。これは、いわゆる、会話や情報

Ⅲ. 研究内容

3つの柱で支える 1. 学力

各学年でつけたい力を明確化

①読む・聞く活動

②書く活動

③話す活動

その学力を3つの柱で支えます。

「各学年でつけたい力」を明確にし、①②③の活動を通して取り組んできました。

Ⅲ. 研究内容

1. 学力

①読む・聞く活動

相手の考えを読み取る中で、
自分の考えを見直す力

評価力・判断力

教科書も、描かれた絵も図も、友だちの考え、人の意見なども、あらゆる情報は学びのためのテキストと考えられます。

テキストを読んだり、相手の考えを聞いたりする中で、自己評価・相互評価を通して、自分の考えを見直すことができる力としての「評価力・判断力」を育てます。

Ⅲ. 研究内容

1. 学力

②書く活動

自分なりにとらえ、
自分なりの考えをもつ力

発想力・思考力

人間は言葉や文章でものを考えます。「書く」ことによって、自分の考えをもち、深く思考する力を育てます。それが「発想力・思考力」です。

Ⅲ. 研究内容

1. 学力

③話す活動

理由を明らかにし、
自分の考えを相手に分かりやすく伝える力

論理力・表現力

相手意識をもち、「話す」ことを通じて、理由づけながら分かりやすく説明する力「論理力・表現力」を育てます。

Ⅲ. 研究内容

1. 学力

指導案とリンク

単元の目標の上にその学年でつけた力を明示

1. 単元名 ごんぎつね
2. 目標

4年生でつきたい力

① 目的に応じ、文章や図表などに書いてあることを正しく読み取ることができる。(評価力・判断力)

② 明確な根拠をもとに、自分の考えを持つことができる。(思考力・発想力)

③ 自分の考えを筋道だてて、相手に分かりやすく伝えることができる。(表現力・論理力)

- ・ 7つのポイントに沿って、事件に着目しながら、登場人物の心情の変化を読み取る。・・・①
- ・ 最後の場面が続くごんと兵十のその後について、自分なりの考えをもち物語を書く。・・・②
- ・ 自分たちの考え方を確認しより深い考えを得るために、5年生に『ごんぎつね、その後』物語を伝える。・・・③

4年生の「ごんぎつね」の実践に沿って、具体的に説明します。

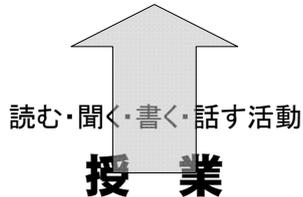
学習指導案の「目標」の項目に、「4年生でつきたい力」を明記しました。学習指導案の中に各学年の「つきたい力」として、1年から6年まで、系統的に示してありますので、ご覧ください。①、②、③は、先ほど述べた3つの学力を示しています。それを常に最終目標としながら、この単元でつきたい力を「単元の目標」として下に書きます。

Ⅲ. 研究内容

1. 学力

コミュニケーション力

仲間と主体的に関わり、
より良い考えを協同的に作り出す力



研究紀要の中のイラストにもあるように、3本の柱は協同学習の方法を生かした授業の上に立っています。授業が基盤です。

評価力・判断力・発想力・思考力・論理力・表現力を駆使して、コミュニケーション力を育成し、変化の激しい社会に対応できる学力を目指しています。

Ⅲ. 研究内容

2. 単元構想

学びの設計図で見通しをもつ

指導計画で
ワークシートで
教室掲示で

まずは、単元全体を見通すことの意義についてお話します。

いわば「学びの設計図」を作るということです。

教師側は、学習指導案の中の指導計画で見通します。指導案集をご覧頂くとお分かりのように、1ページを費やして、詳しく計画を立てています。児童の側は、授業で配るワークシートや教室の掲示で、単元の流れを視覚的に訴えます。

Ⅲ. 研究内容

2. 単元構想

学びの設計図で見通しをもつ

- 1次 読み取る
- 2次 考えをもつ
- 3次 伝える

その流れは、基本的に3部構成になっています。

情報を読み取る段階、考えをもつ段階、相手に伝える段階です。

Ⅲ. 研究内容

2. 単元構想

学びの設計図

1次 読み取る

2次 考えをもつ

3次 伝える

「ごんぎつね」授業の流れ 名前「」

一 次 ○学習のめあてと流れをつかもう。

○七のポイントをとりあげ、事件や登場人物の心情の変化を読み取ろう。

① 教材文を読んだ感想を交流しながら、五つの事件に分け、学習の見通しを持とう。

② 兵十との関わりの中で、ごんの心情を事件から読み取って、一文に表そう。

③ 五つの事件の読み取りから、物語のクライマックスをとらえ、まごの一文を書こう。

二 次 ○その後のごんと兵十について、自分なりの物語を作ろう。

① 「ごんぎつね」の後の物語について、五年生「なるほど」と言ってもらえるものを選びよう。

② 「ごんぎつね」の後の物語を三人組で作ろう。

三 次 ○自分の物語をすじ道立てて、五年生に分かりやすく伝えよう。

① 学年間で、五年生向けの発表の練習をしよう。

② 五年生に「ごんぎつね」の後の物語を伝え、感想や意見を交流しよう。

③ 五年生との交流から新しく学んだことをクラスで発表しよう。

再び、「ごんぎつね」の授業を例にとります。

これは、「ごんぎつね」の学習の第1次の1時間目に配ったプリントです。

教室には、模造紙にも同じものを書いて掲示しています。

教師が言い出すまで、または次の時間になるまで自分たちが何をするか分からない。恥ずかしながら、そんな進め方を私自身数多くやってきました。

しかし、単元全体を見通すことで、自分たちの学習の道筋と、たどり着くべき自分をイメージできます。これは学びの意欲を維持させるのに大きな力になります。

子どもだけでなく、教師にも気持ちに余裕ができます。

Ⅲ. 研究内容

2. 単元構想

学びの設計図

1次 読み取る

2次 考えをもつ

3次 伝える

「ごんぎつね」授業の流れ 名前「」

一 次 ○学習のめあてと流れをつかもう。

○七のポイントをとりあげ、事件や登場人物の心情の変化を読み取ろう。

① 教材文を読んだ感想を交流しながら、五つの事件に分け、学習の見通しを持とう。

② 兵十との関わりの中で、ごんの心情を事件から読み取って、一文に表そう。

③ 五つの事件の読み取りから、物語のクライマックスをとらえ、まごの一文を書こう。

二 次 ○その後のごんと兵十について、自分なりの物語を作ろう。

① 「ごんぎつね」の後の物語について、五年生「なるほど」と言ってもらえるものを選びよう。

② 「ごんぎつね」の後の物語を三人組で作ろう。

三 次 ○自分の物語をすじ道立てて、五年生に分かりやすく伝えよう。

① 学年間で、五年生向けの発表の練習をしよう。

② 五年生に「ごんぎつね」の後の物語を伝え、感想や意見を交流しよう。

③ 五年生との交流から新しく学んだことをクラスで発表しよう。

そして、単元全体を3つの段階に分けて、設計図を作ります。赤字で示した言葉は、OECD調査のPISA型読解力の定義・特徴を参考にしています。

テキストにある情報を正確に読み取り、その情報がどのような意味をもつのかを考え、自らの知識、考え、経験に照らして、工夫して表現する学習までを1単元として考えています。

文科省は「読解力向上プロ

グラム」の中の重点目標で、次のように、各学校で具体的に改善するように求めています。

1. テキストを理解・評価しながら読む力を高める取組の充実
 2. テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取組の充実
- つまり、「テキストを単に読むだけでなく、考える力と連動した形で読む力を高める取組を進めていくことが重要である」ということです。

Ⅲ. 研究内容

2 単元構想

見通す 単元全体

1時間の授業

教師も子どもも見通しをもつ

イメージができる
ゆとりが生まれる

見通しをもつ、もたせるだけで、子どもの学びも教師の意識も大きく変わります。

単元だけでなく、もちろん、1時間の授業でも見通しをもつことは有効です。

次はその1時間の授業の展開について、説明します。

Ⅲ. 研究内容

3. 協同学習

授業展開の基本

課題をつかむ

仲間と交流する

学習を振り返る

授業では、協同学習の手法を取り入れながら、課題と向かい合い、自分の考えを大切にしながら、ペアやグループ学習を通して、深め高め合う学びの授業を目指しました。

特に、仲間との交流は「3人寄れば文殊の知恵」的な効果にとどまりません。

仲間のために役立っている自分を好きになる。

自分を高めてくれる仲間が好きになる。

あるクラスの学級目標にも掲げてありますが、「仲間のおかげ」の気持ちが広がり、良好な人間関係が出来ていくと思います。

Ⅲ. 研究内容

3. 協同学習

1時間の授業の展開

課題をつかむ

仲間と交流する

学習を振り返る

個人 五分	全体 十分	グループ 十分	グループ 十五分	課題 「ごんぎつね ワークシート 二」(名前)
振り回りを書く。	話し合い、1、2個のパターンを決める。	発表する。	◎と△を1ずつ選ぶ。 ホワイトボードに、理由も書く。	話し合った文に続く物語として、5年生「話し合っ」て選ぼう。 最後の文に続く物語として、5年生「話し合っ」て選ぼう。
振り返り				
相互交流				
課題設定				

授業の基本的な展開は、次のようになっています。

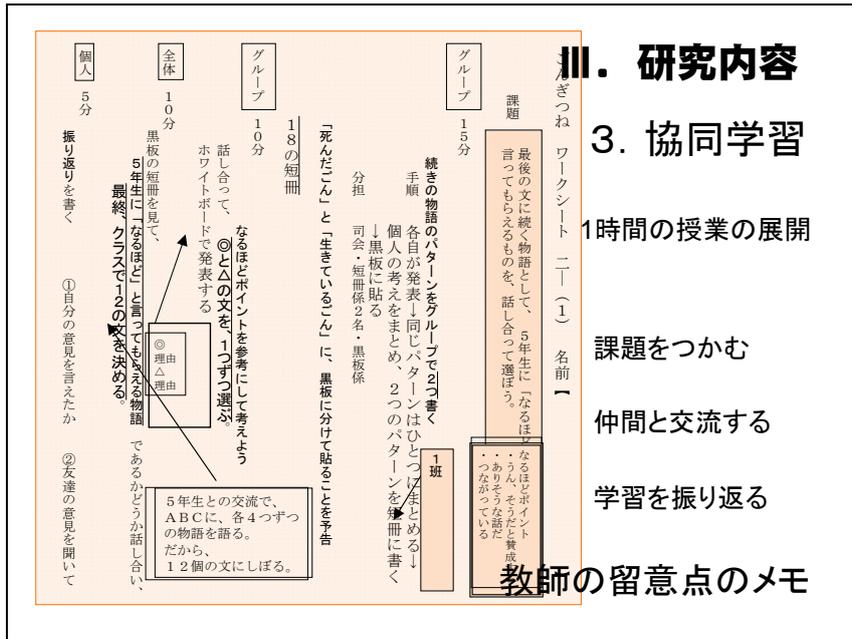
本時の流れと学習課題をつかむ。

ペア、グループ、全体など、目的に応じた形態で仲間と交流する。

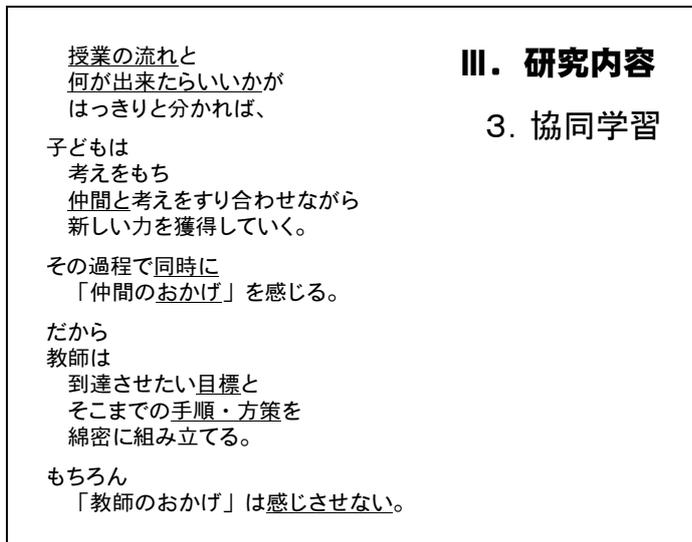
自分たちの成長を振り返る。

画面は児童用のワークシートです。1時間の授業で学習する内容をつかませます。視覚的に手で助けきますし、子どもたちが自分たちで進めていくた

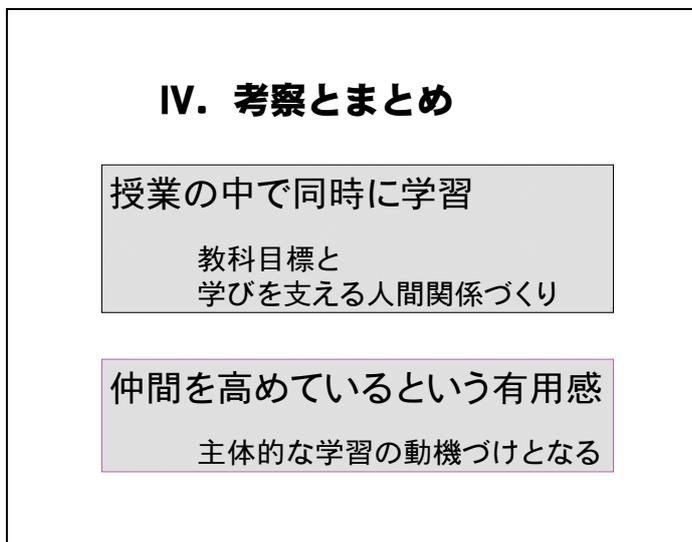
めの地図の役割を果たします。それがもっとも大切なことです。自分たちで学んでいる実感をもたせること、です。



教師用の「1時間の授業の展開」を、児童用ワークシートを基に作ってみました。
発問の留意点なども書き込んでいます。



本校の研究は、一言で言えば授業の改善です。
改善のための実践を続ける中で、分かってきたことをまとめてみました。
次の「考察とまとめ」では、詳しく項目ごとにご説明します。



学習指導案を立てるとき、教科としてつけなくてはいけない力と、人間関係づくりでつけたい力、の2つを、常に意識してきました。
自分が仲間の役に立っているという自己有用感、その重要性は早くから言われています。
協同的な学びはそれを実感させ、かつ、進んで学ぼうとする態度を育てていきました。

IV. 考察とまとめ

授業への参加度

机や椅子の配置の工夫、
グループ内での役割分担など

職員の同僚性

お互いが刺激し合い、
レベルアップを図ろうとする仲間意識

目的に応じた学習形態のなかの、さらに机の配置や、役割分担などの工夫により、一人ひとりの授業への参加機会が増えました。

もちろん、参加度のアップは、学習形態を工夫しただけが理由でないことを付け加えておきます。

「わたしのレベルアップ術」と称して、校内研修会で、互いの技術やノウハウを交流しました。そのとき、成長した子どもの姿も交流できたことは嬉しい想定外でした。

IV. 考察とまとめ

授業への意識変革

子ども主体の授業づくりへ

社会に対応する人材の育成

予測不能の未来社会だからこそ

これまで話してきた、学びの見通しをもたせることや、協同学習の手法を取り入れることは、子どもが自ら考えていける授業づくりのためのひとつの試みです。

今後も授業改善に向けた取り組みをしていかななくてはならないと、決意を新たにしているところです。

そして、大人の責任として、子どもたちが新しい未来で逞しく生きていけるような学力を獲得させなければなりません。

これからの
予測不可能な社会に
漕ぎ出していくのは、

まぎれもなく
目の前の
子どもたちなのです。

エピローグです。

ご清聴、ありがとうございました。

(研究主任 岩森 進)

Ⅱ つつじが丘小学校の実践

1 1年生の実践

第1学年 国語科学習指導案

指導者 井戸本与利子 窪田幸代 増田宣子、上谷ゆかり、間邪陽美

(1) 単元名 ちがいをかんがえてよもう 「どうぶつの赤ちゃん」

(2) 目標

1年生でつきたい力

- ① 書かれている事柄の順序や場面の様子などに気づきながら読むことができる。(評価力・判断力)
- ② 自分の考えと同じところ、違うところを見つけることができる。(思考力・発想力)
- ③ 感じたこと、思ったことをわかりやすく伝えることができる。(表現力・論理力)

- ・いろいろな動物を興味をもって調べ、意欲的にカードに書いて来年の1年生や友だちに知らせる。
- ・ライオンとしまの赤ちゃんの特徴や違いについて、時間の経過にそって比較し、大体的内容を読みとる。・・・①
- ・カードにしたい動物の赤ちゃんについて、他の動物や親と違うところを中心に、書くのに必要な事柄を集める。・・・②
- ・教材文を参考にして、動物の赤ちゃんについて語と語や文と文との続き方や主語と述語の照応に注意して書く。・・・③

(3) 指導について

動物の世界は子どもにとって大変興味深い世界である。発見や驚きを大切にしながら楽しく読み進めていきたい。また、学習のゴールを「来年の1年生に『どうぶつくらべカード』をプレゼントしよう!」とし、自分たちで動物の赤ちゃんや動物について調べ、文に書きたいという意欲づけを図る。相手意識・目的意識のはっきりした活動を大切にするには、ゴールを明確にすることが重要と考えた。そうすることで、学習意欲がさらに高まり、学習成果を児童自身が体感できる場になる。これまでグループでいろいろなカード遊びをし、遊びを通して五感を生かし、集中力を高めたり読み取る練習をしたり、友だちとともに伸びる活動を取り入れてきた。そのカード遊びの楽しさを来年の1年生にも伝えたいという思いも大切に学習を進めていきたい。

本教材は、既習の2つの説明文に比べ、説明部分が長くなっている。「対比」しながら、今までの学習を生かして読み進めていきたい。また、様子を表す大事な語句や時間を表す言葉が繰り返し記されている。それらの言葉を手がかりに読み進めることを学んでいく。時間経過を表す具体的な数値は、時間的な順序、事柄の順序などを考えるには重要であるので、注目させたい。さらに、読み取った内容を比較させることで、読み取りをただ並べるといった段階から一歩進め、比べるときに両者の相違点を意識させていく。書く活動では、肯定・否定の表現も対比的に捉えながらこれらの表現も生かしていきたい。カードを作る活動では、グループを活用することでお互いの良さや苦手なところを補い合い、助け合いながらとりくませたい。その際、子どもたちの意欲を尊重し、必要最小限の支援にしていきたい。また、動物の赤ちゃんについての関心を高めるため、1月を「動物Week」とし、動物に関係した本を学級に用意し関心を高めたい。

(4) 単元の指導計画と評価計画 (全 11 時間)

次	目 標	時数	学習活動	評価
1次 3時間	<ul style="list-style-type: none"> ・学習のめあてと流れをつかむ。 ・「来年の1年生にプレゼントしたい。」という意欲をもつ。 ・本文の大まかな内容をつかむ。 	<p>1</p> <p>2</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『どうぶつくらべカード』を作る計画を立てる。 ・声を聞く、写真を見る、赤ちゃんの重さを確かめるなど五感を使って、読み取った内容を吹き出しに書く。 ・グループでクイズを出し合い、分かったことを確かめ合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の流れがわかる。(関心・意欲・態度) ・本文の大まかな内容を理解して読める。(評価力・判断力・思考力・発想力) ・文章の構成が分かり、比較して読むことができる。(評価力・判断力)
2次 2時間	<ul style="list-style-type: none"> ・五感と想像力を働かせて、動物の赤ちゃんの違いを考える。 ・相手に伝えるために大事なことは何かを考えて書く。 	2	<ul style="list-style-type: none"> ・教材文から「どうぶつくらべカード」を作る。 ・違いのポイントを押さえられるようにワークシートに書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読み取った内容を整理することができる。(評価力・判断力・思考力・発想力) ・カードにまとめることができる。(思考力・発想力)
3次 6時間	<ul style="list-style-type: none"> ・読み取ったことを生かして、グループで相談しながら、書きたい動物の特徴について違いを意識してカードに書く。 ・調べたことからキーワードになる言葉を選ぶ。 ・出来上がったカードでカードゲームを楽しむ。 	<p>1</p> <p>1</p> <p>2</p> <p>2</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『どうぶつくらべカード』に入りたい動物を決め、グループに分かれ調べる。 ・カードにのせたいこと・伝えたいことを決める。 ・キーワード(カタカナ・漢字・数字)に着目し、簡単な説明文を書く。【1・2組】 ・写真や絵と合わせたカードに仕上げる。【3組】 ・学級でカードゲーム大会をし、来年の1年生にプレゼントできるようアドバイスし合い、よりよいものに直す。(本時1/2時)【4組】 	<ul style="list-style-type: none"> ・『どうぶつくらべカード』に入りたい動物を決めることができる。(評価力・判断力) ・ちがいを見つけて内容を決めることができる(思考力・発想力) ・キーワードを見つけ、説明文をかくことができる。(表現力・論理力) ・グループで話し合い、カードを仕上げるができる。(表現力・論理力) ・アドバイスできる。(表現力・論理力) ・さらによいものにグループで直すことができる。(思考力・発想力)

(5-1) 本時の指導 【1組】

1) 目標

- ・動物の赤ちゃんの特徴について、時間の順序に従い、比べる観点に沿って、簡単な説明文を書くことができる。
- ・グループで話し合っ、知らせたいことを決めることができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
8分 一斉	1. 本時の学習を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の手順を知る。 ・新1年生にプレゼントするために、グループで考えて、説明文を書いていくことを確認する。 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: 80%;"> <p>どうぶつくらべカードをつくろう。</p> <p>どうぶつの赤ちゃんのときのようす、大きくなっていくようすがわかるように、グループであわせて3つの文でせつめいしよう。</p> </div>			
30分 個人 グループ	2. 伝えたい動物について、赤ちゃんの時の様子、大きくなっていく様子が分かるように、説明文を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・動物図鑑など参考書籍を見て、知らせたいことを書いていく。 ・キーワード（かたかな、漢字、数字）に着目して、説明する文を考えて書いていく。 ・基本的には、個人で書き進めるが、必要に応じて、グループで相談して仕上げていく。 ・自分の書いた説明文や相手の説明文を読み合っ、カードに書きたい文になっているか確かめる。 ・クラスでカード集を作り上げる意識をもたせるためにも出来上がったグループがあれば集まり、他のグループに気づいたことを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・参考書籍を見て、意欲的に活動できたか。 ・伝えることを意識して、丁寧に書いているか。 ・キーワードに着目して書いているか。 ・必要に応じて話し合い活動に参加できたか。
5分 個人	3. 活動を振り返り、カードに書く。		<ul style="list-style-type: none"> ・カードに印をつけたか。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: 80%;"> <p>どうぶつの赤ちゃんのときのようす、大きくなっていくようすがわかるように、グループであわせて3つの文でせつめいできたか。</p> </div>			
2分 一斉	4. 次時の学習を知る。		

3) 授業の視点

- ・参考書籍を見て、動物の赤ちゃんの特徴を新1年生に知らせる説明文が書けたか。
- ・必要に応じて話し合っ、グループで説明文を作ることができたか。

(5-2) 本時の指導 【2組】

1) 目標

- ・どうぶつへの興味・関心を高め、違いを意識してカードに書くことができる。
- ・教材文を参考にして、どうぶつの赤ちゃんの違いについて、キーワード（かたかな・漢字・数字）に着目し、グループでわかりやすく簡単な説明文を書くことができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
8分 一斉	1. 本時の学習を知る。	・最初は個人で、次にグループで活動することを確認する。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>どうぶつくらべカードをつくらう。</p> <p>どうぶつの赤ちゃんのときのようす、大きくなっていくようすがわかるように、グループであわせて3つの文でせつめいしよう。</p> <p>キーワードにちゅういして文をかこう。</p> </div>			
15分 個人	2. キーワード（かたかな・漢字・数字）を見つけて書く。	・動物図鑑など参考書籍を用意しておく。 ・どうぶつの赤ちゃんの違いをつかんでいる児童、キーワードをうまく使っている児童を評価する。	
15分 グループ	3. キーワード（かたかな・漢字・数字）を確認する。 キーワードを入れた文をグループでつくる。	・「おたすけ」「ヒント」（各2回まで）「OK」カードを使ってもよい。 ・クラスでカード集を作り上げる意識をもたせるためにも出来上がったグループがあれば集まり、他のグループに気づいたことを伝える。	・話し合い活動に積極的に参加できたか。 ・意欲的に活動できたか。
5分 個人	4. 活動を振り返り、カードに書く。		・カードに印をつけたか。
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>どうぶつの赤ちゃんのときのようす、大きくなっていくようすがわかるように、グループであわせて3つの文でせつめいできたか。</p> <p>キーワードにちゅういして文をかけたか。</p> </div>			
2分 一斉	5. 次時の学習を知る。		

3) 授業の視点

- ・話し合い活動に積極的に参加できたか。
- ・キーワード（かたかな・漢字・数字）に着目して、グループで相談することができたか。

(5-3) 本時の指導 【3組】

1) 目標

- ・グループで助け合いながら、意欲的に「どうぶつくらべカード」を仕上げることができる。
- ・説明文を読み合い、よいところや直したらよいところをお互いに伝え合うことができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
8分 一斉	1. 本時の学習を知る。	・グループで活動することを確認する。	・活動内容がわかったか。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: 80%;"> グループで、みんなにつたわるおはなしになっているか 5つのポイントでたしかめて、どうぶつくらべカードを上げよう。 </div>			
15分 グループ	2. 役割分担して書いた文をグループで読み合う。	・それぞれが書いた文を一人ずつ見ながら読み、キーワード(かたかな・漢字・数字)が使われているか、他の動物との違いが分かるか、成長の経緯、句点、誤字の5つのポイントについてチェックシートを使って、グループで見直すようにする。 ・よく書けているところや直したらよいところを3つ相手に伝えるようにさせる。 ・前時に他グループにももらったアドバイスがあれば参考にする。 ・活動を止めないように「おたすけ」「ヒント」「OK」カードを使って必要なときだけ助言する。 ・動物図鑑など参考書籍を用意しておく。	・よく書けているところや直したらよいところを3つ相手に伝えられたか。 ・書いた文を見合いながら、グループで読み合っているか。 ・5つのポイントに沿って、チェックシートに記入しているか。
15分 グループ	3. アドバイスを生かして「どうぶつくらべカード」を仕上げる。	・見直せたグループは、アドバイスを生かして丁寧に文を清書し、カードに必要な絵や写真を準備する。	・アドバイスを生かして、清書できているか。
5分 個人	4. 活動を振り返り、カードに書く。		・カードに印をつけ、感想を書けたか。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: 80%;"> グループで、みんなにつたわるおはなしになっているか 5つのポイントでたしかめて、どうぶつくらべカードを上げられたか。 </div>			
2分 一斉	4. 次時の学習を知る。		

3) 授業の視点

- ・グループで助け合いながら、意欲的に「どうぶつくらべカード」を仕上げるのができたか。
- ・説明文を読み合い、よいところや直したらよいところを伝え合うのができたか。

(5-4) 本時の指導 【4組】

1) 目標

- ・「どうぶつくらべカード」ゲームをして、それぞれの違いを読み取ることができる。
- ・他のグループが作ったカードのよいところや直すところを確かめ合うことができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
10分 一斉	1. 本時の学習を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の手順を確認する。 ・グループで活動することを確認する。 ・この学級カードゲーム大会で確かめ合ったことが、新1年生へのプレゼントにつながることを確認する。 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> カードゲーム大かいをしよう きょうりよくして友だちがつくったカードをグループで5つおぼえよう。「ほかほかカード」をみつけよう。 </div>			
5分 グループ	2. 準備ゲームをする。 (グループごとに興味のあるカードを9枚選んで、名前あてゲームをする。)	<ul style="list-style-type: none"> ・自信をもって大会に臨めるように選んだカードの動物をグループで確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループみんなで話し合っていて、興味のあるカードに決めることができたか。
20分 グループ	3. カードゲーム大会をする。 ①カードの説明を読んで覚える。 ②グループで内容を当て合う。 ③グループで5つ覚えたか確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに集まってチームをつくり、グループの数値目標と役割を与えることにより、一人ひとりの本時の学習に責任をもって臨めるようにする。 ・「どの子も言えるようにしておく」ように指示し、確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームをしながら、友だちの得た情報に耳を傾け、自分のものにしようとしているか。
5分 グループ	4. ほかほかカードを見つけた。 チェックシート(内容・絵・説明のわかりやすさ)に書く	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで知らなかった情報やそれぞれのどうぶつ違いがよくわかる「ほかほかカード」をみつけるよう視点を明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・カードを吟味し、グループで今まで知らなかった情報がある「ほかほかカード」をみつけることができたか。
10分 全体・個人	4. 本時の学習をふりかえる。	<ul style="list-style-type: none"> ・次時は「ほかほかカード」のよいところを自分たちのカードに生か 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> きょうりよくして友だちがつくったカードをグループで5つおぼえることができたか。 「ほかほかカード」をみつけることができたか。 </div>			

3) 授業の視点

- ・グループで「どうぶつくらべカード」ゲームをして それぞれの違いを読み取ることができたか。
- ・他のグループが作ったカードのよいところや直すところを確かめ合うことができたか。

(6) 本単元の振り返り

1) 単元設計のねらいと工夫

「動物比べカードを新1年生にプレゼントして一緒に使って遊ぼう」を学習のゴールに設定し、学習活動を構成した。今回の「どうぶつの赤ちゃん」は、1年生で学習する3つ目の説明文であること、これら説明文の教材を重点教材として学習を進めてきたこともあり、これまでの学習の流れから、大まかな流れを子どもたちで考えることができると考えた。

また、具体的に相手意識・目的意識をもったゴールを設定することは、1年生の学習への意欲付けを図る上で大切なことを前の2つの説明文の学習からも考えていた。ゴールを「6年生に昆虫クイズをしよう」とした一番初めの説明文「いろいろなくちばし」では、教材文で学習した相手によく伝わる文型に沿ったかたちで問題文を作成し、6年生が悩むような難しいクイズをつくろうと一生懸命になり、実際に1・6集会の中で、「上手に作ったなあ」「知らなかった」「降参！」などと6年生に評価してもらうことで「やってよかった」と感じる事ができた。ゴールを「自動車カードをつくって、全校みんなで楽しもう」とした二学期の「自動車くらべ」の学習では、自動車の働きと仕組みを説明文にすることを教材文から学び、そこから手作りのカードにし、自分たちが楽しんだカード遊びを手作りカードで全校のみんなに楽しんでもらおうと意欲的にとりくんだ。カード遊びについては、ひらがなやかたかなのカードや魚、恐竜などのカードを9枚並べて言葉や内容をグループで覚えて遊ぶことを学級活動や休み時間などに取り入れてきた。みんなでカードを通して遊ぶ楽しさを十分に味わっていたので、ぜひ他の学年にも楽しんでもらいたいと思うようになった。そして、チャイルドフェスティバルという全校行事の中で他学年の子どもたちが自分たちの作ったカードで楽しそうに遊び、「上手につくったな。」「こんな車があるなんて知らなかった。」など評価してもらうことで成就感を得た。カード遊びの楽しさ、他学年から認めてもらうことの喜びを一学期、二学期と体感していることで、今回の「動物比べカード」を作って、新入児にプレゼントしようとするゴールは、子どもたちが見通しをもち、最後まで意欲をもって活動できるものとなると思った。

また、書かれている事柄の順序や場面の様子などに気づきながら読むことができるよう、ライオンとしまうまの赤ちゃんの特徴や違いについて、時間の経過にそって比較し、大体の内容を読みとるためにキーワードに注目させようと考えた。キーワードについては、特に数字に注目させることとした。時間的経過を表す具体的な数値は、時間的な順序、事柄の順序などを考えるには重要であるので注目させたいと思った。

自分の考えと同じところ、違うところを見つけることができるように、カードにしたい動物の赤ちゃんについて、他の動物や親と違うところを中心に、書くのに必要な事柄を集めることで、「違い」について考えたり、一人ひとりが書く文をお互いに読み合い、同じ思いのところを見つけられたりできるようにしたいと考えた。

伝えるのは新入児であるので、まずは自分たちの中でカード遊び大会をしながら、お互いの「動物比べカード」を評価し合うことを「ゴール」の代わりとした。プレゼントは先のこととなるが、来年度、新入児を待つ楽しみの一つにもなればと思った。

カードを作る活動では、グループを活用することでお互いの良さや苦手なところを補い合い、助け合いながらとりくませたいと考えた。その際、子どもたちの意欲を尊重し、必要最小限の支援にすることにした。

また学習に関連した本を教室に随時用意すると、自分が調べるための本だけでなく、進んで多くの本を

読もうとする姿が見られたので、動物の赤ちゃんについての関心を高めるため、「動物Week」とし、動物に関係した本やグッズを学級に用意し関心を高めたいと思った。

2) 取り組みの過程

まず、ゴール「新1年生にプレゼントして一緒に使って遊ぼう」を示し、今までの学習の流れなどを思い起こしながら、時間を巻きもどすようにして子どもたちと一緒に計画を立てた。今回は、「自動車くらべ」の学習の流れを思い出しながら、そのときの流れ図も参考に計画を立てた。なかなか細かな順序までは立てられなかったが、大まかな流れ「教材文での学習」「グループ作り」「カード作り」「自分たちでの見直し」「交流」などは考えることができた。出来上がった学習の流れは、いつものように教室掲示し、1時間の学習の始めにゴールを意識付けたりすることで、何に向かって今自分たちは学習しているのかを確認し、「やるぞ」という意欲をもたせていった。

1次の教材文の読み取りでは、キーワードを手がかりに「違い」に目を向けながら説明文の書き方を学んだ。カードを作るところで時間を確保するために、できるだけ効率的に読み取りができないかと考えた。「ライオン」と「しまうま」の教材文の構成（生まれてすぐ、親との比較、しばらくたった様子）に着目し、拡大印刷したものを比較しやすいように上下に並べ、比べながら読み取っていった。比較という点ではよく読めていたが、具体的な言葉の使い方や表現方法については時間が必要であった。1年生ということを見ると、資料の横書きの数字を文では漢数字に改めるなどの表現方法や記述の仕方にも時間を十分にとる必要を感じた。子ども自身の読み取りの確認として、吹き出しに書くことと、班で教材文からクイズを出し合うことをした。吹き出しの内容は、重点の流れ図の中にも書き込み、必要なときに振り返れるようにした。クイズは、まず一人ひとりが考え、班の中で出し合い、班のお勧めクイズを発表し学級全体でクイズ大会をした。さらに学級のお勧めクイズを話し合い決める中で、1学期の「昆虫クイズ」のことを思い出し、「これは、6年生も知らないことだからいい問題だ」と今までの学習を生かした発言もあった。

2次の教材文からのカード作りでは、前次に読み取った内容からカードにしたいことを3つにしぼった。ポイントは「他の動物とは違うところ」「へっ！」と自分が驚きをもてる内容とした。これは、3次でのカード作りにもつながる。プリントも3文書けばカードになるように準備してあったので、比較的スムーズに書き上げた。

3次の「カードづくり」を前に、1月から動物の赤ちゃんに関する本をいくつかの図書館や図書室からできるだけたくさん借り出して用意した。選んだ本によってはキーワードが見つげにくかったり、文を選ぶことができなかつたりしたが、何冊も用意することで書きたい内容を見つけることができた。また、人形なども用意し教室全体の雰囲気を動物にし、意欲付けとした。生まれたときの体重にした人形を大切に抱っこしながら「軽いのにあんなに大きくなるのだなあ」と感心している様子が見られた。グループについても、自分が書きたい動物を第一に考えさせたので、同じ動物を選んだ子がいない場合も出てきた。そういう場合は、単独の子同士をグループにしたり、2人と1人で3人グループにしたりして、書くのは一人でも見直したり相談したりできるようにグループを組んだ。そのことで、2つの動物について考えていくことにもなったが、逆に違いを考えることにもつながり的確な文を3つ書くことができていたグループもあった。

本から調べた内容を5つほど（中には10ほど）選んだメモをもとに、さらに3つの内容に絞りカードの文にした。せっかくたくさん調べたのではあるが、「へっ！」と思う内容という視点で自分なりに精選していくことができた。この際、グループの中でも相談し「〇〇さんに教えてもらって、これにした。」とグ

ループを生かしてカードに載せる内容を決めることができた。

説明文を書き仕上げる学習活動では、同じ動物を選んだグループで一人ひとりが書き、それを校正し、さらに書いた文の中から3文に厳選していくのだが、それぞれが書いた後、そのまま次にグループでの校正、選択というように2時間続けて活動を進めた方が、子どもたちの意欲や流れを途切れさせなかったのではないかと思った。また、3文に厳選していく過程では、「違うところがよくわかるからこっちにしよう」と理由付けをしながら選べた。すべての文を使うのではなく、3つに選ぶ活動があったことで、グループでよりよく考えることができた。

出来上がったカードを学級でお互いがゲームをして楽しむ中で、「ほかほかカード」を見つけて評価し合った。前時の活動では、直すところばかりに目がいきがちであったが、今回は違うグループのカードもあったので、よくかけているところ（子どもたちにとって情報が新しい）を見つけることができた。

毎時行ってきた「振り返りカード」も、二学期には「できた」「わかった」など自分自身のことの記述に終わることが多かったが、今回は「グループの人に言ってもらってがんばって書いた。」「〇〇さんとちがうところもあったけど、そうだんして決められた。」などと友だちとの関わりも交えた振り返りができるようになってきた。

3) 成果と課題

学期に1回ずつ、説明文の学習を繰り返すことで、子どもたち自身で見通しをもって学習を進めることができるようになっていく様子が分かった。1年生で、学習の仕方を身につける時期でもあるので、何度も繰り返しながらまずは基本的な流れを体得させていけたことは成果だった。

グループでの活動や自分たちでまず考えてやってみることを大切に進めてきたので、できるだけ自分たちでやってみようとする様子が学習を重ねるごとに多くなっていった。国語だけでなく、他の教科でも「先生！先生！」と呼ぶことも少なくなってきた。

キーワードを見つける際、漢字・カタカナ・数字とすぐに見分けられるポイントを示したことで、今回のカード作りに必要な内容を長文の本の中からでも見つけることができた。具体的なアドバイスがいかに大切かわかった。

もう少し難しい内容に挑戦していけるところまで、子どもたちが育ってきていると感じた。学習を進める中で、子どもたちのできている内容をしっかりと把握し、計画以外のないようになって、少し難しい学習内容を盛り込んでいくことも考えていかなければならないと思った。

(7-1) 1組の本時の振り返り

1 限終了後の5分休憩に机の間を走り回っている姿を見て、落ち着いて最後まで学習できるのかと少々心配になった。

チャイムが鳴り、いつものように学習の課題・手順・注意事項を伝えた。課題は、杉江先生に教えていただきいつもより少し長めの文章にしてあった。「どうぶつくらべカードをつくろう。どうぶつの赤ちゃんのときのように、大きくなっていくようすがわかるように、グループであわせて3つの分でせつめいしよう。」を全員で声に出して読んだ。私も読んで、少し説明をした。「質問はないですか。」と聞くと、いつもなら必ず2、3人は挙手するのに、今日はなんと0人であった。「Sさん、質問しないんですか。うなずいたので、「分かったのですね。」と始めようとする、Uさんが「・・・の次はどうするのですか。」と聞いてきた。それは、手順をすべて通り越しての内容だったので、「できてしまったら、黒板に書いておけか

らその通りにしましょう。」と伝えた。

記入するプリントを配ると、まず自分で考えるのだから、前時に書いたプリントを見ながら学習体制に入っていた。たいていの子は、前時のプリントに書き込んだのを見てキーワードを探しながら考えると、今日の学習はクリアーできるのだが、アザラシグループが最も心配であった。昨日の下校後、チェックすると、内容が抜け落ちていた部分があった。これはどうなるだろうと思って机間巡視をすると、しっかり資料としている本を出して読みつつ、抜け落ちたところを今日の内容のところに書き込んでいた。「よかった、よくやっているな。」と安堵した。

プリントから考えるとできるのに、もう一度本を読み直している子がいた。これでは時間内にできるのが難しいと思い、「このプリントから選ぶといいね。」と声をかけた。

早くもできたというゾウグループが言ってきた。「こんなに早くできたのか。それほど今日の課題は簡単だったのか。」と思って見に行くと、ちゃんと生まれてから大きくなっていく様子が分かるように3つの文章で紹介してあった。お互いに交換して読み合ってみようとして声掛けをして、机間巡視を続けていった。

続いてパンダグループも3つの文で仕上げてきた。真面目な子といつも早く仕上げたい子の2人組である。いくつかのグループもできてきたので、黒板に「チームでこうかん」と書き、「お互いに読み合っってアドバイスをすること、別のグループとも読み合っってアドバイスをすること」を伝えた。ゆっくり書く子と、丁寧に書く子のグループはまだ一生懸命に取り組んでおり、時間は十分にあるからこのまま続けていこうと声をかけておいた。

Nさんは、プリントを消しているの「何をしているの」と尋ねると、「Yさんにこの字がきたないと言われたので、書き直している」ということだった。丁寧に書くことも注意事項だったから、文字に対するアドバイスがあったことを確認した。この辺りから、自分の席を離れて読み合っている姿がたくさん見られるようになってきた。1組は何でも大きい声で自分を主張する子が多いので、今日もそのようになるかと思渡すと、お互いに聞こえるくらいの声で読み合っている姿があったの。プリントを交換し読み合っている姿を見ていると、教室内に温かい空気が流れているのを感じた。あの休憩で発散してあったからこんな状態になれているのかなと一瞬思ったが、杉江先生に教えていただいた協同学習を続けてきた結果だろう。

ほとんどのグループが出来上がって読み合うことができたので、次時で使う予定のカードを使って振り返ってみた。ここでは、予定外のことだったので、私が読み上げつつ記入するようにした。

最後に、本時の振り返りを書いて交流した。始めに質問しなかったSさんは、「簡単すぎてしょうもなかった」と発表した。思わず「簡単すぎてごめんね。もう少し難しい課題にしたらよかったかな」と問いかけると、一斉に「簡単と違う。これでよかった」と声が上がった。いつも遅くなりがちで、みんなから頑張れと言ってもらっているキリングroupの子は、「今日は。めっちゃめっちゃ頑張った」と満足気だった。

数字に着目したので、縦書きにしても数字を書いていた子がいたので、清書する時は漢数字に直すように言いたい。長い課題であったが、たくさんの参観者の中で、4月に向けての大きなゴールを目指し、本時の課題達成のために努力し続けた姿を見ることができた。

(7-2) 2組の本時の振り返り

子どもたちは、1・2学期に学習して作った「こんちゅう」カードと「のりもの」カードのことをよく覚えていた。単元の学習内容以上にカードを自分たちの力で作ったという経験が強く記憶に残っていたよ

うに思う。

わたしたちは、今までの「カード作り」での成功体験が、大きな自信とやる気、意欲の継続になると確信し、今回も学習のゴールに「どうぶつカード」を設定した。また、来年の一年生にプレゼントをするという付加価値をつけることで、より彼らの気持ちを学習の最後まで引っ張ることができると考えた。予想どおり、子どもたちは今までの学習以上に、やる気を見せ、がんばっていた。

2 学期までの学習のグループ分けは、わたしの意思が大きく働いていた。それは、あまりにも「書く・表現する」ことにおいて個人差が大きかったからである。なるべく、他のグループと差ができないように、どのグループも同じようなペースで学習させたいのと満足感を得られるようにとの配慮からであった。しかし、今回、授業公開した「どうぶつカード」作りのグループ分けは、子どもたちにオープンにし、第一希望優先とした。それは、どの子もこの1年間で「書く・表現する」力をその子なりに身につけ、グループ活動の学習場面で自分が出せる、活躍できると確信したからである。

さて、授業公開した「どうぶつカード」作りの学習活動では、最初に個人学習の時間を確保した。それは、友だちに頼らず、まずは自分で考えるという条件をつけたかったからである。約7割の子が15分できたが、残りの子は時間不足だったようだ。個人学習の後、グループで相談し合い、3つの文を考えることにしたが、うまくこの流れにのったグループと、個人でまだ考えたい子がいたグループがあった。後者のグループがどうするかを見ていたら、友だちが納得のいく説明文が書けるまで本を見るなどして待っていた。この姿から、日ごろから国語科に限らず、協同学習を意識して学習に取り入れている成果が出ていると感じた。お互いのことをよく分かっている、信頼関係があるからこそ、たくさんの参観者がいる中でも、教師に頼らず、動じず、自分で考え、友だちの文ができるまで待つという判断をすることができたのだと考える。

また、早くできたグループについては、他のグループと読み合いをするということにした。そうすることで、児童の学習活動を止めることなく、教師の指示を待つことなく、主体的に活動を継続することができた。

本時の学習を1時間目にし、2時間目には、引き続いてカードを仕上げる活動にした。2時間続けて学習したことで、子どもたちの思考を止めることなく、カードを仕上げることができたというメリットがあった。しかし、2時間続けたために、休む間がほとんどなく学習活動が続いたこと、参観が続いたために緊張が持続したことで、2時間目終了後にはくたくたになっていた子がかなりいたので、その点については配慮が足りなかったと反省している。

(7-3) 3組の本時の振り返り

グループでひとつのものを作り上げ、それをみんなに伝えるという流れの単元にも慣れてきたのか、この日の課題に対して時間いっぱい一生懸命にグループの子の文を読み、よく書けているところや直したらよいところを見つけようとしていた。本時ではそのあと、「いよいよ動物比ベカードを完成させる」という目標もあったので、活動をとめることなく1時間の学習に集中できた。学習の手順も学習計画を立てるときや、毎時始めの「流れ図」による学習の進行度の確認により、子どもたち一人ひとりが分かり、あとどれだけしたら出来上がるのか見通しをもって学習できた。

課題の「みんなに伝える」ということについても、読んだ子どもたち一人ひとりが書いた文を理解できたら、新入児も理解できるであろうということ、まずは自分が分かる文になっているかを確認する

ことにした。前時に一人ひとりが調べたい動物について、キーワードや他の動物には見られないであろう特徴について文に書いたのであるが、そのときにも何度も見直していたこともあってか、本時では、文の内容自体を校正しようとする姿は見られなかった。予想していたことではあるが、そのことを「よくかけているところ」として相手に伝えられるような手立てを講じておけばよかったと思う。校正ということを考えればそれでよいのであろうが、「直すところ」にばかり目がいき、直せたらOKというように読み合いが進んでしまった。

前時の文を書くところや「どうぶつの赤ちゃん」の教材文の読みのところで「キーワード」について注目してきた。このキーワードを「カタカナ・漢字・数字」とすぐに見分けられるもので探すようにしたので、書籍の中から自分に必要な情報を何に注目して探せばよいのかが分かりやすかったようである。特に、数字については生まれてからの赤ちゃんの成長の過程を追う上で重要になってくるので、これに注目させたことは重要であった。

5つのポイントで見直しをしたのだが、1つずつのポイントで見直すことはできなかった。1つのポイントごとに文を読み、確認するように説明したが、子どもの実態にあっていなかった。5つのポイント全部を見て、読みにかかり、印がつけられないところはそのポイントに着目しながらもう一度文を読むようにしていくほうが、より子どもの思考に沿っていたと思った。

本時は、説明文を書き仕上げる学習活動の2時間中第2時だった。同じ動物を選んだグループで一人ひとりが書き、それを校正し、さらに書いた文の中から3文に厳選していくのだが、それぞれが書いた後、そのまま次にグループでの校正、選択というように2時間続けて活動を進めた方が、子どもたちの意欲や流れを途切れさせなかったのではないかと思った。本時は、自分の文を自分で校正するところまでで前時をストップさせ、グループでの校正・選択という活動だったが、前時の振り返りにやや時間を費やさなければならず、その分、絵まで完成させるところまでたどり着かなかったグループもあった。また、前時、予想していた以上に子どもたちが的確に短時間で動物の成長の様子を文にすることができた。このことも考えると、2時間続けての授業も考えられたと思う。

「おたすけ」「ヒント」などのカードを使ったことで、すぐに「先生！」と頼ろうとせず、まずは自分たちのグループで「～で、いいのかなあ」と相談しながら進めようとする様子が見られた。このことは、カードを使わなくても、普段のほかの授業でも見られる姿になってきている。その分、教師が子どもたちの様子を見て回りながら、少し逸れていっていると思ったところに声がけをすることもできるようになった。

(7-4) 4組の本時の振り返り

本時の目標は、自分たちが作り上げた「どうぶつくらべカード」ゲームをして、それぞれの違いを読み取り、さらに、他のグループが作ったカードのよいところを見つけるというものであった。二つのねらいを達成できるか、またそのための時間が十分確保されるか心配された。しかし、1年間の積み上げや成長をふりかえるなかで、この子たちならできるという見通しがあった。

その理由のひとつに、1年生の子どもたちが主体的な学習形態に慣れたことである。私がする本時の課題の確認と学習の流れの説明は、3分程度であったと思う。あとは、子どもたちがグループ形態で学習を進めるのを、長い時間見守った。

見守りのなかで、子どもたちは友だちのよさをいろいろな場面で感じるようになっていた。例えば、た

くさん覚えた子がキーワードになる言葉をわかりやすく絞って覚える方法を教えたり、自分の作ったカードについて書いてあること以外のことをつけたして説明したり、普段おとなしく自分の考えをあまり主張しない子にのぞきこむように尋ねたり、実に普段着のまったりした授業であった。「先生、先生」という言葉はなく、聞こえてくるのは子どもたちの間で交わされる「教えて、教えて」「もう1回言って」という言葉であった。

しかし、学習のおわりには、どの班も5つのカードを全員が覚え、7班すべてのグループがとっておきの「ほかほかカード」を理由も明らかにして選ぶことができた。動物の成長の違いを確認しながら、同じ1つのカードの特徴に目を向けたグループがあり、子どもたちも同じ理由で選んでいたことに驚いていた。作り上げる時点から、視点（違い・キーワード）を与えてきたことがカードのよさを見つけることにつながっていると感じた。

子どもの側にたって考えると、「本時の課題にしっかり向き合わせる。」ことで主体的な活動につながり、「グループでの時間を十分確保されている。」ことで各グループの特徴を生かした覚え方が生まれた。

教師側としては、子どもの活動は否定せず、すべて受容する。活動から子どもを学ぶくらいの楽な気持ちであった。

1年生実践資料1：振り返りカード

『えいごの赤ちゃん』 振り返りカード		
「ねん()くみ 名まえ()		
1	<p>おじいちゃんにうさぎをたてよう。</p> <p>.....</p>	◎ ○ △
	<p>「えいごの赤ちゃん」のおはなしをよんで、わかったことをおぼえておこう。</p> <p>.....</p>	◎ ○ △
	<p>「えいごの赤ちゃん」のおはなしから、もんだいをつくってクイズを作ろう。</p> <p>.....</p>	◎ ○ △
2	<p>「えいごの赤ちゃん」から「えいごのくまカード」にするよきおぼえて。</p> <p>.....</p>	◎ ○ △
	<p>「えいごの赤ちゃん」から「えいごのくまカード」を作ろう。</p> <p>.....</p>	◎ ○ △
3	<p>「えいごのくまカード」にうさぎのえいごをきめて、グループでうさぎを。</p> <p>.....</p>	◎ ○ △
	<p>「えいごのくまカード」にうさぎのえいごをきめて、×をうさぎを。</p> <p>.....</p>	◎ ○ △
	<p>赤ちゃんのうさぎのうさぎ、大きくなつていくうさぎがわかるように、キーボードにおぼえて、グループでうさぎのうさぎを。</p> <p>.....</p>	◎ ○ △
	<p>グループで、みんなにうさぎのおはなしになっているか五つのポイントでたしかめて、「えいごのくまカード」をうさぎを。</p> <p>.....</p>	◎ ○ △
	<p>カードゲームを作して、ほかのグループのカードから「ほかほかカード」を見つけよう。</p> <p>.....</p>	◎ ○ △
	<p>「ほかほかカード」のよきうさぎをうさぎして、グループの「えいごのくまカード」をうさぎを。</p> <p>.....</p>	◎ ○ △

『どうぶつの赤ちゃん』学しゅうプリント①

一ねん（ ） くみ 名まえ（ ）

☆わかったことをふき出しにかこう。

『どうぶつの赤ちゃん』学しゅうプリント②

一ねん（ ） くみ 名まえ（ ）

☆おはなしから、もんだいをつくってクイズ大会をしよう。

									どうぶつ
									もんだい
									こたえ

『どうぶつの赤ちゃん』学しゅうプリント③

一ねん（ ）くみ 名まえ（ ）

えらんだ どうぶつの 名まえ

☆「どうぶつくらべカード」にすることをきめよう。

いつころ			カードに かきたいこと							

『どうぶつの赤ちゃん』学しゅうプリント④

一ねん（ ）くみ 名まえ（ ）

☆「どうぶつくらべカード」をつくろう。

これは、

の赤ちゃんです。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

これは、

の赤ちゃんです。

--	--	--

『どうぶつの赤ちゃん』学しゅうプリント⑦

一ねん（ ）くみ 名まえ（ ）

☆五つのポイントでたしかめて、カードを仕上げよう。

一	ほかのどうぶつとちがうところがかけていますか。 ちがいが、わかりますか。 生まれてすぐのようす、 少し大きくなってからのようすが、 かけていますか。	一かいめ しるし		
二	キーワード（かたかな、かん字、す う字）が、つかってありますか。	二かいめ しるし		
三	くてん（。）が、正しくつかって ありますか。	三かいめ しるし		
四	まちがった字は、ありませんか。			
五				

☆かきくわえるところ、なおすところは、赤でかきましましょう。

2 2年生の実践

第2学年 国語科学習指導案

指導者 鈴木隆文 鈴木佐知 山村理恵 森下ゆか

(1) 単元名 お話大すき 「お話がいっぱい・こんなお話を考えた」

(2) 目標

2年生でつきたい力

- ① 順序や場面の様子や言葉の意味を考えながら、内容を読み取ることができる。(評価力・判断力)
- ② 自分の考えと友だちの考えの同じところ、ちがうところを見つけることができる。(思考力・発想力)
- ③ 理由をはっきりさせて、相手に分かりやすく伝えることができる。(表現力・論理力)

・絵本などのやさしい読み物に興味をもち、場面の様子や人物の気持ちなどについて想像を広げながら読む。・・・①

・自分の考えが明確になるように簡単な組み立てを考えて書く。・・・②

・絵を読み解きお話を書き、絵本を作る。・・・③

(3) 指導について

低学年の児童は、お話を読んでもらうことが大好きであり、教師が読んだ本や友だちが紹介した本など「自分も読んでみたい」とその本を借りて読んだり、「今度はこれを読んで」と自分のお気に入りの本をもってきたりすることもある。

本単元では、児童が興味・関心のもてそうなお話がさまざまなジャンルから紹介されており、ブックトークをしながら、「読書」意欲を喚起させお話の世界に浸らせる「読むこと」と、「自分が作家になってお話を作ってみる」という創作でお話の世界に浸らせる「書くこと」が組み合わせられている。

今までお話の学習をした後は、場面の様子や登場人物の様子を考えながら音読会をしたり、「スイミー」の学習の後は、お話のパンフレット作りに取り組み、自分のお気に入りの本についてのパンフレットを作りをし、みんなに紹介したりした。また、「お手紙」では、かえるくん・がまくんになっての劇にも取り組んだ。今回は今までにやったことのない学習にチャレンジしようということで、お話作りにもっていきたい。3枚の絵が提示されているが、それを読み解くことで、文を書くことが苦手な子どももスムーズにお話作りができると考える。

「友だちやおうちの人に読んでもらって感想をもらおう」といった目標をもたせることで、学習意欲が高まり、児童自身が「自分でオリジナルのお話を作った・作家になった」という達成感が得られると思う。

4月から、さわやかタイムの時間に読み聞かせをしたり、一週間に一度図書室の本を借りたり、「読書」を大切にしてきた。また、自分が読んでおもしろかった本を友だちに紹介し合ったりもしてきた。

どんな時も「聞く」ということは、ともに学ぶことの基盤になる。いつも「聞き方名人」を意識させて、グループでの話し合いや全体での交流を大切にしている。しかし友だちの話をじっくり聞くということは、まだまだできていない。互いの顔を見ながらの発表の場を設定したり、聞いた後には反応を返すということを意識させながら学習を進めている。

(4) 単元の指導計画と評価計画 (全 13 時間)

次	目標	時数	学習活動	評価
1次 3時間	<ul style="list-style-type: none"> ・ブックトークを聞き、自分の気に入ったお話を読む。 ・学習のめあてと流れをつかむ。 	2	<ul style="list-style-type: none"> ・いくつかのお話の書き出しや、主人公の紹介などさまざまなパターンのブックトークを聞き、読んでみたい本を読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・好きなお話の情報を交換することにより、楽しいお話がたくさんあることを知り、お話への興味・関心を高めることができる。 ・学習の見通しをもつことができる。(関心・意欲・態度)
		1	<ul style="list-style-type: none"> ・「世界に1つしかないオリジナルのお話」を作ってみるに聞いてもらう計画を立てる。 	
2次 7時間	<ul style="list-style-type: none"> ・3枚の絵を読み解き、想像を広げてお話を作る。 	1	<ul style="list-style-type: none"> ・3枚の絵を読み解く。【1組、4組】 	<ul style="list-style-type: none"> ・登場するうさぎ・きつねはどんな子どもか、季節はいつなのかなどお話に必要なシチュエーションを考えることができる。(評価力・判断力) ・友だちと協力しながらお話を考えることができる。(思考力・発想力)
		1	<ul style="list-style-type: none"> ・例文を読んで表現の工夫を見つけることができる。【3組】 	
		3	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアで登場人物の名前やお話の順序を考え、各場面ごとのお話を作る。(本時 1/3) 【2組】 	
		2	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアで読み合い推敲して清書をし、後書き、表紙を作り絵本に仕上げる。 	
3次 3時間	<ul style="list-style-type: none"> ・作ったお話を交換して読み合い、感想を交流する。 ・おうちの人に読んでもらって感想をもらう。 	2	<ul style="list-style-type: none"> ・小グループで交流し感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが作ったお話の工夫したことを伝えながら、分かりやすく話すことができる。 ・友だちが作ったお話を聞き、感想を伝えることができる。(表現力・論理力)
		1	<ul style="list-style-type: none"> ・おうちの人からもらった感想を交流し合う。 	

(5-1) 本時の指導【1組】

1) 目標

- ・3枚の絵を読み解いて、季節や状況、登場人物の場面や様子などお話に必要なことを考えて書き出すことができる。
- ・ペアで協力しながら考え合うことができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
8分 一斉	1. 本時の学習を知る。	・ペアで活動することを確認する。	・学習計画がわかったか。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> 3枚の絵の中から、どんなきせつや時間、場しょか、うさぎやきつねの子どもたちはどんな子どもたちなのか、などをりゆうを考えながら書こう。 </div>			
2分 個人	2. 課題について考える。	・できるだけ自分の考えをもって、ペア学習にのぞませる。	
20分 ペア	3. 絵の季節や状況、うさぎやきつねの様子を考え、ペアで相談して書き出す。	・ペアで相談してお話に必要なことを話し合わせる。	・ペアで協力して考えて書き出しているか。
10分 グループ	4. 考えた内容についてグループで交流する。	・お互いの考えをもっと良くするためにアドバイスさせる。 ・自分たちの考えたものと交流した内容について考え、お話に必要なことをつけたして書かせる。	・お互いの考えにアドバイスできたか。
5分 個人 一斉	5. 振り返りをする。	・ペアやグループの友だちの協力で、書き出すことができたか振り返りをさせる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> どんなきせつや時間、場しょか、うさぎやきつねの子どもたちはどんな子どもたちなのか、などを書くことができたか。 </div>			
	6. 振り返りを交流する。		

3) 授業の視点

- ・お話に必要な場面や状況を考えることができたか。
- ・ペアで協力して考えることができたか。

(5-2) 本時の指導【2組】

1) 目標

- ・3枚の絵の順序を決め、1枚目の絵のお話を書くことができる。
- ・ペアで協力しながら考え合うことができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
10分 一斉	1. 本時の学習を知る。	・ペアで活動することを確認する。	
3枚の絵のじゅんばんをきめて、1枚目の絵のお話の下書きを書こう。			
25分 ペア	2. 3枚の絵の順序を決め、1枚目の絵のお話を考えて書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・どの絵を最初の場面にするのかを決めさせる。 ・お話の最初の場面であるので、「登場人物の名前」を入れさせる。 ・「いつのお話か」がわかる言葉を入れさせる。 ・「会話文」を入れて、次の絵に話がつながるようにさせる。 ・二人で相談しながら、展開やしていることを想像する時間を十分とりたい。 	・ペアとの活動を意識しているか。 (発言・カード)
5分 個人	3. 学習の振り返りをする。	・振り返りカードに記入させる。	
1枚目の絵のお話の下書きを書くことができたか。			
5分 一斉	4. 振り返りを交流し、次の活動を確認する。	・できるだけ多くの児童に発言の機会があるようにしたい。	

3) 授業の視点

- ・3枚の絵の順序を決めて、お話の最初の部分を考えることができたか。
- ・ペアで協力して考えることができたか。

(5-3) 本時の指導【3組】

1) 目標

- ・2つの例文を読んで2つの文の違いに気付き、表現の工夫を見つけることができる。
- ・ペアで協力しながら考え合い、みんなで伝え合うことができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
10分 一斉	1. 本時の学習を知る。	・ペアで活動することを確認する	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 2つのお話を読もう。場めんのようすやとう場人ぶつの気持ちがよく分かるのはどちらか、理ゆうをつけてつたえ合おう。 </div>			
15分 ペア	2. 2つの例文を読んで、場面の様子や登場人物の気持ちがよく分かるのはどちらか話し合う。	・ペアで相談し、話し合わせる。 ・くわしく書かれているところや、気持ちが書いてあるところにしるしをつけ、気付いたことをメモさせる。	・ペアでの話し合い活動に積極的に参加できたか。 ・くわしく書いてあるところを見つけることができたか。
10分 一斉	3. ペアで見つけたところを全体で交流し合う。	・ペアで話し合ったことやメモしたことをみんなで伝え合わせる。	
5分 個人	4. 振り返りをする。	・自分の考えをペアの相手に伝えられるように書かせる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 場めんのようすやとう場人ぶつの気持ちがよく分かるのはどちらか、理ゆうをつけてつたえ合うことができたか。 </div>			
5分 ペア	5. 振り返りをペアに伝える。		・全体で話し合ったことをもとに自分の考えを書くことができたか。

3) 授業の視点

- ・2つの例文を読んで2つの文の違いに気付き、表現の工夫を見つけることができたか。
- ・ペアで協力しながら考え合い、みんなで伝え合うことができたか。

(5-4) 本時の指導【4組】

1) 目標

- ・3枚の絵を読み解いて、季節や時間、場所、登場するうさぎの子やきつねの子はどんな子どもなのかなどお話に必要なことを考えて書くことができる。
- ・ペアで協力しながら考え合うことができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
8分 一斉	1. 本時の学習を知る。	・ペアで活動することを確認する。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 3枚の絵の中から、お話にひつようなきせつ・時間・場しよ、うさぎの子やきつねの子はどんな子なのか、りゆうを考えながら書こう。 </div>			
2分 個人	2. 課題について考える。	・自分の考えをもって、ペア学習にのぞませる。	
20分 ペア	3. 絵の中から、お話を書くのに必要な季節や時間・場所・うさぎやきつねの様子を考え、ペアで相談して書く。	・ペアで相談してお話に必要なことをそれぞれについて書かせる。 ・なぜそう思うのか理由も書かせる。	・絵を見て、ペアで協力して必要なことが書けたか。
10分 グループ	4. 考えた内容についてグループで交流する。	・ペアで考えたことを伝え合い、お互いの考えをもっと良くするためにアドバイスしたり感想を出し合ったりさせる。	・伝え合い、アドバイスし合うことができたか。
5分 個人	5. 振り返りをする。	・ペアやグループの協力でお話に必要なことを書くことができたか振り返らせる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 3枚の絵の中からお話にひつような、きせつ・時間・場しよ、うさぎの子やきつねの子はどんな子なのか、りゆうを考えながら書くことができたか。 </div>			
一斉	6. 振り返りを交流する。		

3) 授業の視点

- ・お話に必要な場面や登場人物の様子について書くことができたか。
- ・ペアで協力して考えることができたか。

(6) 本単元の振り返り

1) 単元設定のねらいと工夫

まず重点単元を選ぶとき、子どもたちの実態からどんな力をつければいいのか話し合った。自分の意見は、がんばって言えるけれど人の話を聞くのは少し苦手だった。それに、文章を書くことも何を書けばいいのかと苦手にする児童が多かった。

そんな時、校内研修会の中で北海道教育大学の鹿内信善氏の提唱する「看図法」が紹介された。それは絵を見てお話を考えていくというもので、絵の中からお話のヒントを得る、つまり絵を読み解くというものだった。絵の中から根拠を考えながらヒントを得るので、文を書くのが苦手な子どもでも簡単に書き進めることができるのではと考えた。

教科書の中に3枚の絵を見てお話を考えるという教材があったので、初めての試みではあったが取り組んでみることにした。

2) 取り組みの過程

1学期からさわやかタイムの時間を利用しての読み聞かせや、週1回図書室の本を借りて読むなど読書に力を入れてきた。

この単元は、お話大好きということで、お話作りをする前にいろいろな本を読んでもみようとして7つのお話が紹介されている。お話作りにスムーズに入っていけるように、まず今まで読んだ本を紹介し合った。次に教科書に紹介されている本について、題名から話の内容を想像したり、また話を途中で読み、続きの話を考えたりし、グループで交流した。子どもたちは自分の考えと友だちの考えを比べながら楽しく伝え合うことができた。その後実際に読み聞かせをした。そこでもう一度自分の考えと比べて楽しむことができた。

第2次は、絵を読み解くことから始めた。ペアで相談しながら進めることで季節や時間、場所、うさぎときつねの関係など、理由を考えながら書くことができた。それぞれが読み解いた理由を交流する中で、絵が表していることに気づいていった。

次の時間は、表現の工夫について考えた。初めはこちらが気づいてほしいところに気づけなかったペアもいたけれど、一つ前の単元で、音や様子を表す言葉の学習をしていたので、それを生かすことができた。

実際にお話を作り始めると、子どもたちは、ペアで相談しながらどんどん話を作っていった。どのペアもとても楽しそうに自分たちだけの本作りに熱中していた。2枚目まではペアで相談して作り、3枚目は自分のオリジナルということで作った。普段は、文を書くのが苦手な子どもも、今まであまり書けなかった子どもも、絵からヒントを得たことやペアで話し合いながら作ったことで、3枚目もスムーズに書き進められた。

清書も自分だけの本ということもあり、絵もがんばって描き上げることができた。

その後みんなのできた本を読み合い、感想を書き合った。おうちの人にも読んでもらい感想を書いてもらった。お姉ちゃん、お母さん、お父さん、おばあちゃんと何人にも読んでもらい、感想を書いてもらった子どももいた。その感想を読んでもとても嬉しそうで、みんな満足げであった。

3) 成果と課題

今回は、みんなが失敗しない方法だということを知っていたが、果たしてそうかなと不安もあった。しかし、終わってみるとそれぞれに楽しい作品ができあがった。絵を読み解くということは初めてだったが、なぜそうなのかを考えることで、絵に込められた内容についてじっくり考えることができた。また、ペア

で相談したことで、二人で一緒に考えられ、一人で悩むことがなかったのも大きかったと思う。

絵を描くのも好きな子供が多く、下書き、清書と少し時間がかかったが、最後まで飽きずに進められた。

友だち同士やおうちの人から感想を書いてもらったことで、やりとげたという実感が得られたと思われる。

「看図法」についてはまだまだ知らないことが多く、今回はかじっただけであるので、果たしてやり方がよかったのかどうか分からない。これからもっと研修を積まなければいけないと思う。

(7-1) 1組の本時の振り返り

授業公開の時間が、単元の第二次の初めということもあり、なかなかスタートすることができなかった。しかし2組が早くから進めてくれていたので、逆に自分の公開する授業を事前に見せてもらうことができたことが良かった。

事前の指導案や準備物、言葉がけなど少し課題も見え、準備をする余裕ができた。当初の計画では、ペア学習の後グループ交流をする予定であった。しかし席の近くのグループでは2ペアのグループになり、交流の深まりが弱いように感じたので、全体でのペア交流に変えた。単元の初めの「読み聞かせの感想交流」も席を立たせて、10人以上との交流をさせてきた。全体で動いてはいるが、人を替えてのペア学習である。

今日の課題を読み合った後、授業の見直しをもつなかで、いつも以上に説明をしすぎたようで、10分以上かけてしまった。そのことが後半の時間の配分に少なからず影響を与えてしまった。

絵を読み解いてペアでお話の登場人物や背景を考えると、具体的な例示もしたので、話し合いながら楽しく考えを出すことができたように思う。「チョウチョがとんでいるから春やわ。」「花や草原の色が明るいから、夏かなあ。」「名前は何にする?」それぞれのペアが課題に沿って理由を伝えながら話し合った。

その後全体でのペア交流を行った。自分たちが考えた背景と大きく違いはないものの、それぞれの考えを伝え合った。子どもたちは、とても意欲的にペアを作り、楽しく自分の考えやペアの子の考えを聞くことができた。理由もしっかり伝えている子が多かった。最初の考えを書くところがペアでできたところが、その後のペア交流も意欲的にできたと思う。ふだん書くことの苦手な子も、自分なりの考えを書けていたので話し合いやすかったように思えた。

研究発表会ということもあり、多くの参観者に来ていただいたが、うちのクラスでは、授業内容や子どもの様子よりも、「鈴木はしっかり仕事をしているのか?」の確認に来られた人が多かったように思う。私の顔を眺め、少しの安堵感を覚えつつ、他の教室に研究内容を参観に行く。といった方が多かった。授業も後半になると保護者参観の意味合いが強くなった。そこで当初の計画では、振り返りの発表をするはずだったが、保護者の前で自分たちの考えを発表させたくなり、考えた絵の背景を発表させた。子どもたちも意欲的で保護者も興味深く聞いてくれた。しかし余計に時間が押してしまって、振り返りの時間を最後にとることができずに終わってしまうことになった。

今までの自分の感覚で、保護者参観での発表内容を意識しすぎて、学習内容を変えてしまったことが、結果的に授業の流れを変え、授業の見通しのない結果を招いてしまった。

(7-2) 2組の本時の振り返り

- 1) 今回の授業を計画する上で大切にされたこと

2学期に学習した「サンゴの海の生きものたち」での授業では、「ペアで学習する意味合いを子どもたちがどれだけ感じて学習できていたか」という反省があった。「ペアで学習を進めましょう」と指示をしたものの、何のためにペアで学習をするのかということや、その必要性を子どもたち自身がしっかりと感じていなかった。そこで、今回の「こんなお話を考えた」の授業では、「ペア学習での参加度を高くすること」「この時間に何をしてどんなことを目指すのかをはっきりさせておくこと」の2点を大切にしようと考えた。

2) 単元をどのように作り上げてきたか

学年で教材研究を進めていく中で、「看图作文」についてのとらえかたを単元の中に取り入れることにした。教科書の絵をただ漠然とながめているだけでは通り過ぎてしまうようなことに目が向けられるように、絵を読み解くことに時間をかけた。また、対比することによって、教科書の文例の表現の工夫に気づくことができるような時間を設定した。さらに、3枚の絵を見てお話作りをするについては、一人ひとりの書く力が大きく違うことから、3枚のうちの2枚の絵についてはペア学習で取り組むこととし、3枚目の絵のお話のみ自分で考えて書くことにした。

3) 指導と子どもの活動・様子について

本時を下書きの第1時に設定し、書くことについて日ごろから抵抗を感じている子たちがいかに「書けた」「できた」という思いをもつことができるかをずっと考えてきた。そのために、学習したことがすぐに確かめられるように、学習したことを教室内に掲示し、適宜、その後の授業でも意識するようしてきた。また、書き方の見本や書き出しの例などを豊富に提示し、例を見ながら書くことができるような環境づくりをすることを心がけた。そして、ペアで学習することによって、一人では考えつかなかったところに目が向き、一行ずつ交代して書くことで友だちと協力し合っていることを味わわせることができると考えた。指導者が子どもたちにどんな活動をさせていきたいかを具体的にイメージすることで一時間の流れが見えてきたように感じた。

当日の子どもたちの様子を見ていると、ふだん、書くことを苦手と感じている子も、お隣の子と協力しながら書くことができていた。楽しく勉強できている様子が見られた。前回のときのように、お隣の子に任せきりになっている様子は見られなかったように思う。それぞれがこの時間にすることをわかって活動していた。さらに、予定していたところよりももっと先へ進めていく様子が見られた。本時では「1枚目の絵のお話の下書きを書く」ことが課題であったのだが、1グループを除いて2枚目までのお話まで考えることができていた。振りかえりの中では「友だちと一緒に楽しくできた」「二人で考えてたくさん書くことができてよかった」という感想が聞かれた。前回の学習のときと比べると、ペア学習での参加度が高まり、友だちとのかかわりを通した学習が進んだと実感できた。

4) 今後の課題

最初の10分でこの時間にするのをいかに子どもたちに伝えられるか。子どもたちもこの1時間の流れをつかむことで集中度は高まる。言い足りなかったり、言いすぎてしまったり、毎日の授業の中で実践を通して、子どもたちに発する言葉を吟味して伝える必要性を痛感した。

(7-3) 3組の本時の振り返り

前回、10月の授業で杉江先生に教えていただいたことは、読めば分かる課題・・・本時の課題を詳しくすることであった。その後、「課題は長くなってもできるだけわかりやすいもの」を心がけて取り組んでき

た。また、机の配置の仕方に工夫が必要であることを指摘された。そこで、子どもたちがより話し合いしやすい机の配置とは、みんなの顔を見ながら発表できるような机の配置とは、いろいろな友だちと交流できる方法とは、などについて考えてきた。

また、手本の必要性（手本があってもちゃんとできる）についても教えていただいた。そこで今回、「世界でひとつしかない絵本作り」をするにあたって、お話の場面の様子や登場人物の気持ちがよく分かるようにするためにはどんなことが必要なのかを考えさせる時間をとることにした。それが本時であった。

2組が先行授業をしてくれたので、それを参考にしながら進めることができた。子どもたちに分かりやすい発問・難しい発問を実際の授業で感じることができたので、本時の発問に生かすことができた。

一時間の流れを子どもたちに分かるように書くことで、子どもたちが課題・手順を理解して授業にのぞむことができた。

ペアでの話し合いがスムーズに、また協力しながら行えるようになってきた。自然と顔がペアとくっついて一緒に考えようとしている様子があった。また振り返りの中では、協力して学習できたことが多く発表されていた。（Aちゃんのおかげ）

グループの交流では、ペアが同じグループにならないように、変則的なグループで行うことにした。いつものグループのメンバーではないことで、より伝えたいという気持ちになれたところがよかったと思う。また、話し合うときには机が必要ないので、机は動かさずに椅子だけを動かして子どもたちの顔がより近づくようにした。もっと多くの友だちと交流する方法としては、自分の考えをもって、時間内でできるだけたくさんの友だちに伝えに行くという方法である。本時はたまたま車椅子の子どもがいたのでやめたが、その後他の授業でやってみたところ、子どもたちはいろんな友だちに自分の考えを伝えようと積極的に動く様子があった。

振り返りでは、コの字型に机を配置し、できるだけ友だちの顔が見える形で発表をするようにした。この時にどうしても教師の方を向いて発表してしまう子どもがいる。子どもたちの交流の時間にも、教師の立つ位置が大切であると感じた。

でき上がった作品（絵本）は、場面の様子や登場人物の気持ちを意識したものに仕上がったと思う。詳しく書かれたものとそうでないものを比べて「こちらの方が良く分かる」ということを意識した本時があったからだと思う。お家の人からの感想にも、「笑顔で言いました」とか「うれしそうに」というところでふたりはとても仲良しなことがよくわかりました。とあった。

一時間の流れを説明するときに、言い忘れてしまうことがよくある。そうなる子どもたちが考え始めているのに、その思考を止めてしまうことになる。子どもたちに一時間の流れを詳しく伝えきることに今後も気をつけていきたい。

（7-4）4組の本時の振り返り

2学期に授業をしたとき、まず、課題が読めば何をしたらいいか分かるものであることと子どもたちが見通しをもってやれるよう手順をはっきりさせておくことが大切だということを改めて教わった。その後の学習では、その2点に重点を置きながらすすめてきた。

今回の授業は二次の最初の時間ということであった。課題は、「3枚の絵の中から、お話にひつようなきせつ・時間・場しょ、うさぎの子やきつねの子はどんな子なのか、理ゆうを考えながら書こう」というもので随分長くなったが、2組・3組が先行授業をした時、子どもたちが今日は何をするのかよく分かっている

たように思ったので、そのままを進めることにした。発問の仕方も参考になり授業を見せてもらって自分の授業について考えることができた。

授業は、課題を貼り、授業の流れも見たら分かるように黒板に書き示した。子どもたちはたくさんの方が参観してくれていたせいか、今日の学習について説明した後の質問が多くて、結構時間を使ってしまった。

絵を見て、やはり自分の考えをもってペア学習に望んでほしいと思い、一人で考える時間をとったことはよかったと思う。ペアになった時、すぐに話し合いを進めることができた。初めは、理由を考えるのに悩んでいたペアもあったが、「季節は春やな。だって花が咲いてるし、鳥も飛んでるし・・・」「空が青いから昼やよね」「うさぎときつねは、絶対友だちやね。とっても仲良く遊んでいるもん」などと言いながら、プリントに書いていった。

その後、グループで書いたことを交流し合った。いろんな考えを伝え合わせたいと、グループは、今までも色々な形をとっていたので、スムーズに今日のグループに移動し、意見交換をすることができた。その時、なるべく近くで話ができるようにと机は動かさず、イスだけ後ろを向けるようにした。話し合いの仕方も随分上手になってきているので、時間内にうまくみんなの意見交換することができていた。また、自分の考えをうまく表現しにくかった子どもも、ペアで相談したことで、自信をもって書いたことを伝えていた。

最初が長くなったため、最後の振り返りの時間が少なくなってしまった。いつもは、必ず全員発表という形をとっていたが、全員発表することができなかった。もう少し時間配分を考えるべきだった。

終わってから子どもたちと話をしたところ、「たくさんの方が見に来てくれていたのでめっちゃ緊張した」と言っていた。最後の振り返りを発表するとき少し緊張しているかなと思ったが、ペアやグループでの活動はいつもと変わらなかったと思う。1時間を振り返るとどの子どももしっかり参加し課題について考えることができたと思う。

最初の今日の課題、手順をいかに子どもにわかりやすく簡潔に話をしていくかが、日々の課題である。そして子どもたちの思考が途切れないように、途中口を挟まないようにしていくことが大切であると考え

「みんなお話を考えた」 振り返りカード

二年（ ）組 名前（ ）

①	いくつかのお話を聞いたり、自分で読んだりして、お話を楽しむことができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
②	「世界に一つしかないお話」を作る計画を立てることができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
③	三まいの絵の中から「きせつ」「時間」「場所」「どんな子か」などを考えて、お話にひとつようなことを書くことができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
④	二つのお話を読んで、場めんのようにすやとう場めんぶつのがもちがよくなるのはどちらか、理ゆうをつけてつたえ合うことができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
⑤	三まいの絵のじゆん番をきめて、一まゝ目の絵のお話の下書きを書くことができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
⑥	二まゝ目・三まゝ目の絵のお話の下書きを書くことができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
⑦	ペアで読み合い、なおしたり、書きくわえたりして清書をするこゝができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
⑧	後書き・ひょう紙を作り、絵本にし上げるこゝができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
⑨	グループで交りゆうし、かんそゝを書くこゝができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
⑩	おうちひとからもらったかんそゝを交りゆうし合うこゝができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

1		名前
	こんなお話を考えた	
<p>● いくつかのお話を聞いて、かんそうを書きましよう。</p>		

2		名前
	こんなお話を考えた	
<p>● 教科書の絵を見て、そうぞうしたことを書きましよう。</p>		
○ふたりは・	○うさぎ	○きつね
どんな子か	そのわけ	場所
そのわけ	時間	そのわけ
きせつ	そのわけ	

①池の中のミミとコンタ

(1まい目)

ある日のことです。きつねのコンタが、うさぎのミミのところにやって来て、

「いっしょに野原であそぼうよ。」

とさそいました。ミミは、

「いいよ。おにごっこをしよう。」

と答えました。

(2まい目)

じゃんけんでコンタがまけて、おにになりました。ミミはかったので、岩のおこうへ走りだしました。小鳥が、おにごっこをしているふたりを見て、

「コンタ、はやく、はやく。」

「がんばれ。つかまるな、ミミ。」

と、おうえんしてくれました。

おにごっこをしているうちに、お昼になりました。コンタが、

「のどがかわいたから、水がのみたいな。」

と言いました。そこで、ふたりは森の小道を通って、池まで走っていきました。

(3まい目)

はしの上で立ち止まって、そうっと水の中をのぞきこみました。すると、池の水がきらきらと光って、ふたりの顔がうつりました。

「池の中にも、わたしたちがいるね。」

ミミが、うれしそうに言いました。

それからふたりは、毎日ここに来るようになりました。

②うさぎときつね

(1まい目)

ある日のことです。きつねがうさぎのところにやって来て、

「野原であそぼうよ。」

と言いました。うさぎは、

「いいよ。あそぼう。」

と言いました。

(2まい目)

きつねがおにになりました。うさぎは、走り出しました。小鳥がおうえんしました。

お昼になりました。きつねが、

「水がのみたいな。」

と言いました。そこで、ふたりは走っていきました。

(3まい目)

はしの上で立ち止まって、水の中をのぞきこみました。すると、池の水が光って、ふたりの顔がうつりました。

「池の中にも、わたしたちがいるね。」

うさぎが言いました。

へア

わたしたちのペアは、○の方がいいと思います。

理ゆうは、

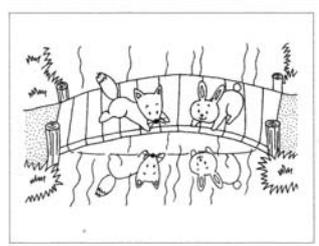
ふりかえり

4

こんなお話を考えた

名前

●お話の下書きを書きましよう。



まい目

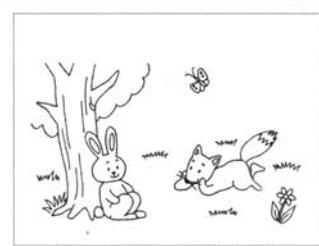
Handwriting practice area with vertical lines and dotted lines for tracing.

4

こんなお話を考えた

名前

●お話の下書きを書きましよう。



まい目

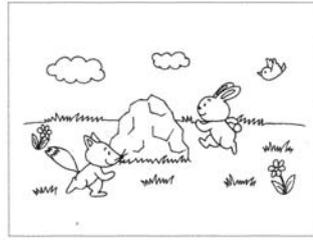
Handwriting practice area with vertical lines and dotted lines for tracing.

4

こんなお話を考えた

名前

●お話の下書きを書きましょう。



まい目

A large writing area with vertical lines. The first line is solid, followed by several lines with a dashed midline, and a final solid line on the right. This is intended for writing a story draft.

5

こんなお話を考えた

名前

●もっとよくなるように、読みかえして、なおすところをたしかめましょう。

① 字のまちがいや、ぬけはありませんか。	② 丸（。）、点（・）、かぎ（「」）のつかい方はどうですか。	③ 文のおかしいところは ありませんか。	④ 会話文は入っていますか。	⑤ じんぶつの気持ち が 書かれていますか。	⑥ ようすが くわしく書けていますか。	⑦ だいたいをくふうしたり、楽しくおわるように くふうしたりしてありますか。
----------------------	--------------------------------	----------------------	----------------	------------------------	---------------------	--

3 3年生の実践

第3学年 国語科学習指導案

指導者 曾我聡子・増田宣子・村上好生・八木元美・阿形明美・田中真理子

(1) 単元名 「漢字と友だち」

(2) 目標

3年生でつきたい力

- ① 文章を正しく読み、文章中の大事な言葉や文を見つけることができる。(評価力・判断力)
- ② 文章をもとに、自分の考えを持つことができる。(思考力・発想力)
- ③ 自分の考えを順序立てて、相手に分かりやすく伝えることができる。(表現力・論理力)

- ・漢字の成り立ちについての文章を読み、書かれている内容を理解する。…①
- ・漢字の書き方について、必要のある事柄を収集したり選択したりして、文章を書く。…②
- ・漢字の成り立ちや新しい漢字の誕生物語などをまとめ、分かりやすく書き、伝えたいことが相手によく分かるように筋道を立てて話す。…③

(3) 指導について

子どもたちはこれまでに、約400字以上の漢字を学習してきた。初めて漢字と出会った1年生の頃はさほど苦にならなかった漢字学習も、新出漢字の数が増える3年生になって、負担に感じている子どもも少なくない。そこで、漢字には音読みと訓読みがあること、漢字は偏と旁から成り立っていること、など、一字ずつ覚えて反復練習をするだけではなく、ゲーム的な要素を取り入れた学習にも取り組んできた。しかし、これらの取り組みでは漢字に親しみを感じ、子どもたちが自らの言語表現の中で漢字を積極的に使うようになるためには不十分であった。子どもたちが受動的に漢字を覚えるという漢字学習からの脱却が必要ではないかと考えた。

漢字は表意文字である。漢字一つひとつにその成り立ちがある。物の形を記号化した象形文字や、絵として表わしにくい事柄を抽象的な記号や組み合わせの約束によって表した指事文字、二つ以上の文字を組み合わせで新しい意味を示した会意文字などがある。本単元では、漢字がもつこれらの特徴を知る活動を展開する。具体的には、①漢字の成り立ちに注目し、物語としてとらえる活動、②漢字をいくつかの部分に分け、書き方を楽しく覚える活動、③意味のある部分を組み合わせで新たな漢字を考え出す活動、に取り組むこととする。これらの活動を通じ、漢字の記号性と造形性に関心をもつことで、漢字そのものに対する親しみをもつことができ、楽しみながら漢字学習ができるのではないかと考えた。さらに、漢字を言葉遊びの素材として扱い、漢字で遊ぶことにより、子どもたちが主体的に漢字学習に取り組むようになることを期待するものである。

学級みんなで「おもしろ漢字ブック」を作って、それを活用しようという単元での学習のゴールを設定し、それに向けて、ペアでの活動やグループでの活動を展開することとする。漢字の成り立ちについては、教科書にある「<資料>あっとおどろく漢字の話」をもとに、正しい漢字の成り立ちを理解した上で、それに基づいた話を考えるようにする。昔の人の暮らしに思いを馳せることによって、漢字への親しみを感じさせたい。また、漢字の書き方歌の活動においては、クイズ形式にした作品発表をするなど、可能な限り遊びの要素をとり入れた活動にしていきたい。さらに、新しい漢字の発明においては、自分たちの暮らしや思いを表わせるような助言をしたい。

(4) 単元の指導計画と評価計画 (全 15 時間)

次	目標	時数	学習活動	評価
1次 2時間	学習のねらいと流れをつかみ、漢字の成り立ちを理解する。	2	・単元全体の学習のねらいや流れを確認し、資料を読み、漢字の成り立ちをまとめる。	・学習の仕方が分かり、学習課題をもつ。(関心・意欲・態度) ・「休・名・自」の成り立ちを理解する。(評価力・判断力)
2次 9時間	・「漢字たんじょう物語」を考えて遊ぶ。	3	・「漢字たんじょう物語」の書き方を知り、好きな漢字を一つ選び、「たんじょう物語」を考え、グループに分かれて遊ぶ。	・「漢字たんじょう物語」を楽しんで作る。(関心・意欲・態度) ・漢字の成り立ちに沿って、「漢字たんじょう物語」を書く。(思考力・発想力) ・お互いの作品のよさを見つけながら遊ぶ。(表現力・論理力)
	・「漢字の書き方歌」を作って遊ぶ。	3	・教科書の記述より、活動の目的・遊び方を知り、好きな漢字を選び、歌を作ってカードに書く。	・楽しんで「漢字書き方歌」を作る。(関心・意欲・態度) ・適切な漢字を選び、筆順を追って歌を書く。(思考力・発想力・表現力)
			・「漢字の書き方歌」を紹介し合う。【1組 本時 3/3】	・相手に伝わるよう、クイズ形式で紹介し合う。(表現力・論理力)
	・漢字を組み合わせて新しい漢字を発明し、その「たんじょう物語」を書き、発表をし合う。	3	・教科書の記述より、活動の目的・遊び方を知る。 ・新しい漢字を発明し、その「たんじょう物語」を書く。【3組 本時 2/3】 ・発明した漢字とその「たんじょう物語」を発表し合う。【2組 本時 3/3】	・楽しんで新しい漢字を作り、その誕生物語を作る。(関心・意欲・態度) ・新しい漢字を作り、それを分かりやすく説明する物語を作る。(思考力・発想力・表現力) ・相手に分かりやすく発表し、友だちのよいところを見つける。(表現力・論理力)
3次 4時間	・学習を振り返り、本(おもしろ漢字ブック)にまとめ、本を活用する。	4	・これまでの遊びの中で、特に気に入ったものを一つ選んで清書し、「おもしろ漢字ブック」として遊びごとに分けて製本する。 ・学習を振り返り、感想を書くとともに、「おもしろ漢字ブック」にある漢字を使って文章を書く。	・楽しんで「おもしろ漢字ブック」を作る。(関心・意欲・態度) ・自分が作った作品を推敲し清書する。(思考力・発想力・表現力) ・できあがった「おもしろ漢字ブック」を活用して新たな文章を作る。(論理力・表現力) ・単元全体の学びの振り返りをする。(評価力)

(5-1) 本時の指導【1組】

1) 目標

- ・「漢字の書き方歌」を発表でき、友だちの「漢字の書き方歌を」聞いて漢字を書くことができる。
- ・友だちの「漢字の書き方歌」を聞いて、自分なりの感想を伝えることができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
5分 一斉	1. 本時のめあてを知る。	・学習の手順を説明する。	・学習の課題と流れが分かったか。 ・クイズの出題と回答の仕方が分かったか。 ・感想の伝え方が分かったか。
30分 グループ	2. 「漢字の書き方歌クイズ発表会」をする。	<p>「漢字の書き方歌クイズ発表会」をして、自分の感想を伝え合おう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで順番に、以下の方法でクイズ発表会をさせる。 ・回答者は、「漢字の書き方歌クイズ」を聞き、あらかじめ与えられた漢字カードの中から答えだと思ふカードを選ぶ。 ・出題者は、問題を3回口頭で、正解は画用紙を用いて伝える。 ・一問ごとに「ふむふむなるほどカード」(内容について①書き順どおりになっていたか、②歌のようになっていたか、③「なるほど」と思ったところ、を記入する。)に記入し、最後に交換し合う。 ・発表者1ペアにつき、6分でクイズを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちに自分の考えた問題を伝え、正解を示すことができたか。 ・「漢字の書き方歌クイズ」を聞き、答えることができたか。 ・自分なりの感想をカードに記入することができたか。
7分 グループ 個人	3. 感想カードの交換をし、読む。	・もらったカードはワークシートに貼らせる。	・友だちからの感想カードを読み、ノートに貼れたか。
3分 個人	4. ふり返しシートで「ふり返し」を行う。		<p>「漢字の書き方歌クイズ発表会」をして、自分の感想を伝え合ったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の課題が達成できたか、ふりかえることができたか。

3) 授業の視点

- ・聞き手にわかりやすくクイズを出すことができたか。
- ・友だちの出題したクイズに答え、自分なりの感想を伝え合うことができたか。

(5-2) 本時の指導【2組】

1) 目標

- ・発明した漢字のたんじょう物語を、ペアで工夫してわかりやすく発表をすることができる。
- ・他のペアの作った漢字たんじょう物語の発表を聞いて、なるほどと思ったところや、工夫されているなど思ったところを伝えることができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
5分 一斉	1. 本時のめあてと学習の 手順を知る。	・学習の手順を説明する。	・学習の課題と流れが 分かったか。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> ・発明した漢字のたんじょう物語を相手にわかりやすく発表しよう。 ・他のペアの発表を聞いて、なるほどと思うところや工夫しているところを伝えよう。 </div>			
30分 全体	2. 漢字のたんじょう物 語発表会をする。	・発表は、劇やペープサート、紙芝居などペアで考えた方法で行わせる。 ・9つの班から、それぞれ1ペアが発表する。 ・子どもの司会進行で行わせる。 ・聞く側は、「ふむふむなるほどカード」に、 ①発明した漢字のおもしろさ。 ②物語の意味が分かったか。 ③「おもしろ漢字ブック」にのせたいか。 ④物語の感想、を記入させる。 ・1つのペアの発表ごとに、聞き手の評価や感想を伝える。	・ペアで協力して、漢字たんじょう物語をわかりやすく発表することができたか。 ・発表を聞いて、なるほどと思うところや工夫しているところを、カードに書いて、伝えることができたか。
5分 個人	4. 一時間の活動について振り返りをする。	・発表者、聞き手、双方の振り返りをさせる。	・一時間の学習について振り返ることができたか。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> ・発明した漢字のたんじょう物語を相手にわかりやすく発表できたか。 ・他のペアの発表を聞いて、なるほどと思うところや工夫しているところを伝えることができたか。 </div>			
5分 全体	5. 振り返りを学級全体で交流し合う。	・個人での振り返りを共有し合うことにより、学級全体での学びを確認したい。	・お互いの振り返りを学級全体で共有することができたか。

3) 授業の視点

- ・発明した漢字のたんじょう物語を相手にわかりやすく発表できたか。
- ・他のペア発表を聞いてのなるほどと思うところや発表で工夫していたところを伝えることができたか。

(5-3) 本時の指導【3組】

1) 目標

- ・前時に発明した新しい漢字の「たんじょう物語」を作って書くことができる。
- ・ペアでアイデアを出し合い、協力して発表をするための準備をすることができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
7分 一斉	1. 本時のめあてと学習の手順を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の手順を説明する。 ・3年生で学習する漢字一覧表の提示や、国語辞典の用意など、環境を整えておく。 ・本単元3～6時での活動を思い出しながら学習の見通しをもたせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の課題と流れが分かったか。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ペアで発明した二つの新しい漢字の「たんじょう物語」を作ろう。 ・ペアで協力して新しい漢字の発表に必要なものを考え、用意をしよう。 </div>			
30分 個人・ペア	2. 新しく発明した漢字についての「たんじょう物語」を作り、発表のための準備をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・発明した漢字の成り立ちも説明できるように助言をする。 ・2つの「たんじょう物語」を作る。15分経過したところでペアでの話し合いのための時間を設ける。 ・ペアでの進行状況に合わせ、発表の仕方を決めたり、発表のための準備物をそろえたり、それぞれのペアでの活動をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージを広げながら、発明した漢字についての「たんじょう物語」を作ることができたか。 ・ペアでアイデアを出し合い、協力して活動をすすめることができたか。
3分 個人	3. 一時間の活動について振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアで取り組んだ意義についても振り返らせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一時間の学習について振り返ることができたか。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ペアで発明した二つの新しい漢字の「たんじょう物語」を作れたか。 ・ペアで協力して新しい漢字の発表に必要なものを考え、用意ができたか。 </div>			
5分 一斉	4. 振り返りを学級全体で交流し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・個人での振り返りを共有し合うことにより、学級全体での学びを確認したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いの振り返りを学級全体で共有することができたか。

3) 授業の視点

- ・前時に発明した新しい漢字の「たんじょう物語」を作って書くことができたか。
- ・ペアでアイデアを出し合い、協力して発表をするための準備をすることができたか。

(6) 本単元の振り返り

3年生では、3年生でつきたい力を、

①文章を正しく読み、文章中の大事な言葉や文を見つけることができる。(評価力・判断力)

②文章をもとに、自分の考えをもつことができる。(思考力・発想力)

③自分の考えを順序立てて、相手に分かりやすく伝えることができる。(表現力・論理力)

ととらえ、「漢字と友だち」の単元を設定した。

この単元の目標を、

・漢字の成り立ちについての文章を読み、書かれている内容を理解する。・・・①

・漢字のでき方について、必要のある事柄を収集したり選択したりして、文章を書く。・・・②

・漢字の成り立ちや新しい漢字の誕生物語などをまとめ、分かりやすく書き、伝えたいことが相手によく分かるように筋道を立てて話す。・・・③

と設定し、教科書に沿って3つの学習を計画した。

漢字は表意文字であり、漢字一つひとつにその成り立ちがある。物の形を記号化した象形文字や、絵として表わしにくい事柄を抽象的な記号や組み合わせの約束によって表した指事文字、二つ以上の文字を組み合わせる新しい意味を示した会意文字などがある。本単元では、

①漢字の成り立ちに注目し、物語としてとらえる活動

②漢字をいくつかの部分に分け、書き方を楽しく覚える活動

③意味のある部分を組み合わせる新たな漢字を考え出す活動

に取り組む学習を展開することにした。これらの活動を通し、漢字の記号性と造形性に関心をもつことで漢字そのものに対する親しみをもつことができ、楽しみながら漢字学習ができると考えた。さらに、漢字を言葉遊びの素材として扱い、漢字で遊ぶことにより、子どもたちが主体的に漢字学習に取り組むようにさせたいと考えた。以下に、それぞれの活動の展開と子どもたちの様子について、まとめてみた。

1) 「漢字たんじょう物語」を作ろう。

・教科書にある「〈資料〉あつとおどろく漢字の話」の、「休」の話、「名」の話、「自」の話を読み、昔の人の暮らしに思いを馳せながら、漢字の成り立ちを理解した。

・「男」・「岩」・「鳴」・「問」・「聞」の成り立ちと意味を調べ、その漢字を二つの部分に分け、その二つを組み合わせる、「漢字たんじょう物語」を考えて書いた。

・同じ漢字で物語を作ることになるので、成り立ちについては共通しているが、物語は児童が自由に発想して書き、それぞれにみんな自分の思いの表れた物語を作ることができた。

・発表会では、自分の作った物語に合った絵を書き、紙芝居風にしてグループで楽しくおたがいの物語のよさを見つけながら発表し合った。友だちの発表を聞いた後は、なるほどと思ったことやよかったことをカード(ふむふむなるほどカード)に書いて渡し、交流しあった。

・この活動を通して、多くの子が漢字の成り立ちに興味をもつことができ、いろんな漢字の成り立ちを「漢字成り立ち辞典」や「漢字辞典」で調べる姿が見られ、漢字への親しみを感じることができたようだ。

2) 「漢字の書き方歌」を作ろう。

・教科書の二つの歌を読んで作り方を理解した後、自分で選んだ漢字の、書き順どおりに歌を進めてい

くこと、意味の通る歌であることを確認して歌の作成に取りかかった。

- ・児童は、まず、どの漢字にしようか迷ったり、漢字が決まっても、書き方歌がなかなか作れなかったり、苦労している子が多かった。

- ・ペアで協力して、各自が選んだ漢字の書き順を確かめたり、どのような部分に分けることができるか、それを歌のようにどのように表現するか、相談しながら進めた。

- ・同じ漢字で書き方歌を作る児童がいたが、その子の発想で作っていくので、同じ漢字でも、一人ひとりちがった個性的な書き方歌ができあがった。

- ・漢字書き方歌の発表会は、可能な限り遊びの要素を取り入れた活動を展開させたいと考え、グループでクイズ形式にして紹介し合った。出題者は、作った歌をクイズ形式で発表し、回答者はその歌のとおり漢字を書いていき、出題者が用意した3つの漢字から答えを選んでもらう（三択）ようにした。回答者は、出題者の問題を注意深く聞きながら回答し、出題者は、答えを書いたカードを示した後、出題者を交代して、楽しくクイズ発表会を進めることができた。

- ・この活動でも、友だちの発表を聞いた後、なるほどと思ったことやよかったことを「ふむふむなるほどカード」に書いて渡し交流し合った。もらった児童は、とても満足そうであった。

3) 「おもしろ漢字、大発明」の活動。

- ・漢字と漢字や偏と漢字を組み合わせて新しい漢字を発明し、その漢字の「たんじょう物語」を作って書くというのがねらいである。

- ・教科書で、「旅」と「鳥」で「わたりどり」という新しい漢字を作り、そのたんじょう物語を書くということを押さえた後、主な偏とその意味を書いて掲示し、「偏」と漢字を組み合わせる場合の参考にさせた。まず、子どもたちに、自由に漢字を組み合わせておもしろ漢字を作らせてみた。「竹」と「食」で「ぱんだ」、「逆」と「鳥」で「こうもり」、「イ」と「歩」で「さんぽ」など、子ども達は、いろんな漢字を想像力豊かに発明した。

- ・その後、イメージを広げながら発明した漢字についてのたんじょう物語を作った。自分達が発明した漢字の物語を作るということで、子ども達は意欲的に取り組み、独創的な物語を作れた子が多かった。

- ・作った物語の発表は、紙芝居やペープサート、劇などにして発表会をすることにした。ペアで協力しながら、せりふや絵、小道具などを作成し、発表会では聞き手によく分かるように工夫して発表するグループが多かった。聞き手も、発表者の発明した漢字のおもしろさや物語の意味をしっかりと聞きながら、「ふむふむなるほどカード」に感想を書き、交流をした。発表会を通して、友だちが発明した漢字のおもしろさやたんじょう物語で考えた漢字の成り立ちの工夫が分かり、お互いのがんばりを評価し合うことができた。

3つの活動を終えた後、学級で、これまで作ってきた物語や歌を収録して「おもしろ漢字ブック」を作成した。自分が気に入っている漢字たんじょう物語や漢字書き方歌を清書して製本し、お互いに読み合っ、感想を伝え合ったり、みんなが新しく発明した漢字を使って文を書いたりして、楽しく漢字に触れることができた。

「漢字と友だち」の単元の学習を通し、子ども達は、漢字の成り立ちを知ったり、書き方歌や新しい漢字を発明するなど、漢字を楽しく学習することができた。また、ペアやグループで、発表会に向けて、相手に分かりやすく伝えようと工夫したり、聞き手は、相手の発表をしっかりと聞き、感想を伝え合うことで、

お互いの作品のよさを認め合うことができた。

(7-1) 1組の本時の振り返り

3年生になって、学習する漢字は量も内容も増えてきた。新出漢字の中には画数も多く、子どもたちの中には、漢字を学習することに困難を感じる児童も多い。本単元では、漢字の成り立ちにはそれぞれ意味があり、その意味を象形化したものが漢字であるということを知るとともに、「漢字たんじょうものがたり」「漢字の書き方歌」「おもしろ漢字大発明」などの学習を通して、漢字学習に興味をもち、単元目標を身につけさせることをねらいとした。この学習において、支点児Aを中心に振り返りをしていく。Aは学習に積極的でなく、特に漢字を書くことに強い抵抗感があった。授業中に落ち着きをなくし、私語や立ち歩きが多く見られた。物を作ったり、絵を書いたりすることは好きで、自分の想像の世界に入ると集中することができる児童である。

1) 漢字たんじょうものがたり

「男」「岩」「鳴」「問」「聞」について成り立ちを学習した。これらの文字は、これまで学習した漢字に二分できる。二分した文字が合わさると、これらの漢字になることから、部首があることを学習した。また、部首にもさまざまな種類があり、漢字の象形化が部首に発展したことを知ることができた。これらをもとにして、先にあげた漢字の「漢字たんじょうものがたり」を想像し書く学習をした。また、それを絵に表す活動もした。

Aは、象形文字から漢字への成り立ちを示した掲示物に興味を示したようであった。

自分なりの「漢字たんじょうものがたり」を考えただが、文字に表すことが困難なため、絵に表すことにした。絵を指差しながら口頭で「漢字たんじょうものがたり」を友だちに伝えることができた。

2) 漢字の書き方歌

漢字をいくつかの部分に分け、その漢字の意味や書き順に沿った「漢字の書き方歌」を考えたと考えた歌は、クイズ形式にして班で発表し合った。発表時には、ペープサートを用いて楽しみながら発表差会を行うことができた。

Aは自分のアイデアをどうすれば表現できるのかななどを友だちに相談し、興味をもって学習に参加できるようになってきた。クイズ発表では、熱心に友だちの発表を聞き、自分の自分も発表することができた。

3) おもしろ漢字大発明

それぞれの漢字や部首には意味があるということをもとに、それらを組み合わせて、オリジナルの漢字を作った。また、作った漢字の「漢字たんじょうものがたり」を文字や紙芝居で発表した。

今回の発表では今までにないくらい、Aは学習活動に積極的にとりくむことができた。また、学習の最後には「国語が教科の中で一番好き。」との声を聞くことができ、以前は全く取り組みが見られなかった、漢字の宿題も積極的にやってくるようになった。

(7-2) 2組の本時の振り返り

「漢字と友だち」の学習活動の三つ目の「おもしろ漢字、大発明」漢字たんじょう物語の発表会が本時の学習であった。

前々時で、教科書で、新しい漢字を発明してそのたんじょう物語を書くということを学習した後、子どもたちに、自由に漢字を組み合わせておもしろ漢字を作らせた。「竹」と「食」で「ぱんだ」、「逆」と「鳥」

で「こうもり」、「イ」と「歩」で「さんぽ」など、子ども達は、いろんな漢字を想像力豊かに発明した。

その後、イメージを広げながら発明した漢字についてのたんじょう物語を作った。まず、個人で発明したおもしろ漢字のたんじょう物語を作り、ペアで協力しながら、お互いの物語を推敲しながら、より分かりやすい物語にしていっていったが、子ども達は意欲的に取り組み、独創的な物語を作れた子が多かった。

作った物語の発表は、ペアでどちらかのたんじょう物語を選んで、二人で、紙芝居やペープサート、劇などにして発表会をすることにした。発表会の目標は、発表する側の「発明した漢字のたんじょう物語をペアで、分かりやすく発表することができる」と、聞き手の「他のペアの作った漢字たんじょう物語の発表を聞いて、なるほどと思ったところや、工夫されているなと思ったところを伝えることができる」と設定した。発表会に向けて、どのペアも、聞き手によく分かるようにと、せりふや絵、小道具などを協力しながら作成し、発表の練習をすることができた。

発表会を計画した当初は、3つのペアでグループを組んで、互いに発表し合い、聞き手は「ふむふむなるほどカード」を書いて、感想を交流するという計画であった。(前回の「漢字書き方歌」はこのやり方で行ったが、これは3グループ内での発表であり、学級全体に発表するという形ではなかった。)

子ども達からは、発表会は、学級全体で発表会をもち、お互いの物語を紹介し合いたいという意見があり、学級全体で2回の発表会を行い、1回の発表会では、9つのペアが発表し、聞き手は、「ふむふむなるほどカード」を書いて、交流するというようにした。

発表会は、子どもの司会進行で進めた。1回目の発表会は、研究発表会の前日に行い、研究発表会当日は2回目の発表会となった。どちらの発表会も、子ども達は、準備したペープサートや紙芝居などをうまく使いながら、今まで発表のために工夫してきたことを発揮しながら、聞き手に分かりやすく発表しようがんばっていた。研究発表会当日に発表したペアは、友だちだけではなく、参観者が多くいたので緊張したようだが、たくさんの人に聞いてもらったので満足感は大きかったようだ。

一つのペアが発表すると、聞き手は、1ペアの発表につき1分30秒でふむふむなるほどカードに、①発明した漢字のおもしろさ、②物語の意味がわかったか、③「おもしろ漢字ブック」に載せたいか、を3段階評価し、司会が、「3」と評価した人に挙手を求める方法を取り、聞き手の参加度を高める工夫をした。また、発表したペアの物語の感想を、輪番で指定したペアに発表してもらい、1ペアの発表ごとに、感想を交流し合った。聞き手は、評価をしっかりと発表を一生懸命聞くことができた。また、発表者は、自分達の物語の発表の評価をすぐに知ることができ、「3」と評価してくれた数を確認しながら、ペアで協力して発表した喜びを感じていた。

子どもたちの振り返りからは、発表者としては、「みんなに分かりやすく伝えようと、工夫して発表し、みんなから「3」をたくさんもらったのでうれしかった。」という声や、聞き手としては、「発表会を通して、友だちが発明した漢字のおもしろさやたんじょう物語の工夫がよく分かり、楽しい発表会だった。」という感想が多く、お互いのがんばりを評価し合うことができた発表会であった。

*「3組の本時の振り返り」については、当日の実践を、近親者葬儀で実施できなかったため、ここに掲載しない。

「漢字と友だち」学習のふりかえり

名前 ()

	時	学習の計画	◎○△	学習を終えて
漢字のなりたちを知ろう	1	学習の計画を知る。		
	2	「あつとおどろく漢字の話」を読み、漢字のなりたちを知る。		
	3	「漢字たんじょう物語」の遊び方を知る。		
漢字で遊ぼう	4	「漢字たんじょう物語」を作って発表のじゅんびをする。		
	5	「漢字たんじょう物語」の発表会をする。		
	6	「漢字の書き方歌」の遊び方を知る。		
	7	「漢字の書き方歌」を作って発表のじゅんびをする。		
	8	「漢字の書き方歌」の発表会をする。		
	9	「おもしろ漢字、大発明」の遊び方を知る。		
	10	「おもしろ漢字、大発明」を作って発表のじゅんびをする。		
	11	「おもしろ漢字、大発明」の発表会をする。		
おもしろ漢字ブックを作ろう	13 12	「おもしろ漢字ブック」にどの遊びをのせるのかを決めて、原こうを書く。		
	15 14	「おもしろ漢字ブック」を作り、感想を書いたり、新しく発明した漢字を使って文を書いたりする。		

☆漢字たんじょう物語

1 漢字と友だち

名前

● 「男・岩・鳴・問・聞」のうちから好きなものをえらんで、「漢字たんじょう物語」を書きましょう。

のたんじょう

は、

と

とを組み合わせてできています。

☆漢字の意味（何を表しているか）

☆たんじょう物語

2 漢字と友だち

名前

● 新しい漢字を発明して、そのたんじょう物語を書きましょう。
 〈発明した漢字〉 〈読み方〉

漢字の意味

という漢字を作りました。

で、

3年生実践資料3：発表会の手順と振り返り

<司 会>

今から、<おもしろ漢字、大発明>
たんじょう物語、発表会をはじめます。

まず初めに、1 2 3 4 5 6 7 8 9 ばんさん、発表をおねがいし
ます。

(1ばん、発表)

ふむふむなるほどカードを書いてください。 1分30秒

(ピッ、ピッと鳴ったら)

- ・「発明した漢字のおもしろさ」が 3の人手をあげてください。
- ・「物語の意味がわかったか」が 3の人手をあげてください。
- ・「おもしろ漢字ブックにのせたいか」が 3の人手をあげてください。

3 4 5 6 7 8 9 1 2 はんさん、感想をおねがいします。

(3はんが感想を発表)

つぎは、2はんさん、発表をおねがいします。

(くりかえす。)

(全部のはんが終わったら)

これで、発表は全部終わりました。
ふりかえりカードを書いてください。

へ
友
だ
ち
の
発
表
を
聞
い
て
へ

へ
漢
字
た
ん
じ
ょう
物
語
を
発
表
し
て
へ

ふ
り
か
え
り
カ
ー
ド

名
前

4 4年生の実践

第4学年 国語科学習指導案

指導者 福田 真知 山本 優子 岩森 進

(1) 単元名 ごんぎつね

(2) 目標

4年生でつけたい力

- ① 目的に応じ、文章や図表などに書いてあることを正しく読み取ることができる。(評価力・判断力)
- ② 明確な根拠をもとに、自分の考えをもつことができる。(思考力・発想力)
- ③ 自分の考えを筋道だてて、相手に分かりやすく伝えることができる。(表現力・論理力)

- ・7つのポイントに沿って、事件に着目しながら、登場人物の心情の変化を読み取る。・・・①
- ・最後の場面に続くごんと兵十のその後について、自分なりの考えをもち物語を書く。・・・②
- ・自分たちの考え方を確認しより深い考えを得るために、5年生に『ごんぎつね、その後』物語を伝える。・・・③

(3) 指導について

新美南吉の文学は多くの子どもの感性を育ててきた。なぜ「ごんぎつね」は、このように永く教科書教材として取り上げられてきたのか。私たちはこんな素朴な疑問から、学習の構造を組み立てた。

この作品が今も愛され続ける理由の一つに、物語の終わり方が挙げられる。余韻を残すラストは、読み手の気持ちを激しく揺さぶり、想像力を掻き立てる。そして、読み手に何種類ものごんと兵十の物語を想像させてくれる。そこで、最後の文に続く余韻に着目し、単元構想の第3次での表現・発信として、「ごんぎつね、その後」を5年生に聞いてもらう活動を設定した。具体的には、「青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。」に続く物語展開を、根拠をもとに作り上げる。協同の手法を取り入れながらグループで相談する。

続きの物語を作り、5年生に聞いてもらうことに重要な意味がある。ひとつは、伝える相手を明確に意識できること。ひとつは、「ごんぎつね」既習の学年であり、「その後」についてディスカッションすることで、新しい「ごんぎつね」像を発見できるという期待をもてることである。さらに、第1次での読み取りは、必ず読み手の価値観が続きの物語作りに反映されるわけで、文学作品鑑賞の新しい形として捉えることもできる。また、1学期の『『かむ』ことの力』の学習では、3年生に体の働きやしぐみについて発表するという経験をしている。その実績を自信に換えて、今回、5年生に対面できるであろう。

その『『かむ』ことの力』では、教材文の読み取りが十分でなかったという反省を活かし、学習の手引きで7つのポイント(中心人物や事件、クライマックスなど)に沿って物語を読んでいく。第2次では、これまでの実践から、最も参加度が高いと思われる3人グループでの活動を中心にする。最後の文に続く自然な流れの物語について、グループやクラス全体で吟味したあと、「ごんぎつね、その後」の物語作りに取り組ませたい。その時落としてならないのが、「ごんと兵十の気持ちは通じ合えたのか」という問題である。

「ごんぎつね」が今も人の心を捉えて放さないのは、この「人と人がつながることのむずかしさ」という新美南吉作品の底流にあるテーマ性の深さにあると考える。そこにポイントを置いて、取り組ませたい。

(4) 単元の指導計画と評価計画 (全 13 時間)

次	目 標	時数	学 習 活 動	評 価
1 次 7 時間	・学習のめあてと流れをつかむ。 ・7 つのポイントに沿って事件や登場人物の心情の変化を読み取る。	1	・教材文を読んだ感想を交流しながら、学習の見通しをもつ。	・読んだ感想を出し合い、学習の見通しをもつことができる。 (関心・意欲・態度) ・5 つの事件から場面の様子やごんと兵十の心情を読み取ることができる。(評価力・判断力) ・5 つの事件から、物語のクライマックスをとらえ、まとめの一文を書くことができる。(評価力・判断力)
		5	・教材文をできごとによって 5 つの事件に分ける。兵十との関わりの中で、5 つの事件から読み取ったごんの心情の変化を一文に表す。	
		1	・5 つの事件の読み取りを通して、物語のクライマックスをとらえ、まとめの一文を書く。	
2 次 3 時間	・その後のごんと兵十の物語をつくる。	1	・『ごんぎつね、その後』の物語について話し合い、5 年生に「なるほど」と言ってもらえるものを選ぶ。【1 組・3 組】	・自分の考えが伝わるように、筋道を立てて書くことができる。(思考力・発想力)
		2	・『ごんぎつね、その後』の物語を 3 人組でつくる。	
3 次 3 時間	・自分の物語を筋道立てて 5 年生に分かりやすく伝える。	1	・学年間で、お互いに 5 年生向けの発表の練習をする。	・自分たちの物語を 5 年生にわかりやすく伝え、お互いに考えを深めることができる。(表現力・論理力)
		1	・5 年生に「ごんぎつね、その後」の物語を語り、感想や意見を交流する。【2 組】	
		1	・5 年生との交流から新しく学んだことをクラスで発表し合う。	

*参観者にも『ごんぎつね、その後』を聞いてもらう。教室外にワークシートを置き、5 年生と一緒に物語を聞いた感想を書いて、4 年生に渡してもらう。

(5-1) 本時の指導 【1・3組】

1) 目標

・「ごんぎつね」の最後の文に続く物語（『ごんぎつね、その後』）として、5年生に「なるほど」と言ってもらえるものを、話し合っ選ぶことができる。

・自分の考えをもち、グループや全体に自分の考えを出すことができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
5分 一斉	1. 本時のめあてを知る。	・学習の手順を確認する。	
	最後の文に続く物語として、5年生に「なるほど」と言ってもらえるものを、話し合っ選ぼう。		
15分 グループ	2. 個人の考えを出し合い、グループで、続きの物語のパターンを2つ考える。	・個人の考えをもとに、物語のパターンをまとめの1文にして、短冊に書かせる。 ・続きの物語のパターンを「死んだごん」と、「生きていたごん」とに大きく分けさせ、黒板に各班が短冊を貼る。	・個人の考えを伝えられているか。 ・友だちと話し合っ、物語のパターンを考えているか。
10分 グループ	3. 黒板の短冊を見て、5年生に「なるほど」と言ってもらえる物語を選び、発表する。	・全部貼られた時点で、「なるほどポイント」を確認させる。 ・ホワイトボードに「◎」と「△」に分け、理由をつけて書かせる。	・友だちと意見をやりとりしながら、納得できる続きの物語を選ぶことができたか。
10分 一斉	4. 続きの物語を12個選ぶ。	・5年生との交流で12通りの物語を語れるように、「なるほどポイント」をもとにしぼらせる。	・自分の考えをグループ内に出せたか。
5分 個人	5. 振り返りを書く。		・物語のパターンや友だちの意見を聞いて、どんなことを思ったか。
	最後の文に続く物語として、5年生に「なるほど」と言ってもらえるものを、話し合っ選ぶことができたか。		

3) 授業の視点

・「ごんぎつね」の最後の文に続く物語（『ごんぎつね、その後』）として5年生に「なるほど」と言ってもらえるものを話し合っ選ぶことができたか。

・自分の考えをもち、グループや全体に自分の考えを出すことができたか。

(5-2) 本時の指導 【2組】

1) 目標

- ・自分たちの作った物語を5年生に伝え、物語の感想をもらう。
- ・5年生と交流することで、伝え合うことの楽しさを味わう。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
5分 一斉	1. 本時のめあてを知る。	・学習の手順を確認する。	
5年生に『ごんぎつね、その後』を語り、なるほどと思ったところ、思えないところを聞こう。			
25分 グループ	2. 5年生に「ごんぎつね、その後」を語る。 5分×4回 ①自己紹介 ②物語の主旨説明 ③朗読 ④質問 1チーム20人 4年3人×4グループ=12人 5年2人×4グループ=8人 ×3チーム(ABC)	・5年生への課題を知らせる。 「4年生に根拠をもって物語の感想を伝えよう」 質問 今の物語はどうでしたか？ 納得できましたか？ ・感想を聞き取り、メモする。	・手順どおりにグループ内の交流を進めているか。 ・5年生と簡単なやり取りができているか。
5分 グループ	3. 3つのチームごとに振り返りをする。	・事前に4年の司会、記録、発表者を決めておく。 ・「印象に残った物語はどれでしたか？どんなところが良かったですか？」	
5分 一斉	4. 各チームで出た意見を交流する。 5年生退場	・「〇〇という理由で〇〇グループの発表が良い・・・」 ・5年生へ感謝の拍手	
5分 個人	5. 振り返りをする。	・発表会について、自分の感じたことを書かせる。 ・次時で「振り返り」を中心に交流し合うことを確認しておく。	・自分の思いを書くことができていますか。
5年生に『ごんぎつね、その後』を語り、なるほどと思ったところ、思えないところを聞いたか。			

3) 授業の視点

- ・5年生とグループ内で簡単なやり取りができたか。
- ・5年生のおかげで、伝えることの楽しさを感じることができたか。

(6) 本単元の振り返り

1) 単元設定のねらいと工夫

一学期の重点教材である『かむ』ことの力』では、読み取りが浅く、第2次の書く活動に深まりが見られなかった。第1次と第2次の学習が乖離していた。説明文の構成を第2次で活かせなかったことや、人体のしくみや働きについて深く学習しないで、第2次に入ったため、その第2次の活動は単なる情報の収集に終わってしまった。第3次で3年生に伝えるという相手意識をもってしばらくモチベーションが保たれた。

その教訓から、「ごんぎつね」第1次の読み取りの方向について工夫が必要だと。そこで、「学習の手引き」を示して、読み取り方のポイントをおさえた。また、従来のように6つの場面ごとに進める読み取り方ではなくて、つながりを考慮して5つの場面とし、さらに場面を「事件」と表現することで物語の出来事に注目させるように工夫した。事件を一文としてまとめることで事件の概略と心情を深く読み取れるようにした。

第2次においては、この物語の続編を書くという活動を取り入れた。これは、新見南吉の文学に流れるエンディングが読者にその後を様々に想像させる余韻を残すものであることから、子どもたちにも想像の翼を広げ、作品に親しむ機会を与えたかった。

第3次では、作った物語を5年生に語るという活動を取り入れた。5年生を選んだ理由としては、昨年度、物語の最後の場面についてこだわり、「終わり方に納得できるか、できないか」ということを話し合うという経験をしている。だから、「ごんぎつね」のラストについては、6年生よりも記憶が鮮明であり、続きの物語についても個人で考えを深めているだろうと考えたためである。相手意識ということについては、1学期の重点教材からも意欲的に進められるであろうということは予想できた。

2) 取り組みの過程

第1次では、1つの事件を1時間で進める予定であったが、中心人物の心情にせまる発問や課題を教師から投げかけたり、子どものふり返りの中からさらに子どもが考えていけるような課題を探したりすることで、時間がかかった。例えば、ふり返りにおいて、「ごんはやさしいきつねだと思った」というものや「ごんと兵十が最後に心が通じ合ってよかった」という甘い読み取りが見られた。それを受けて、クライマックスの一文のところで「ごんと兵十は心が通じ合えたのか」や「兵十はごんのつぐないに気づいたのか」など二者択一の課題を用意したところ、子どもたちは順に発表していくなどといったパターン化された活動の参加度の高さはまた質の違う、一人ひとりが根拠をもとに発言し、それが自然につながっていくという参加度の高さがみられた。子どもたちはこの活動から「つぐない」や「心の通じ合い」といった物語のテーマ性に気づくことができた。そこから、この活動から第2次の内容は「つぐない」や「心が通じ合えたのか」ということがテーマになった。

第2次では、物語の続編をまとめの一文とし、一人が2種類考え、それをグループでまとめ、全体で評価し、12種類選択するという活動を行った。その過程で、「なるほどポイント」を取り入れ、それに沿った評価をするのだが、基準があいまいだったため、評価しづらい様子であった。また、◎、△という評価基準を用いたが、子どもたちは△＝駄作だという考えがあり、△の評価が集中したグループがあり、失敗感をもたせてしまった。しかし、内容について同じグループのメンバーが詳しく説明することで全員を納得させることができた。

三人組で書く活動に入った段階では、まず一人で考え、それから三人で意見を調整するという方法(1・

2組)と、最初から三人で作るという方法(3組)に分かれた。1・2組では、個人が考えたもので教師が面白いと感じたものに付箋をつけ、その意見に注目して調整するように工夫した。しかし、調整の段階でせっかく考えた意見を活かせずに消えてしまったものもある。3組では、いきなり相談は難しく、できあがった文章は、物語の流れが悪い。つまり、文の寄せ集めという感じになった。そこでエピソードを物語の中に必ず入れることを指示したが、いまいちだった。

第3次においては、まず4年生どうして練習したことで交流にもなり、発表の見通しももつことができたのでよかった。5年生への発表では、たくさんの意見を5年生から得られてよかった。子どもが司会をし、学習を進めていくという形で時間通り進み、最後に各グループで良かった物語を全体で交流できた。5年生の交流後、自分たちの物語を5年生の意見をもとに修正し、完成させた。

3) 成果と課題

長丁場にも関わらず、「読む」、「作る」、「語る」と学習にメリハリがあったので、子どもたちはモチベーションを維持して活動に取り組むことができた。教師側としても読みの段階で子どもたちに与える課題は、中心人物の人間関係に注目したり、二者択一の対立課題を用意して議論させたり、両者を比較させるような課題に取り組みせたりするなど課題のもつ力を感じた。課題によって子どもたちの参加度の質が違うことを第1次の読みを通して強く感じた。

第2次の続編を作る場面では、自由にアイデアを出すのではなく、北川先生の助言通り、作る上での基準をもっと明確にすべきだった。例えば、「一番ハッピーエンドになる続きの物語を作ろう」など、はっきりと比べられるような基準にすることが大切だと感じた。

第3次では異学年との交流を取り入れたが、価値観の違う人間に伝わるようにする難しさを経験することが、これからの子どもの学力向上に貢献する。

また、夏休みに杉江先生の案内で「新見南吉記念館」など新美南吉のふるさとを訪ねたことが、教師として子どもたちに説得力をもって指導に臨めた。

今回のような「ごんぎつね」の進め方というのは、とても実験的な意味合いがあったが、参加者による提案ができた、また考える材料ができたと自負している。

(7-1) 1組の本時の振り返り

前時に「ごんぎつね、その後」のパターンを一人2つ書いていたが、一人ひとりが「ごんが生きている」パターンと、「ごんが死んでしまっている」パターンを一つずつ書いた。それまでの流れをワークシートで振り返ったり、教科書を読み直したりしながら、新美南吉の書いたラストに対する自分の考えを反映させて書いていた。他の友だちがどのような意見を書いているかを休み時間に話している姿が見られるなど、交流するのを楽しみにしていたようである。本時では、個人の考えをグループでまとめる時には、それぞれ似た意見を合わせ、より「なるほど」と言えるものをグループの考えとして発表できていた。全体で出される意見が一つずつ貼られるたびに、「どのような物語が出てきたのかな」と振り返って見る子どもも多く、意欲をもって取り組んでいた様子がたくさん見られた。また、黒板に18パターンの意見が貼られた時、「すごくたくさんの意見がある」と一つひとつを熱心に前に読みにきて、評価をしている姿が見られた。

評価の段階で、一つひとつを熱心に読み比べ、ポイントに沿って評価をしていたが、全体で18パターンの話があり、10分の時間で十分に吟味をすることが難しかったようであった。全体で話し合っただけで採用する「5年生に『なるほど』と言ってもらえる物語」を12パターンに絞る時、黒板に「よかった

もの」を◎、「ポイントに合っていない」を△としたが、◎が集中しているものは最初に採用が決まったが、△や◎が重なった場合や、何もついていないパターンもあり、どのように決めていくのが難しかった。中でも、難しかったのは、「ごんのケガが治るまで看病し、ごんをペットとして育てる兵十」というパターンであった。教師側の思いとしては、新美南吉が書いた時代背景と合致しないと考えていたので、「ペットとして育てるというのは、つながっているのかな」と投げかけたが、子どもたちの意識の中ではペット＝家族という認識があり、人間と動物の理想の温かい姿となっており、ハッピーエンドとしたい思いと合うようで、教科書の内容に戻り、当時の時代背景などをもっとおさえられる読みができるとうよかったと感じた。

また、評価する基準に照らして真剣に相談する子どもたちの姿が見られたが、学年での反省でも出されたように△＝だめだという思いが強く、△はつけにくい様子であった。

みんなで一生懸命考えた物だから修正して採用したいという思いから、△の理由として直せばよいポイントが挙げられているグループもあり、それが12パターンに絞る時に「ここを直せば使える」など、絞りきれない結果になってしまったと感じた。12パターンに絞る場合の基準をもう少し明確に示しておき、パターンを絞るところまでもっていければよかった。クラスでたくさんの意見を出せたという達成感を感じていることがふり返りから見られたが、「みんなで話し合って選べた」という達成感をもっと感じられるところまで展開できればよかった。

(7-2) 2組の本時の振り返り

ごんぎつねの授業のはじめから、5年生にその後の物語を聞いてもらおう、とめあてをもって取り組んだ。そのことによって、何も言わなくても、子どもたちは「しっかり内容を読み取らなければ、その後の物語は作ることができない」という考えをもっていた。

今回の授業の流れの中で、子どもたちがいちばんつながっていたと思われるところは、「その後の物語」を3人で考えているところだ。5年生になるほどと言ってもらうために、いろんな知恵を出し合いながら物語を作っていた。中には、ひとりで考えさせたら、つじつまの合わない文章ができてしまうと予想される子どもも、3人の中のひとりとして、輝く言葉を発したことで、みんな認められ、最後の時間まで生き生きと活躍することができたのが、満足できることであった。

また、3人で物語を考えさせる前に、個人で物語を考えさせたが、発言力、リーダー性のある子どもは、結構凝り固まった考え方をしており、あまり発言しない子どものほうが、のびのびとした内容を考えていたので、3人で力を合わせたときにどうなるかと心配したが、その点は、グループでおもしろいものを選びながら進めることができていた。

さて、本時の授業について。子どもたちは、年上の学年に物語を伝えるとあって、練習はしっかりしてきたのに、とても緊張していた。しかし、自分ひとりではなく、3人のグループでひとつの物語を聞いてもらうということで、物語はうまく伝えられたようである。

心配だったのは、物語を伝え、5年生から内容がどうだったのか、なるほどと言ってもらえるのかを聞きながら、会話を通して内容を深めるというところだった。5年生の1つのグループに対し4つのグループが物語を伝えたが、一つ目はあまり話し声が聞こえにくかった。二つ目以降は慣れてきたのか、どんなことを話せばいいのかがわかってきたようで、5年生も4年生に質問したり、自分の考えと比較して思いを伝えたりしていた。

もうひとつ心配だったのは、それぞれのチームでどのグループの物語がよかったのかを話し合いながら選んでいくというところだった。チームとは、4年生の4グループ、5年生の4グループを集めた約20人の集まりのことである。それぞれのチームで4年生の司会者と記録者、そして、チームでの話し合いをまとめ発表するという発表者を決めてあったが、うまく進めることができるかどうか心配であった。4年生同士でも練習はしたことはあったが、5年生が混じっていること、そして、参観者がたくさんいたことで、司会者の緊張は相当なものであったようだ。しかし、5年生の意見を聞き出し、記録者は発言されたものをメモし、発表者は、殴り書きのような記録を見ながら、自分たちのチームで出た意見を全員に伝えることができた。それぞれのチームでたった3人しか経験することができない役割であったが、周りで見ている者も次に同じようなことがあったら、今回のことを思い出しながら、自分の与えられた役割を果たすことができると思う。

以前より、他学年との交流に挑戦したいと思っていたが、このような形で実現することができ、自分のいい経験にさせてもらった。

(7-3) 3組の本時の振り返り

本時の展開について、事前に2組が先行授業を行なったが、問題点が出てきた。それは、あまりに盛りだくさん過ぎて、45分に入りきれないという事。そこで、2時間に分けて展開することにした。

初めの予定は、①個人で2つのパターンをワークシートに書き、②それをグループで相談して、4枚の短冊にまとめ、③さらに全体で話し合っ、選ぶという流れであった。

前時で2つのパターンを書いておくことにした。

本時では、個人の考えたパターンを交流し、グループで2枚の短冊を書き、黒板に並べ、相互評価しながら、18枚から12枚に絞る。

流れは少し単純化できた。しかし、問題点や気になっていた点があった。

ひとつは、「なるほど」ポイントである。5年生に「なるほど」と言ってもらえるように目標であった。この課題に行き着くまで、何度も語句を修正した。では、「なるほど」とはどういう時に思うのかについて、子どもたちと話し合ったが、いい言葉が浮かばないまま、子どもたちの頭の中も抽象的な「なるほど」のまま、本番を迎えた。

実は、前日教師仲間と話しているとき、こんなことを言われた。「考えがガラッと変えられたとき、それもあるなと思った時、なるほどと思うんじゃないか」兵十が加助に言われた時のように、わたしは「う〜ん」と納得できない感じだった。5年生の価値観を変える物語の続編なんて、到底無理だと思っていたから。

授業当日。

時間設定をしていたが、短冊を貼りに行く時間、相互評価で◎△を発表する時間を別にとったため、最後の12枚に絞る話し合いができなかった。振り返りの交流もしたかった。子どもたちは、「リレー発言」や「譲り合い発言」(指名なしで、前の人の話が途切れたらすっと入って発言する)をしたくてうずうずしていたのに。

しかし、ドラマがあった。

相互評価の時、あるグループが出した「ごんが村人に撃たれる物語」について、△評価が集中した。△を短冊に書かれるたびに、それを考えた男の子がうつむき、とうとう泣き出した。大勢の参観者の中で私

は焦った。しかし、その子は個性的な子で、深く物事を考えるタイプの子であったので、何か考えがある
と思い、尋ねてみた。しかし、ただ泣くだけで答えてくれない。そのグループにはあと2人女の子がいる。
その子達に「彼はどんな話を作ろうとしていたの？」と助けを求めた。その二人は、ふだんから非常にお
となしい子で、「これは、聞き出せないな・・・」とあきらめかけた時、ぽつりぽつりと、「村人に撃たれ
るまでの経緯」を話し出した。2人とも発言した。それをクラス中が聞き耳を立てて聞いていた。参観者
も同様だったように思う。固唾を呑むとはこのことだ。

話し終わって、一人の子が「なるほどお」とつぶやいた。思わずついて出た言葉だろう。まさにこれが
「なるほど」であることを、私も子どもたちも「体験」した。

ごんが償いをしていたことを兵十は知ったが、村人たちはまだ気づいていない。2度目の悲劇の物語で
ある。子どもたちは無意識に生き残ったごんに、2度と悲劇は起こらない、幸せに暮らすんだという願い
のようなものがあつたのだろう。その平和を乱した彼の続編にブーイングの反応を示した。だからこそ、
「それもあたりだ」と考えを変えられたので「なるほど」である。

ハッピーエンドではない、他の人とは違う物語を考えることができる彼が、うちのクラスにいて良かつ
たと、次の日みんなに話をした。

認知目標（「なるほど」の意味が分かる）と人間関係が同時に達成されたと思う。

ごんぎつね

授業の流れ

名前【

一次

- 学習のめあてと流れをつかもう。
- 七つのポイントにそって事件や登場人物の心情の変化を読み取ろう。

- (1) 教材文を読んだ感想を交流しながら、五つの事件に分け、学習の見通しをもちよう。
- (2) 兵十との関わりの中で、ごんの心情を事件から読み取って、一文に表そう。
- (3) 五つの事件の読み取りから、物語のクライマックスをとらえ、まとめの一文を書こう。

二次

- その後のごんと兵十について、自分なりの物語を作ろう。

- (1) 『ごんぎつね、その後』の物語について話し合い、多くの人に納得してもらえるものを選ぼう。
- (2) 『ごんぎつね、その後』の物語を三人組で作ろう。

三次

- 自分の物語をすじ道立てて、五年生に分かりやすく伝えよう。

- (1) 学年間で、五年生向けの発表の練習をしよう。
- (2) 五年生に『ごんぎつね、その後』の物語を伝え、感想や意見を交流しよう。
- (3) 五年生との交流から新しく学んだことをクラスで発表し合おう。

物語を読み取るための七つのポイント

- (1) 登場人物・・・どんな人物が出てくるのか。
- (2) 中心人物・・・気持ちが一番大きく変化した人物を考えよう。
- (3) 時・・・いつのことか。
- (4) 場所・・・物語の場所はどこか。
- (5) 五つの事件・・・どんなことが起こったか。
- (6) クライマックス・・・物語の中で大きく変わった事件はどこか。
- (7) まとめ一文・・・「ごんぎつね」の物語を一文で表そう。

4年生実践資料3：ワークシート、回答記入例付

ごんぎつね

答えの例 名前【

物語を読み取るための七つのポイント

(1) 登場人物 物語に出てきた人物

ごん、兵十、(弥助の家内、新兵衛の家内、弥助のおかみさん、いわし屋)、加助

(2) 中心人物 気持ちが一番大きく変化した人物

ごん

(3) 時

昔(小さなおしろがあって、おとのさまがおられたころ)

(4) 場所

わたしたちの村の近くの中山というところ。中山から少しはなれた山の中にごんは住んでいた。

(5) 五つの事件 兵十との関わりの中で、ごんの心情を事件から読み取って、一文に表そう。「ごん」

- ① いたづらをしたごん。
- ② 兵十のおつかあが死んだことを知って、あなの中で後悔するごん。
- ③ いわしでは失敗したが、次の日もその次の日も、くりや松だけを持ってつくなおうとするけなげなごん。
- ④ 自分のつぐないが、兵十にわかってもらえず、兵十と加助の会話を聞いて、引き合わないなあとちよこすねた(がっかりした)ごん。
- ⑤ それでも、その明るる日もくりを持って行ったのに、兵十に火なわしゅうでうたれたごん。

(6) クライマックス 物語の中で大きく変わった事件は？

ごんは、それぞれの子の考えでよいのではないか。

(7) まとめ一文 「ごんぎつね」の物語を一文で表そう。

……も。

4年生実践資料4：ワークシート例2

ごんぎつね	ワークシート	名前【	】
○兵十との関わりの中で、ごんの心情を事件から読み取って、一文に表そう。			
1- (5) -	<input type="checkbox"/>		
☆自分が考えた一文			
<input type="text"/>			
☆グループで考えた、落としてはいけない言葉			
<input type="text"/>			
☆クラスで考えた、落としてはいけない言葉			
<input type="text"/>			
☆この時間に考えた一文			
<input type="text"/>			

ごんぎつね	ワークシート	名前【	】
1- (6)・(7) まどめの一文 クライマックスを意識して、「ごんぎつね」の物語を一文で表そう。			
☆クラスで考えたクライマックスの事件			
<input type="text"/>			
☆自分で考えたまどめの一文			
<input type="text"/>			
☆グループで考えた、落としてはいけない言葉			
<input type="text"/>			
☆クラスで考えた、落としてはいけない言葉			
<input type="text"/>			
☆この時間に考えた一文			
<input type="text"/>			

しんぎつねワークシート 二(1)② 名前【 】

課題 最後の文に続く物語として、5年生に「なるほど」と言ってもらえるものを、話し合ってから選ぶ。

なるほどポイント

- ・うん、そらだと賛成する
- ・ありそうな話だ
- ・つながっている

まとめの一文のように

グループ 15分

続きの物語のパターンをグループで2つ書く

手順 各自が発表→同じパターンはひとつにまとめる→

個人の考えをまとめ、2つのパターンを短冊に書く

↓黒板に貼る

分担 司会・短冊係2名・黒板係

1の1

「死んだこん」と「生きているこん」に、黒板に分けて貼ることを予告

18の短冊

グループ 10分

なるほどポイントを参考にして考えよう

話し合っ、◎と△の文を、1つずつ選ぶ。

ホワイトボードで発表する

◎1の2 理由
△3の2 理由

5年生との交流で、ABCに、各4つずつの物語を語る。だから、12個の文にしぼる。

全体 10分

黒板の短冊を見て、

5年生に「なるほど」と言ってもらえる物語 であるかどうか話し合い、

最終、クラスで12の文を決める。

個人 5分

振り返りを書く ①自分の意見を言えたか ②友達のことを聞いて

4年生実践資料6：続く物語のためのワークシート

ごんぎつね ワークシート 二―(1)―① 名前【 】

課題 最後の文に続く物語として、5年生に「なるほど」と言ってもらえるものを、2つ書こう。

個人 「ごんぎつね」の最後に続く物語のパターン（まとめの一文）を2つ

それから一年がたちました。

1

2

ごんぎつね ワークシート 二―(1)―② 名前【 】

課題 最後の文に続く物語として、5年生に「なるほど」と言ってもらえるものを、話し合ってから選ぶ。

グループ 十五分

続きの物語のパターンを2つ書く。

黒板に、各班2枚ずつ 合計18枚の短冊

グループ 十分

◎と△を1つずつ、選ぶ。

ホワイトボードに、理由も書く。

発表する。

全体 十分

話し合い、12個のパターンを決める。

個人 五分

振り返りを書く。

グループで考えを出し合い、続きの物語のパターンを4つ考えよう

1

2

3

4

5 5年生の実践

第5学年 国語科学習指導案

指導者 松本泰介 稲田清美 川口尚子 垣下智

(1) 単元名 わらぐつの中の神様

(2) 目標

5年生でつきたい力

- | |
|--|
| ① 文章全体の構成を理解し、本文の叙述をもと、自分の考えを明確にすることができる。
(評価力・判断力) |
| ② 筆者の意図に応じて、根拠を明らかにしながら、自分の考えをもつことができる。
(思考力・発想力) |
| ③ 話したいことを明確にし、話の組み立てを工夫しながら、相手にわかりやすく伝えることができる。
(表現力・論理力) |

- ・文章中から正確に情報を取り出し、文章全体の構成や内容をつかんで読む。・・・①
- ・文章を根拠にして登場人物の行動の理由などを推論し、理由を明確にして自分の考えを書く。・・・②
- ・自分の考えや生き方と結びつけ、文章や登場人物を評価・批判し、表現し合う。・・・③

(3) 指導について

本教材は、不格好だが履く人の身になって丹精込めて編んだわらぐつを介して、心を通い合わせたおみつさんと大工さんの真摯な生き方が、見かけのかわつよさを重視するマサエの価値観を大きく揺さぶる作品である。登場人物の心の通い合いやものの真の価値を通して、児童一人ひとりが、自分自身のものの見方や考え方、生き方を深く考えることのできる教材である。

5年生児童は、自分の考えを仲間に発信していくことや、それを受け取りまた返していくことにまだまだ弱い面がある。そこで各教科において、グループや一斉学習など伝え合う場面を多く設定してきている。また国語科においては、文章中に書かれていることを読み取り、要旨をとらえること、登場人物の人柄について考え、行動の理由を自分なりに推論することなどを経験してきている。自分なりの意見を持ち、発表し合うことは少しずつできるようになってきたものの、憶測や主観、好き嫌いなど、不確かな根拠で意見を述べる児童も少なくない。また、内容を理解した上で、文章や自分の経験を根拠にして自分なりの意見を表現するという力は弱い。

そこでこの単元では、叙述に即して登場人物の生き方をしっかりと読みとらせ、読解に必要な情報を取り出し、文章や自分の考えを根拠に人物の思いや行動を考え、自分の意見として表現し、互いに伝え合う力を高めたい。そこで4次に分けて単元を進めていく。1次では児童が単元全体の見通しをもち、「情報の取り出し」をする。その際には初発の読みを大切に、おみつさんと大工さんに視点をあてさせる。2次では、おみつさんや大工さんの人柄について考え、書かれていることを根拠に自分なりの意見を持ち、「推論・解釈」をする。その際には、自分がそう考えた理由を明確にさせたい。3次では、自分の考え方や体験と結びつけ、文章や登場人物を「熟考・評価」をする。その際には、自分の立場で考えることを通して、自分の意見をもてるようにさせたい。4次では学習のまとめとして、自分の生き方と結びつけて書くこと、表現し合うことを最終ゴールとする。この単元設定の中で、論理的に考え、根拠をもとに自分の意見を伝え合う力を育てていきたい。そのことは「生きる力」を育てることにつながるからである。

(4) 単元の指導計画と評価計画 (全 12 時間)

次	目標	時数	学習活動	評価
1次 3時間	・学習のめあてと流れをつかむ。	1	・単元表にそって単元全体の見通しをもち、自分にとって大切なものを考える。	・学習の見通しをもつことができる。 (関心・意欲・態度)
	・文章から正確に情報を取り出し、	1	・全文を読み、単元表に初発の思いを書き、交流する。	
	文章全体の構成や内容をつかむ。	1	・おみつさんや大工さんはどんな人物かわかる本文を抜き出す。	
2次 3時間	・文章を根拠にして登場人物の行動の理由などを推論する。	1	・「みったぐない」「わらぐつはええど〜」マサエとおばあちゃんの意見は食い違っているが、どちらを応援するか、本文から理由を明らかにして思いを伝え合う。	・理由を明確にして、主人公の心情読み取り、自分なりの考えをもち、伝え合うことができる。 (思考力・発想力・表現力・論理力)
	・理由を明確にし、自分の考えを相手に伝える。	1	・なぜ大工さんはおみつさんにおよめに来てほしいと思ったのか、本文から理由を明らかにして思いを伝え合う。	
	・相手の考えを聞いて、自分の考えを見直す。	1	・おみつさんは大工さんのどの言葉に心を動かされたのか、本文から理由を明らかにして思いを伝え合い、自分のプロポーズの言葉を作る。	
3次 2時間	・文章を根拠にして、自分の考えや体験と結びつけ、文章や登場人物を評価・批判する。	1	・おばあちゃんの話聞いた後、マサエならわらぐつを履いて行くか行かないか、本文をもとにして、自分の考えを伝え深め合う。 【1・3組】	・自分の考えや体験と結びつけ、理由を明確にして自分の考えを相手に伝え、相手の考えを受け入れ、自分の考えを深められる。(思考力・発想力・表現力・論理力)
		1	・あなたがおみつさんだったら、大工さんと結婚するかしらないか、本文をもとにして、自分の考えを伝え深め合う。 【2・4組】	
4次 4時間	・単元を通して、自分の生き方と結びつけ、考える。	2	・おみつさんや大工さんの生き方を通して、自分の大切なものを考え、経験をもとに理由を明らかにして書く。	・単元を通して、自分の生き方について考え、文章に書くことができる。 (表現力・論理力)
	・学習全体の振り返りをする。	1	・書いたことをもとにして、自分の大切なものについて聴き合う。	
		1	・単元表を見直して、学習全体の振り返りをする。	

(5-1) 本時の指導 【1・3組】

1) 目標

- ・自分の考えや立場を明確にし、本文や自分の考えをもとに理由を挙げて思いを伝えることができる。
- ・相手の意図を考えながら聞き、自分の考えと比較することで、思いを仲間に伝え、深め合える。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
3分 一斉	1. 本時のめあてを知る。	・学習の手順を確かめる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> おばあちゃんの話聞いた後、あなたがマサエならわらぐつをはいて行きますか。はい で行きませんか。本文をもとにして、自分の考えを伝え深め合おう。 </div>			
2分 個人	2. 本時の課題について 個人の考えを再確認する。	・あらかじめ自分の考えや理由を書いたプリントを黒板に貼っておき、自分やクラス全員の誰がどの立場かはっきりわかるようにする。 (はく・はかない) ・立場によって色を変える。	・自分の立場を明確にし、友だちの立場を分かることができたか。
10分 グループ	3. 個人の考えをもとに、 グループで意見をまとめる。	・同じ立場の子ども同士で少人数のグループを作り、意見交流させる。 ・意見は、他の立場の子どもが納得するような理由を、文章中から考えるようにさせる。	・グループ内で自分の思いを伝えることができたか。 ・グループで、理由をまとめることができたか。
25分 一斉	4. グループの考えや個人の考えを発表する。	・友だちや他のグループの意見を聞き、自分の考えと比較することで、思いを伝えるようにさせる。その際にも、自分の思いの根拠は本文の中に求めるようにさせる。 ・友だちの考えに、質問することや意見を出し、考えを深めさせる。 ・意見交流する中で、自分の立場が変わればそのつど伝え、なぜ変わったのか理由を言うようにさせる。	・他のグループの意見や友だちの意見を聞き、自分の思いを伝え、深めることができたか。
5分 一斉	5. 振り返り	・振り返りの中で、最終的な自分の考えや、思ったことを伝え、次時の学習に生かすようにさせる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 「おばあちゃんの話聞いた後、あなたがマサエならわらぐつをはいて行きますか。はいで行きませんか。」ということについて、本文をもとにして、自分の考えを伝え深め合うことがで </div>			

3) 授業の視点

- ・本文もとにして、自分の考えを伝え深め合うことができたか。

(5-2) 本時の指導 【2・4組】

1) 目標

- ・自分の考えや立場を明確にし、本文や自分の考えをもとに理由を挙げて思いを伝えることができる。
- ・相手の意図を考えながら聞き、自分の考えと比較し、思いを仲間に伝え、深め合える。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
3分 一斉	1. 本時のめあてを	・学習の手順を確かめる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>あなたがおみつさんだったら、大工さんと結婚しますか。結婚しませんか。 本文をもとにして、自分の考えを伝え深め合おう。</p> </div>			
2分 個人	2. 本時の課題について個人の考えを再確認する。	・あらかじめ自分の考えや理由を書いたプリントを黒板に貼っておき、自分やクラス全員の誰がどの立場かはっきりわかるようにする。 (する・しない・どちらともいえない)	・自分の立場を明確にし、友だちの立場を分かったか。
10分 グループ	3. 個人の考えをもとに、グループで意見をまとめる。	・同じ立場の子ども同士で、少人数のグループを作り、意見交流させる。 ・意見は、他の立場の子どもが納得するような理由を、文章中から考えるようにさせる。	・グループ内で自分の思いを伝えることができたか。
25分 一斉	4. グループの考えや、個人の考えを発表する。	・友だちや他のグループの意見を聞き、自分の考えと比較することで、思いを伝えるようにさせる。その際にも、自分の思いの根拠は本文の中に求めるようにさせる。 ・友だちの考えに、質問することや意見を出すことで、考えを深めさせる。 ・意見交流する中で、自分の立場が変わればそのつど伝え、なぜ変わったのか理由を言うようにさせる。	・グループで、理由をまとめることができたか。 ・他のグループの意見や友だちの意見を聞き、自分の思いを伝え深めることができたか。
5分 一斉	5. 振り返り	・振り返りの中で、最終的な自分の考えや、思ったことを伝えることで、次時の学習に生かすようにさせる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「あなたがおみつさんだったら、大工さんと結婚しますか。結婚しませんか。」ということについて、本文をもとにして、自分の考えを伝え深め合うことができたか。</p> </div>			

3) 授業の視点

- ・本文をもとにして、自分の考えを伝え深め合うことができたか。

(6) 本単元の振り返り

学年が決まった4月当初、国語科の3学期重点教材に「わらぐつの中の神様」をするのか、または、「大造じいさんとガン」をするのかについて学年で議論があった。その議論の中心は、人間関係が希薄でなかなか自尊感情がもてない子どもたちが多いという児童の実態の話であった。そのことを大切にして、5年生の担任として、目の前の子どもたちに学年の最終ゴールを設定した。それは、「わらぐつの中の神様」の単元の学習を通して、おみつさんや大工さんの生き方について深く考え、子どもたちにも人と人との心の通い合いを感じて、成長してほしいと願うものであった。

そこで、本単元では大きく4つに分けて学習を進めてきた。まず、1次では児童が単元全体の見通しをもち、「情報の取り出し」をした。ここでは初発の読みを大切にして、物語の構成に目を向けさせ、おみつさんと大工さんに視点をあてさせた。3時間という限られた時間設定の中で、ゴールをはっきりと授業者がもち、子どもたちに明示できたことはたいへんよかったと思う。また、課題（単元構想）は子どもたちの思考の深まりに合っていたと考えられる。そのため、子どもたちは単元の見通しをしっかりととつことができていた。しかし、物語の構成や二人の人物像について情報の取り出しがうまくできない児童の姿もあった。また、本文の主題をつかませるための工夫があればより効果的だったと考える。

また2次では、おみつさんや大工さんの人柄について考え、書かれていることを根拠に自分なりの意見をもち、「推論・解釈」をした。その際には、自分がそう考えた理由を明確にさせ、本文に理由を求めさせた。ここでは、自分がマサエやおばあちゃんの気持ちを想像したり、おみつさんや大工さんの行動の理由を考えたりした。1次では情報の取り出しがうまくできていなかったが、この学習でさらに読み取りが深まった児童の姿も多くあった。また、子どもたちの中に、考えの理由をしっかりと伝える場面が増えた。課題としては、本文の中に理由を求めることを、さらに意識付けできればよかったと思う。

続いて3次では、自分の考え方や体験と結びつけ、文章や登場人物を「熟考・評価」した。ここでは、伝え合うということに終わるのではなく、互いに深め合うことを目標にして学習を進められたことが、よかった。また、深め合うとは、自分の考えが変わったり、理由がよりはっきりしたりすることなど、具体的に子どもたちがイメージできたことも成果としてあげられる。しかしその一方で、子どもたちの考えをより深め合わせる為の手立てを工夫していく必要がある。例えば、教師の発問や、子ども同士が反応し合えるような手立てもさらに工夫していきたい。また、教師の切り返しのタイミングや、副課題の示し方を工夫することで、さらに子どもたちの思考は深くなると考える。

最後に4次では、学習のまとめとして、自分の生き方と結びつけて書くこと、表現し合うことを最終ゴールとした。単元の最初に、自分の大切なものを3つ書いた際には、友だち・家族など一般的なものばかりを挙げていた児童がほとんどだった。しかし単元の最後には、自分の生き方に関わることをより深く考え、大切にしたいと書いた子どもが多かった。また、そのことを互いに交流することもできた。

これらの単元設定の中で、論理的に考え、根拠をもとに自分の意見を伝え合う力を子どもたちに育てていきたいと考え、実践を進めてきた。まだまだ、研究の入り口で、授業をおこなっていく難しさも痛感した。さらに、課題も多く残ったと考える。しかし、教師自身が目の前の子どもたちの実態を話して、互いに授業を見合っ、子ども同士の反応の仕方等を学べたことは、たいへん大きかったと思う。職員室にもどり、学年団で日々の授業をどのようにおこなっていくのかについて何度も話し合いをしてきた。そのつど迷いながら、実践を進めてきた。今は、その光景が当たり前になっている気がする。これからも目の前の子どもの実態を見据えて、学年でねらいをはっきりと打ち出し実践を進めていきたい。

(7-1) 1組の本時の振り返り

最初に、担任の私が強くイメージしたことがありました。それは、「わらぐつの中の神様」の単元を通して、子どもたちと登ってみたい山の頂上でした。具体的には、国語科の力として「伝えること」「聞くこと」を大切に単元を進めたい。そうして、「友だちの意見につなぐこと」を意識させるために、全体学習の場面をより多く設定していきたいというものでした。このイメージを強く描いた理由は、日頃の子どもたちの実態にありました。1学期から感想や作文、ふりかえりなどの「書く」という活動を見てみると、一人ひとり、その子なりにたくさんのことを感じていることがよく分かりました。しかし、そのことを言葉として表現したり、友だちの意見を受け取ったりすることが苦手な子が多くいました。そのため、特に全体学習では、友だちの意見につないでいくことは難しいという実態がありました。そこで、全体で話し合うという場面をたくさん取り入れていくことが必要だと感じました。

まず、単元の流れを子どもたちに提示した際には、そのような話も簡単に伝えました。同時に、「伝えること」では「大きな声で伝える」「理由をはっきりして伝える」「分かりやすく伝える」ことを、また、「聞くこと」では「目線をあわせて聞く」「反応して聞く(うなづく・質問する)」ことを大切にしたいことも伝えました。子どもたちの中には、「自分にできるだろうか。」という不安の表情をしている子もいました。しかし、学習の最初に単元の見通しやねらいを伝えたことで、私自身もゆとりをもって子どもたちに接することができたと感じました。

次に、実際に指導計画(全12時間)を進めるにあたって、「交流する」「思いを伝え合う」「考えを伝え、深め合う」「聴き合う」「単元全体のふりかえりをする」という場面の8時間を、主に全体学習として位置づけ学習を進めました。この学習では、45分間の内30分以上を全体学習の時間にあてました。その際には、子どもたち自身で話し合いを進めさせたいと考えて、なるべく子どもの思考には介入しないように心がけました。しかし最初の頃は、つつい口を挟んでしまいたくなる自分自身がありました。こちらの言ってしまった一言で、話し合いがかえって停滞したこともありました。そこで、話が止まってしまったり、もう少し話をふくらませたいときには、私が発問したり、ペア学習を取り入れたりしました。そのことで、話し合いがより活発になるという場面もありましたが、私が発問の内容や副課題をしっかりと意識できていなくて、話が本題からそれてしまう場面もありました。そのことを通して、改めて発問や副課題の重要性を強く感じました。最後に、単元全体のふりかえりをした際には、「少し伝える勇気もてた」「友だちが聞いてくれるから、話したくなった」「理由を言うと意見が分かりやすい」「みんなで伝え合うことは楽しい」「もっと反応を返したい」「聞くことをできるようにになりたい」「友だちの意見につなぐことは難しい」などたくさんの意見が出ました。前よりも、自分の意見に自信をもって伝えている子どもが多くなりました。また、友だちの意見につなごうとする姿をより多く見ることができました。

この学習を終えて、自分なりにふりかえりをしてみたいと思います。全体学習の中で「話すこと」「聞くこと」を大切に、子どもたちの互いに伝え合おうとする関係が、少しずつ生まれてきたことは成果であると感じています。しかし、同時に課題も見えてきました。それは、この教材を通して子どもたちに何を考えさせるのかということです。私自身がさらに教材の主題を深くつかむ必要があります。その上で、子どもたちにも主題を深く考えさせていきたいです。そうするための、単元構想や手立て、また課題をさらに工夫していく必要があります。今回、この単元で学んだことをいかして、全体学習の中で「友だちの意見につないで、さらに考えを深めていける話し合い」をめざして取り組みを進めていきたいと強く感じています。

(7-2) 2組の本時の振り返り

3学期に入り、まず1月の大きな山を「研究発表会」に定めた。

「わらぐつの中の神様」の全文を読み、単元全体の学習の流れをつかむ学習から入った。単元表に書かれた1時間毎の課題を読むことで、子どもたちは学習の流れをつかんでいった。『本文から理由を見つける』ってという言葉が多いなあ』『伝え合おう』も多いよ』と、子どもたちの口から飛び出した。そこで、『わらぐつの中の神様』の学習では、教科書の文章を読んで、自分の考えをもつこと。その考えは、文章のどこからそう考えたのか理由を明らかにすること。そして、自分の考えをみんなに伝える活動を大事にしていきたいと思います』と、伝え、子どもたちに意識をもたせて「わらぐつの中の神様」の学習に入っていた。

5年生4クラスが同じ単元計画で授業に入ったので、毎日、放課後の職員室では授業の様子を交流していた。児童の反応、教師の支援の言葉、授業を進めていくうえでの課題、悩みを出すことが多かった。たまに違う話をしていると、「今日は、おみつさんの話しないの?」と、隣の学年の先生から声をかけられるくらいだった。

授業を進める上で課題になってきたのは、2つあった。1つ目は、「全体の話し合いの前の小グループの編成をどうするか。」である。意見の内容が「同質のメンバー」で小グループを作ると、自分の意見に自信のない子や考えがはっきりしていなかった子が、同じ内容の意見を聞き、自分の考えに自信をもって全体での話し合いでは意見を言うことができる。さらに、全体の話し合いで出されそうな質問や意見の対応策を話し合うことで、より深く考えることができる。意見が「異質のメンバー」で小グループを作ると、全体での話し合いの前段階として、考えの違う意見を聞いて、自分の考えと比べより深く考えることができる。次に問題となったのは、「意見がどちらかに偏った時、グループで話し合う価値があるのかどうか」である。結論的に同じであっても、根拠とする文章は違う場合がある。根拠となる文章からの考えを出し合うことで、さらに、自分の考えを深めたり広めたりできるのではないかと話し合った。

1月28日、5年生の各クラスで先行授業をし、授業を見せ合った。各クラスの子どもたちや先生方の姿に学ばせてもらうことがたくさんあった。まず、話し合いをする子どもたちの様子であるが、一人ひとりが意欲的で、はっきり発言し話し合いに参加していた。ペアの話し合いもスムーズで効果的だった。さらに、聞く態度も能動的で、聞こうとしている一人ひとりの気持ちが伝わってくるようだった。教師の課題の提示では、細かな支援によって課題を具体的につかませようとしていた。自分のクラスに足りないことが見えた。後の学年全体の話し合いでは、ゴールの提示をはっきりさせること。また、話し合いが停滞してきたときに、副課題を準備しておくことで授業が活性化し、話し合いを深めさせることができることを話し合った。

本時の授業に入るとき、迷っていることがあった。小グループの話し合いの編成をどうするか、「同質グループ」にするか「異質グループ」にするかである。これまでは、生活班を使うことが多く、異質グループでの話し合いになっていた。慣れていない事をするより、いつもの生活班の気心の知れた仲間と交流することの方が意欲的に活動できると考えた。案の定、予定の時間を待たないで、「全部話せたよ」という声がいくつかの班から聞こえた。全体の話し合いの机の移動も自主的に動いていた。子どもたちの意気込みが伝わってきた。

全体の話し合いでは、まず、全員が自分の意見を出してから話し合うことにした。いつもそうしていたわけではないが、すぐに質問や意見を出して話し合いを進めていくと、内容は深まっていくが、発言できずに聞くだけになってしまう子がいた。振り返りでは話し合いの内容を入れて思いが書ける子も、みんな

の話し合いには参加しにくい子がいた。まずは、自分の考えを表明できることがスタートだと思った。全員の発言にこだわったため、時間がかかり、後の深め合いの時間が気にかかったが、前時の事前学習のワークシートには何もかけなかった子が、理由になる文章もいれて意見を言うことができたのは、授業の中でうれしいできごとになった。

本時の課題「あなたがおみつさんだったら、大工さんと結婚しますか、しませんか。」に対して、「結婚しません」が2人、「結婚します」が14人、「迷っています」が8人であった。全体の話し合いでの争点は、「不格好なわらぐつでは、大工さんが笑われる」「わらぐつを作ってもらいたいから結婚してほしいみたいだ」ということに絞られた。意見を出し合っていく中で、大工さんとおみつさんの人柄や、大事にしていることについて自分の言葉で意見を出していった。「なるほど」と、みんなで納得する場面もあった。最後に、副課題として考えていた「大工さんがすてきなところはどこだろう」と投げかけた。大工さんのおみつさんを大事に思う気持ちや同じ考え方をもっていることなどを出し合うことができた。

ゴールは、「友だちの考えを聞いて、自分の考えに付け加えができたか」であった。振り返りから、話し合いで新しくわかったことやさらに疑問をもったことなどが書かれていた。授業の中で、一人ひとりが考えを深めていたことがうかがえた。

授業を終えて、子どもたちの中に、一人ひとりが思いを出し合って話し合っていこうというという態度が育ってきたと感じる。しかし、個人差があって、意見を持ち、伝えていくことができない子や、内容は理解できるが話し合いには参加しにくい子がいる。あらゆる学習・生活の場で、自分から考える、行動するという能動的に活動できる場を設定し、力をつけていきたいと思う。また、子どもたちが能動的な活動していくためには、教師の細かな仕掛けが必要である。話し合いには、深めていくための仕掛けとして副課題も必要である。さらに、見通しを持ち、課題をはっきりさせていくことで、子どもたちは主体的に活動をしていくことができる。このことを意識して、日々の実践を積み重ねていきたいと思った。

子どもたちが、グループで話し合うことで高め合っていく姿を見てきた。教師同士も実践をもとに語り合い、議論し合うことでたくさんのことを学ばせてもらった。この経験を積み重ねていくことで、教師としても高まっていきたいと思う。

(7-3) 3組の本時の振り返り

この単元全体の流れを考えると、最終的に子どもたちが何ができればいいのかということは何度となく学年団で話し合った。その話し合いの中では、登場人物の心情を読み取るだけでなく、自分にとって大切にしたいもの、こと生き方を考え合い伝え合うことができることを目標におこうと決めた。そのためには、解釈の場面で、目標に迫るための中心となる発問が必要だった。そして、⑥時間目の「おみつさんは大工さんのどの言葉に心を動かされたのでしょうか。本文から理由を明らかにして思いを伝え合い、自分のプロポーズの言葉を作ろう」や⑦時間目「おばあちゃんの話聞いたあと、あなたがマサエなら、わらぐつをはいていきますか。はいていきませんか。本文をもとにして、自分の考えを深め合おう」、⑧時間目「あなたがおみつさんだったら、大工さんと結婚しますか。結婚しませんか。本文をもとにして、自分の考えを伝え、深め合おう」という発問を考えた。

単元の流れを書いた単元表を子どもたちに最初渡したとき、「⑥と⑧の質問は、やめて」という反応が返ってきた。「自分たちには、まだ早いから、考えられない」「恥ずかしい」と言う子がほとんどだった。予想していたとは言っても、ここまで嫌がるとどうしようと思ったが、これからみんなも年頃になるので、

将来のことを考えるのもいい経験だよと話し、学習を始めた。

④時間目の「マサエとおばあちゃんのわらぐつに対する思いが食い違っているが、あなたはどちらを応援しますか。本文から理由を明らかにして思いを伝え合おう」では、マサエを応援したいという子が多く、おばあちゃんを応援したいという子は、6人だった。同じ意見の子でグループを作り意見を出し合った。常に本文に理由を求めて話し合いをするということを繰り返してきているので、何を言ったらいいのかわからないという子は、ほとんどいなくなってきた。話し合いをして、「大きすぎて金具にはまらんわ」というマサエの言葉から、金具にわらぐつがはまらないのならスキーができないということで、それなら、わらぐつを履いていっても仕方がないという意見に収束していった。しかし、おばあちゃんを応援する立場の子は、「そういったもんでもないさ。わらぐつは、いいもんだ。あったかいし、軽いし、すべらんし、そうそう、それにわらぐつの中には神様がいなさるでね」という文から、おばあちゃんのマサエに対する思いを読み取り、わらぐつのよさを感じ取っていた。この授業のあたりから、「今日の国語の時間は、今までですごく楽しかったです。自分もいつも以上にがんばって発言できました。みんな説得力のある意見でした」というような振り返りを書く子が増えてきた。

そしていよいよ⑥時間目の自分のプロポーズの言葉を書くという学習活動になった。どのクラスでも子どもたちの中に書きにくいという気持ちがあることがわかっていたので、学年団でどうしようかと話し合った。「自分のプロポーズの言葉を書く」というところに抵抗感があるのだから、「自分が大工さんだったら、おみつさんにどのようにプロポーズしますか」という課題にして、自分を大工さんの立場に置いて考えるようにすれば抵抗感をクリアできるのではないかということになった。そして、授業では、子どもたちに、この大工さんよりもっとおみつさんの心を動かすことができるようなプロポーズの言葉を考えましようと話した。言葉にすると少しの違いだが、自分を大工さんの立場に置いて考えるということなので、抵抗感は薄れたようだった。本文をもとにして個人で考え、その後班で考え合って交流をした。すると、「ずっと一緒にいよう。幸せにする。一緒にわらぐつを作ろう。自分のためだけにわらぐつを作ってください。」というような言葉を考えることができた。

このようにして、⑧時間目でも自分がおみつさんの立場だったら大工さんと結婚するかどうかを考えたので、登場人物に自分を置き換えて考えることができるようになっていった。⑦時間目と⑧時間目では、同じ考えの子ども同士でグループを作って、違う立場の子に説得力のある理由をつけて自分の考えを話す学習活動を行なった。そうすることで、お互いでの質問が活発になり、相手が納得してくれるような理由を本文や自分の経験から話そうという意欲付けになったと思った。しかし、30日の校内研修会で意見があったように、違う考えの子とグループを作り、その中で話し合い、いろいろな方向から考えることで自分の考えを深めた後で交流するということもできたと思う。どちらがより効果的で、子どもたちの意欲を高よりめるのかを検証してみたい。

⑨、⑩、⑪時間目は、「おみつさんや大工さんの生き方を通して、自分の大切なものを考え、経験をもとに理由を明らかにして書こう。そして、聴き合おう」という課題で、①時間目に書いた3つの大切なものに付け足して、大切にしたい物、目には見えないけれど、大切にしたい考え方などを書こうと話した。1時間目には、家族、友だち、命など、どの子も同じようなことを書いていたが、このときは、その子らしさが表れるさまざまなことを書いていた。たとえば、「両親が新婚旅行のときにオーストラリアの海で拾ってきた貝殻で作ったネックレスが大切に、自分の子どもにそれを渡したい」、「自分が習っている習い事や趣味は自分の夢を広げることになるので、大切にしたい」「ありがとうの言葉を大切にしたい」「いろいろ

な人からほめられたことや注意されたことは、自分のためになるので大切にしたい」などだった。この学習の振り返りの中に、「身近にある物や目に見えないものも大切というのがわかりました。いろんな人が言ってくれた意見をよく聞いて、自分の意見を出すのは、すごく自分のこと、自分のためになるんだと思いました。質問、疑問をくり返していたら、頭の中が納得でいっぱいになりました。単元表⑥、⑧で、はずかしくてなかなか書けなかったけれど、勇気を出して自分らしく自分なりに書けば、はっきり言うことができました。すっきりしてよかったです」というものがあつた。他にも、「ぼくは、わらぐつの中の神様を勉強して、学んだことや成長したことがたくさんあります。意見を一日に3回ぐらい言ったりして、2学期とはまったくちがいます。たくさん発言して意見とか質問とかっていいなあと思いました。わらぐつの中の神様を勉強して、一番学んだことは、『心をこめる』ということです」という感想があつた。

2学期の終わりに「大造じいさんとガン」の学習をしたときには、中心発問は考えて学習の流れも自分の中では作り進めてきたが、子どもたちの中にやってよかった、この学習をしてためになったという思いはなかった。それは、見通しをもっているのが教師だけであつたこととこの学習でどんな力をつけたいのかというはっきりしたものをもっていなかったということ、そして何よりも学年団での話し合いが時間がないということとほとんど取れなかったことに原因があつたのではと思う。子どもたちも仲間との学び合いで力をつけていくが教師もまた同じだと強く感じている。

「わらぐつの中の神様」のおかげでここまで時間をかけて学年団で考え合うことができたので、子どもたちも学習に満足感をもってくれたことに感謝したい気持ちでいっぱいである。

(7-4) 4組の本時の振り返り

本単元を進めていくにあたって、まず初めに学習の見通しを子ども達にもたせたことは、大変有効であつた。単元計画を書いた模造紙を教室に掲示することとともに、最初の段階でこれから進めていく課題に対する初発の思いを書くことで、その後の各授業に対する子ども達の意欲は高まったことを感じた。

授業を進めてきて感じたことは課題の大切さである。今回の課題は、「マサエとおばあちゃんのどちらを応援しますか」や「あなたがマサエならわら靴を履いていきますか。いきませんか」、「あなたがおみつさんだったら大工さんと結婚しますか。しませんか」のように、誰の意見にするのかという立場を明確にすることによって、子ども達は自分の思いをしっかり考えることができた。また、課題の文章表現については、指導案を考えた初期の段階では、「思いを伝え合おう」という文末表現であつたが、杉江先生や校長先生からアドバイスをいただき、「思いを伝え、深め合おう」という表現に変えたことで、子ども達の思考も今までの学習で取り組んできたときよりも深まったことを感じた。また「深める」ことを具体的(自分の考えにつけたしをすることができる。自分の考えが変わったことを書くことができる)に子ども達に示したことはよかったと感じている。「深める」という表現だけで理解できる子どももいるが、何をめざして授業を進めていくのかということすべての子どもに理解させるためには、具体例を提示したことは有効であつた。このように、「深める」というほんの少しの文末表現だけのことであるが、その少しの部分教師が意識することで、子ども達のめざすゴールがさらに高まり、子ども達自身の学力も上がることを感じた。

子ども達が課題を考えていくにあたっては「本文をもとにする」ということに着目して学習を進めてきたので、わざわざ教科書を読むという時間を特別にとらなくても自然な形で本文を何度も読むことになり、理解が深まることになったと感じた。

研究発表会当日の授業に関しては、子ども達はとても集中して授業に参加することができていたことを

感じた。それは、上述のように「課題に対する自分の立場を明確にしたこと」や「本文をもとにすること」、「深めるというゴールを明確に示したこと」も考えられるが、机の配置を工夫したことも理由の一つにあげられると考えた。机の配置は前時まではコの字型で行っていたが、本時では円型にしたことによって、子ども達がお互いの顔を見ながら発言することができたし、発言を聞く側の子どもにとっては話を聞こうとする意欲が今まで以上に高まったことを感じた。

授業をふり返って課題だと思うことは、「教師の出るタイミング」である。子ども達は、自分の思いを伝えることや、お互いに質問をすること、その質問を返すことなど、教師が出なくても子ども達だけで 30 分の全体交流をすることができた。しかし、話し合いが煮詰まってきている場面や、子ども達が一問一答のようなやりとりになってしまっている場面もあった。その一つの質問に対してクラスのみんが考えることができるようなところで、教師がどのようなタイミングでどのような発問をしていくのかということが今後の課題であると考えた。このように、子どもたち自身の力は充分ついてきていることを感じているので、あとは教師サイドの研修を深めていく必要があると感じた。

わらぐつの中の神様 単元表

名前

時間	課題	初発の思い
①	・この単元表にそって単元全体の見通しを持ち、自分にとって大切なものを考えよう。	
②	・全文を読み、この単元表に初発の思いを書き、交流しよう。	
③	・ <u>おみつさんや大工さんはどんな人物ですか。それがわかる本文を抜き出そう。</u>	おみつさん
		大工さん
④	・ <u>「みったぐない。」「わらぐつはええど〜。」マサエとおばあちゃんの意見は食い違っていますが、あなたはどちらを応援しますか。本文から理由を明らかにして思いを伝え合おう。</u>	マサエ おばあちゃん
⑤	・ <u>なぜ大工さんはおみつさんにおよめに来てほしいと思ったのですか。本文から理由を明らかにして思いを伝え合おう。</u>	
⑥	・ <u>おみつさんは大工さんのどの言葉に心を動かされたのでしょうか。本文から理由を明らかにして思いを伝え合い、自分のプロポーズの言葉を作ろう。</u>	プロポーズの言葉
⑦	・ <u>おばあちゃんの話聞いた後、あなたがマサエならわらぐつはいて行きますか。はいて行きませんか。本文をもとにして、自分の考えを伝え深め合おう。</u>	はいていく はいていかない
⑧	・ <u>あなたがおみつさんだったら、大工さんと結婚しますか。結婚しませんか。本文をもとにして、自分の考えを伝え深め合おう。</u>	する しない
⑨⑩	・おみつさんや大工さんの生き方を通して、自分の大切なものを考え、経験をもとに理由を明らかにして書こう。	
⑪	・書いたことをもとにして、自分の大切なものについて聞き合おう。	
⑫	・単元表を見直して、学習全体の振り返りをしよう。	

わらぐつの中の神様 単元表 ふりかえり

名前

時間	ゴール	◎・○・△	感想
①	○単元表にそって単元全体の見通しを持つことができたか？		
	○自分にとって大切なものを考えることができたか？		
②	○全文を読み、単元表に初発の思いを書きこむことができたか？		
	○初発の思いを友だちと交流することができたか？		
③	○おみつさんや大工さんはどんな人物かわかる本文を抜き出すことができたか？		
④	○マサエとおばあちゃんの意見は食い違っていますが、あなたならどちらを応援するか決めることができたか？		
	○自分の立場を決めて、本文から理由を明らかにして思いを伝え合うことができたか？		
⑤	○なぜ大工さんはおみつさんにおよめに来てほしいと思ったのかを考え、本文から理由を明らかにして思いを伝え合うことができたか？		
⑥	○おみつさんは大工さんのどの言葉に心を動かされたのか、本文から理由を明らかにして思いを伝え合うことができたか？		
	○自分のプロポーズの言葉を作ることができたか？		
⑦	○おばあちゃんの話聞いた後、あなたがマサエならわらぐつをはいて行くか行かないかを、本文をもとにして考え、自分の考えを伝え深め合うことができたか？		
⑧	○あなたがおみつさんだったら、大工さんと結婚するかしないか、本文をもとにして考え、自分の考えを伝え深め合うことができたか？		
⑨	○おみつさんや大工さんの生き方を通して、自分の大切なものを考え、経験をもとに理由を明らかにして書くことができたか？		
⑩	○おみつさんや大工さんの生き方を通して、自分の大切なものを考え、経験をもとに理由を明らかにして書くことができたか？		
⑪	○書いたことをもとにして、自分の大切なものについて聴き合うことができたか？		
⑫	○単元表を見直して、学習全体の振り返りをすることができたか？		

※ ◎(よくできた) ○(できた) △(あまりできなかった)

わらぐつの中の神様 単元表①

課題

単元表にそって単元全体の見通しを持ち、自分にとって大切なものを考えよう。

◎自分にとって大切なものを3つきましょう。

--	--	--

わらぐつの中の神様 単元表③

課題

・おみつさんや大工さんはどんな人物ですか。それがわかる本文を抜き出そう。

おみつさん

大工さん

--	--

わらぐつの中の神様 単元表④

課題 ・「みったくない。」「わらぐつはええど〜。」マサエとおばあちゃんの意見は食い違っていますか、あなたはどちらを応援しますか。本文から理由を明らかにして思いを伝え合おう。

マサエ おばあちゃん を応援します。

理由

わらぐつの中の神様 単元表⑤

課題 ・なぜ大工さんはおみっさんにおよめに来てほしいと思ったのですか。本文から理由を明らかにして思いを伝え合おう。

理由

わらぐつの中の神様 単元表⑥

課題

・おみっさんは大工さんのどの言葉に心を動かされたのでしょうか。本文から理由を明らかにして思いを伝え合い、自分のプロポーズの言葉を作ろう。

理由

◎プロポーズの言葉

わらぐつの中の神様 単元表⑦

課題

・おばあちゃんの話聞いた後、あなたがマサエならわらぐつはいて行きますか。はいて行きませんか。本文をもとにして、自分の考えを伝え深め合おう。

私はわらぐつを

はいて行きます。

はいて行きません。

理由

わらぐつの中の神様 単元表⑧

課題

・あなたがおみっさんだったら、大工さんと結婚しますか。結婚しませんか。本文をもとにして、自分の考えを伝え深め合おう。

結婚します。

私はこの大工さんと

結婚しません。

理由

わらぐつの中の神様 単元表⑨・⑩

課題

・おみっさんや大工さんの生き方を通して、自分の大切なものを考え、経験をもとに理由を明らかにして書こう。

自分の大切なもの

理由

6 6年生の実践

第6学年 国語科学習指導案

指導者 大垣内清広 山本真里 北森和代

(1) 単元名 学習したことを生かして ―「二十一世紀に生きる君たちへ」「海の命」から

(2) 目標

6年生でつきたい力

- ① 文章全体の構成を理解し、自分の考えを明確にするとともに、その内容や表現方法について吟味することができる。(評価力・判断力)
- ② 筆者の意図や文章の展開に対して、自分なりの考えをもつことができる。(思考力・発想力)
- ③ 理解したことをもとに、自分らしい方法で簡潔に伝えることができる。(表現力・論理力)

- ・登場人物の心情や場面の描写など、優れた叙述を味わいながら読み、自分の考えや感想をもつ。・①
- ・筆者の考えに対して、理由を明らかにしながら、自分なりの考えをもつ。・・・②
- ・これからの自分の「生き方」について、考えを深め、自分らしい表現で簡潔に伝える。・・・③

(3) 指導について

子どもたちは、三月に卒業、四月には中学校という節目を迎え、これからの自分の進む道について自分なりに考え始めているときである。そこで、この時期に、この2つの教材の中の様々な「生き方」を吟味した上で、最終的に自分なりの「生き方論文」を書く活動を設定した。

「二十一世紀に生きる君たちへ」は、筆者が、序論から結論まで一貫して、読み手に「こうあってほしい」と強烈にメッセージを送ってくる文章である。特に、本論の中で筆者は「歴史から学んだ人間の基本的なこと」として、自然へのすなおな態度と自分に厳しく相手にはやさしい自己の確立が重要であり、それができてこそたのしい人間といえると述べているが、これは、これからの自分の生き方を考える子どもたちにとって、強く心に刻み込まれる文章である。

一方、「海の命」は、物語全体を通じて、「海と共に生きる」という考え方が根底に流れている。主人公、太一の成長はもちろん、その父や与吉じいさの生き方を、「二十一世紀に生きる君たちへ」でつかんだ「生き方の心がまえ」に照らして読むことで、学びの中で読み取ったり話し合ったりする際の視点を明確にしたい。そこから、より深く登場人物の成長や生き方を味わって読み、吟味し、次に書く自分自身の「生き方論文」もここで考えたことを思い起こしながら表現できればと考えている。

これまで子どもたちは、自分なりにキーワードに注目したり、一文で書くというような方法で国語学習を進めてきたが、読み解いていく際の基準は、自分や共に学習している友だちの価値観であった。今回は、最初の教材で得たいくつかの視点をもって次の教材を読み、そこからさらに自分なりの考えをもつことができれば、「筆者の意図をとらえる力」や「自分の考えを明確にする力」を養うだけでなく、今後、国語科に限らず他のいろいろな場面に転移できる力になると考え、子どもたち同士の交流や助言も入れながら、目標にせまっていきたい。

(4) 単元の指導計画と評価計画 (全 17 時間)

	目標	時数	学 習 活 動	評 価
1 次 1 時間	・学習のめあてと流れをつかむ。	1	・学習のめあてと流れを知る。	・めあて、流れをつかめる。(意欲)
2 次 5 時間	・叙述をもとにしたがら、筆者の考えを読みとる。 ・自分の考えを相手にわかりやすく伝えたり、相手の考えを聞いたりする。	1	・序論から筆者が伝えたいと思う 3 文を選び、交流する。	・自分なりの理由をもち、情報を取り出すことができる。(評価力・判断力) ・自分なりの考えを伝えることができる。(表現力)
		1	・本論 (前段) から筆者が伝えたい 3 文を選び、交流する。	
		2	・本論 (後段) から筆者の伝えたい 3 文を選び、交流する。	
		1	・筆者の伝えたい「生き方の心がまえ」について、まとめる。	
3 次 6 時間	・生き方の心がまえを視点として、登場人物の考え方や生き方について考える。	1	・幼い頃の太一の姿について「生き方の心がまえ」の視点から、考え、話し合う。	・登場人物の気持ちの変化や成長、生き方を叙述をもとに、吟味することができる。(評価力・判断力) ・自分なりの考えを伝えることができる。(表現力)
		2	・父や与吉じいさの生き方について、「生き方の心がまえ」の視点から、考え、話し合う。	
		1	・青年となった太一の姿について、「生き方の心がまえ」の視点から、考え、話し合う。【3組】	
		1	・太一の選んだ生き方を「生き方の心がまえ」を視点にして考え、話し合う。【1組】	
		1	・自分は太一と父の生き方のどちらに共感するか伝え合う。【2組】	
4 次 5 時間	・太一の生き方に対する自分なりの考えや「生き方の心がまえ」をもつ。 ・自分なりの表現方法で分かりやすく文章にまとめたり、相手の考えを聞き取ったりする。	1	・「太一の生き方についての論評」をテーマに「生き方論文 (前段)」を書く。	・相手を納得させられる表現方法を用いて、考えをまとめ、伝えることができる。(表現力・論理力) ・学習を振り返ることができる。(評価力)
		2	・「自分の生き方の心がまえ」をテーマに「生き方論文 (後段)」を書く。	
		1	・「生き方論文」を交流する	
		1	・学習全体の振り返りをする。	

(5-1) 本時の指導 【1組】

1) 目標

- ・太一の生き方を「二十一世紀に生きる君たちへ」で学んだ「生き方の心がまえ」に照らして読み、太一がどこまで成長したのかを確かめる。
- ・叙述に即して読みとったことを、一人ひとりが意欲的に発信し、受け止め交流することができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学 習 活 動	指導上の留意点	評価の視点
2分 一斉	1. 本時の学習活動とめあてを確認する。	・学習の手順を説明するときに、活動の一つひとつの目的を意識させたい。	・学習活動とめあてを把握したか。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 太一の選んだ生き方を「生き方の心がまえ」に照らして分類し、太一の生き方が一番感じられる一文を理由とともに選んで交流しよう。 </div>			
3分 ペア	2. 音読する。		
10分 個人	3. 5場面の太一の行動や姿を読みとり、書き抜いて理由も考える。	・「生き方の心がまえ」を整理して確認する。	・「生き方の心がまえ」に照らして太一の成長や生き方を深く読めているか。
15分グループ	4. 3で考えたことと、理由を交流する。	・交流では、一文を選んだ理由をあわせて伝えることが大切であることを助言する。 ・交流する中で、全体に出す意見を一つ作っていくことを知らせる。	・自分の意見を理由をつけてはっきりと伝え、友だちの考えを自分の考えと比べながら聞いているか。
13分 一斉	5. 各グループの意見を出し合い、全体で交流する。	・同じ行動や姿が異なる理由で出された場合も丁寧に受け止め、つないでいく。	・太一の生き方を深く味わい、吟味することができるか。
2分 個人	6. 学習をふり返る。	・学習のふり返りシートを使う。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 太一の生き方から、「生き方の心がまえ」が感じられるところを見つけ合い、彼がどこまで成長したのかを確かめることができたか。 </div>			

3) 授業の視点

- ・5の場面の太一の生き方を「生き方の心がまえ」に照らして読み、太一の成長を確かめることができたか。

(5-2) 本時の指導 【2組】

1) 目標

- ・自分は太一と父の生き方のどちらに共感するか、理由を明らかにしながら考えをまとめることができる。
- ・お互いの考えを意欲的に伝え合うことで、自分の考えを深めようとするができる。

2) 本時の指導

時間・形態	学 習 活 動	指導上の留意点	評価の視点
5分 一斉	1. 本時の学習活動とめあてを知る。	・学習の手順を説明するときに活動の一つひとつの目的を意識させたい。	・学習活動とめあてを把握したか。
自分は太一の生き方と父の生き方のどちらに共感したのかを伝え合い、太一と父の生き方についての理解を深めよう。			
10分 個人	2. 課題についての自分の考えを書く。	・ワークシートで太一と父の生き方について考えたことを確認しながら、自分はどちらに共感するか考え、理由も明らかにしながら書くようにさせる。	・課題に対する自分の考えを確かめることができたか。
15分 グループ	3. 個人の考えをもとにグループで話し合う。	・理由を明らかにしながら、お互いに自分の意見を伝え合うようにさせる。 ・友だちの述べた理由などで質問があれば伝えながら交流するようにさせる。 ・太一の生き方か、父の生き方か、それぞれの意見と理由で一番説得力のあるものを一つずつ決め、ボードにまとめさせる。	・グループで自分の考えを伝えることができたか。 ・友だちの考えに反応することができたか。 ・グループの意見をまとめることができたか。
10分 一斉	4. グループでの話し合いをもとに、全体で交流し合う。	・疑問に思ったことや納得したことなど、他のグループの意見に対して意見を伝え合うようにさせる。	・他のグループの意見を比較しながら、考えを伝えることができたか。
5分 個人	5. 学習を振り返る。	・学習の振り返りシートを使い、課題について振り返らせる。	できたか。
太一の生き方か父の生き方のどちらに共感したのかを伝え合い、太一と父の生き方についての理解を深めることができたか。			

3) 授業の視点

- ・自分の考えを伝え合うことで、太一と父の生き方について理解を深めることができたか。

(5-3) 本時の指導【3組】

1) 目標

- ・青年となった太一の姿や行動を「二十一世紀に生きる君たちへ」で学んだ「生き方の心がまえ」に照らして読み、太一がどこまで成長したのかを確かめる。
- ・叙述に即して読みとったことを、一人ひとりが意欲的に発信し、受け止め、交流することができる。

2) 本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
2分 一斉	1. 本時のめあてを確認する。	・4次で各自「生き方論文」を書くことを意識させる。	
青年になった太一の姿や行動を「生き方の心がまえ」に照らして分類し、太一の生き方が一番感じられる一文を理由とともに選んで交流しよう。			
3分 グループ	2. 音読する。		
10分 個人	3. 青年になった太一の行動や姿を分類して書き抜き、一文を選ぶ。	・「生き方の心がまえ」を整理して確認する。	・「生き方の心がまえ」に照らして太一の成長や生き方を深く読んでいるか。
15分 グループ	4. 3で考えたことと、その理由を交流する。	・交流では、一文を選んだ理由をあわせて伝えることが大切であることを助言する。 ・交流する中で、全体に出す意見を一つ作っていくことを知らせる。	・自分の意見を理由もつけてはっきりと伝え、友だちの考えを自分の考えと比べながら聞いているか。
13分 一斉	5. 各グループの意見を出し合い全体で交流する。	・同じ行動や姿が異なる理由で出された場合も丁寧にとりあげつないでいく。	・太一の生き方を深く味わい、吟味することができるか。
2分 個人	6. 学習をふり返る。	・学習のふり返りシートを使う。	
青年になった太一の行動や姿の中から、「生き方の心がまえ」が感じられるところを見つけ合い、彼がどこまで成長したのかを確かめることができたか。			

3) 授業の視点

- ・4の場面の太一の姿や成長を「生き方の心がまえ」に照らして読み、太一の成長を確かめることができたか。

(6) 本単元の振り返り

1) 教材の選択と単元構成

今回、文学教材「海の命」をより深く読み、味わうために、「登場人物の生き方を読むための視点」を示してはどうかと考えた。それで、その視点を得るために「二十一世紀に生きる君たちへ」（論説文・司馬遼太郎）を前もって学習しておくことで、教師から与えられた視点ではなく、自分なりの視点「生き方の心がまえ」をもって、「海の命」を読むことができた。

この視点は、最終目標である「生き方論文」を書くにあたって、なくてはならないものだったので、単元構成を三部構成にしたことで時間数は長くなったが、有効であった。

2) 登場人物の生き方を読む

場面ごとにくわしく読むのではなく、幼い頃の太一、青年になった太一、クエと向き合った太一、おとう、与吉じいさというように、登場人物の姿や行動を視点をもってとらえ、その視点ごとに分類し、その中から、自分がその時に最も生き方が表れていると感じた一文を選び、理由もつけて、小グループの中で交流するという学習活動を行った。回数を重ねるごとに、だんだんと教師の支援に頼らずに自分たちで話し合いを進め、グループ内での交流をする中で、どんどん教材を深く読んでいく様子が見てとれた。

また、それぞれが共通の視点をもって話し合っているため、心に残った一文がそれぞれ違うものであっても、「生き方」という軸はぶれずに、主題に迫ることもできていたように思う。

3) 課題について

1時間の授業で読むべきところを読み、深めるべきところを深められたかどうかは、その時間の「課題」によるところが大きい。実際に、課題文の語尾にギリギリまで迷ったことも多かったが、子どもたちにとって本当に分かりやすい「課題」が作れた授業は、全員の1時間が大変濃いものになり、たとえその時間にあまり発言していない子がいても、課題について集中して考え、それを伝えようとしていることが感じられた。しかし、そうでないときは、何をどう考えたらよいかの分かりにくく、子どもたちを迷わせてしまうことになるので、めあてにつながる子どもの活動を促す課題を作るということの大切さを強く感じた。

4) 生き方論文

前半は、「海の命」の太一の生き方と関わって、自分の考えを述べ、後半は、これからの自分の生き方について、この単元で学んだことをもとに書くという形で進めた。ここでも、読み取りの時と同様に、「生き方の心がまえ」が軸となっているので、あれこれと助言しなくても子どもたちは書き上げることができた。教材文を通して、人間の生き方を何度も友だちと交流したことが土台にあったからではないかと考える。

(7-1) 1組の本時の振り返り

「学習したことを生かして」の取り組みを通して、子どもたちに目指してほしいと願ったのは、35人のグループ学習ということである。そのための、しかけを考え、取り組ませた。具体的には、課題を明確にして子どもたちが活動をしやすいものにする、ゴールを細かく提示して一人ひとりが達成するビジョンをもって活動できるようにすること、教師の指示は3つだけ（課題の提示と補足、学習の流れ、振り返り）しかないということで、自分たちで学習しようという意欲、そして責任を高めようとしたことなどである。そして、当日に向けて子どもたちのモチベーションは高まってきていた。

迎えた当日。学習課題は「太一の選んだ生き方を『生き方の心がまえ』に照らして分類し、太一の生き

方がいちばん感じられる一文を選び、理由を交流し合おう」であった。かなり複雑そうで長い課題と思っただが、ワークシートの精選など工夫を加えることで、課題達成を支援したつもりだった。

学習の流れは、個人→グループ→全体交流、と深め合いであった。この流れはパターン化してきているものの、グループ学習での話し合いが停滞するところが見られることが多かったため、心配していた。グループで新しい考え・理由を作り出すという活動は、場面が進むにつれて太一の生き方・考え方も複雑になるため困難になるはずだからだ。しかし、子どもたちは自分の考えを出し合うところから、自分の意見を主張したり、友だちの考えのおかしいところ、矛盾点などを指摘し合いながら、一つの考えを導き出すことができていた。もちろん、全てのグループでだ。どのような部分で話し合いをしているのかということが気になり、様子を見て回ると、様々な場所での意見交換がなされていた。自分たちのテーマで、共通理解したいこと、深め合いたいことが自然に取捨選択され、自分たちの望む読み取り学習が進められていたことは、成果であったと考えたい。グループ学習から全体学習へのつながりの部分は、グループ間のタイムラグが予想されたが、どのグループにとっても集中して取り組めばなんとか達成できる課題設定・時間設定であったため、スムーズに移行することができていた。その中には、学習の流れをしっかりと意識し、お互いに声を掛け合う子どもたちの成長した姿があったことが、大きな一因となっていた。活動一つひとつにおいても時間内に課題達成をめざす取り組みを続けてきたことも、学習活動の変容につながったのだと考えている。

全体学習では、交流5分、深め合い8分という時間設定の中で、子どもたちが活動した。基本は35人のグループ学習という視点から、全体交流だけでは終われないという思いがあった。どうすれば、子どもたち同士で深め合えるのか。そこで、全体交流にも小課題を設定して取り組ませた。「自分たちよりもいいと思った理由、納得できない理由を伝え合おう」という課題は、まだまだ曖昧だったと思うが、35人誰もが答えられ、且つ、さらに深め合うための入り口としてはベターであったように自分としては感じていた。事実、子どもたちはラスト8分間を自分たちだけで意見を出し合い、答えたり補足したりしながら深め合う活動を行なうことができていたと思う。結果的に話が違う方向に進んでしまい、軌道修正することができないまま、振り返りをするようになってしまった。しかし、子どもたちは、まさに45分間の学習を自分たちだけ進め、課題を達成したことは子ども、そして教師ともに成就感を味わうことができたと確信している。

自分たちで考え、伝え合い、判断するという力を高めていくための授業展開、そして課題が見えたような気がした今回の取り組みであった。読み深まりの甘さ、軌道修正のための教師の出場など、研究していきたい課題も具体的に見えてきたことも、成果としてあげられるのではないと考えている。

(7-2) 2組の本時の振り返り

前時まで、「海の命」の登場人物である太一やおとう、与吉じいさの生き方について、「二十一世紀に生きる君たちへ」まとめた「生き方の心がまえ」に照らして読み取ってきた。正直、これまでしたことのない初めての手法で、本当にこれで「海の命」を読めるのだろうかと不安もあった。しかし、いざやってみると、人物の生き方を心がまえと照らして分類し、その人物の生き方が一番表れていると思う一文とその理由をまとめていくという方法は、子どもたちにとってはとてもわかりやすかったようだった。人物の人となりや生き様そのものが表れている文を子どもたちはグループ活動の中で、時には迷わずすんなりと、時には活発に議論しながら、理由とともに抜き出していった。また、話し合いの中で、「なぜ太一は泣きそ

うになりながら思うのか」や、「太一とおとうの生き方は、どう違うのか」など、主題に迫る議論をしているグループが続々と出てくるのに驚かされた。

2組では、「海の命」に入ってから、個人での活動を、「人物の言葉や行動を心がまえに照らして分類する」ところまでとし、その後グループに移って「分類した中で人物の生き方が一番表れている一文とその理由を選ぶ」活動をした。そのため、話し合いで個々に意見を出し合いながらも、最後にはグループで一文にまとめることができていた。つまり、個人の考えをもつ前にグループ活動に入っていたので、話し合いに個々の意見がうまい具合に生かされていた。

しかし、本時では、「自分は、太一の生き方とおとうの生き方のどちらに共感するか」という課題で自分の考えを書くところから始まり、その後グループで「なるほどと納得のいく理由で書いている文をグループで一つ選ぶ」という活動に移った。これまでとは違い、自分の考えをしっかりともってからのグループ活動だったため、子どもたちの中に大きな戸惑いが生じてしまい、なかなかスムーズに話し合いが進まず、グループの意見としてもひとつにまとまりにくい状況になってしまった。2回ほど指示を繰り返して補足することで、何とか各グループで一つの作文を選び、発表をすることができた。

ただ、それだけ「太一とおとうのどちらに共感するか」に対する自分の考えを、自分自身の経験や日常生活に合わせた自分なりの確固たる理由をもって、書くことができていたということだと考える。自然を大切に、海の恵みに感謝しながら海で生きていくために、必要最低限の漁を続ける村一番の漁師という点では、太一とおとうは共通している。が、瀬の主に対して自分の命をかけて、体を張ってでも挑戦したおとうと、追い求めた瀬の主に対して、新たな考え方で、瀬の主を表される海の命とともに生きるという生き方を切り開いた太一。自分がどちらに共感するかは、自分にとっての家族の存在だったり、自分の目標や将来の夢に向かっての意気込みだったりに置き換えて、書くことができていた。また、ここで書いたことは、それぞれの「生き方論文」にも反映されて、より自分の思いや考えが強く表れている論文に仕上げることができた。

(7-3) 3組の本時の振り返り

この時間の課題について、考えずに「ぼんやりしてしまう」または、課題を解決するためにどこから手をつけたらいいのかわからず「活動や思考が止まってしまう」ことがこの日だけでなく、単元の初めから終わりまで無かったのではないかと感じている。

「青年になった太一の生き方」を、全員が、①自然を大切に生きているか、②自分に厳しく、他人には優しいという自己が確立できているか、③やさしさやいたわりの気持ちももっているか、という3点から読もうとしていた。授業の初めに、この日の課題の確認と時間設定を伝えたら、支援者である私はもうすることがなかった。次に声を出すのは25分後の「全体交流を始めますよ」。もちろん、個々の読みの進み具合を確認し、グループごとの交流の深さ等を見ては回るが、ここで個人的に援助しなくてはならないことは、まず無い。進んでいないからと声をかけても、ちゃんと考えているからまだ書いていないだけのことが多いし、グループでまとまっていないように見えてもそれぞれが根拠を示して説明しているのであって、別に意地の張り合いで言い合っているのではないから、最後にはまとまる。一つの結論に引つ張る必要もないし、主題に迫れないとあわてることも無い。9グループもあれば、必ずそこはおさえられる。

では、私はこの時間何をどう見るか、これが結構難しい、が、おもしろい。4人グループの中には個人的な読みをした子もいる、ちゃんと理由もある、しかし、友だちの意見に納得してそれは全体に出ないこ

ともある。これをいつどこでどう出すか、である。25分は9つのグループを見て回っている私にとっては、楽しいが案外短く感じられるのもまたこれまでと違うところだ。子どもたちも25分をいつも短いと言い、延ばしてほしいとよく言われる。延ばしてやりたいほど理由を述べ合っているときもあるし、どれもがもつとも選べず困っているときもある。しかし、ここを延ばすと全体で出し合う時間にひびいてくる。一時間の流れについては、このような細かい課題をいくつか解決していかなければならない。

これまで、文学教材をより深く読み味わえたかどうかは、最終的にどうしても個々の読解の力に頼るのではないか。ここという作者の主題やねらいに引き寄せるのは支援者である教師の最も大きな役目であり、読解力の弱い子どもには、よりきめ細かい個別支援をしてめあてに近づけると考えていたような気がする。今までに多くの授業も見てきたが、飛びぬけた技量をおもちの先生が、巧みな発問で、魔法のように子どもたちをねらう解釈へと引き込んでいく。そうなるにはと思う前に、とても自分には無理と思い、迷っているときに、ある先生が「私はもう黒板の前に先生が一人でがんばっている授業は見たくない。子どもが動いているけど先生はどこにいるの？というのをやってみたら？」と言われた。あるとき自分の中で何かがふっきた、もうこれで1時間汗かいて発問し続けなくてもいいのだと思った。6年前のことである。

この6年間ずっと、国語の時間になると、あるとき背中を押してくれた勢いのいい声が、耳の奥に聞こえてくる。

6年生実践資料1：単元の流れとめあてプリント

学習プリント

『学習したことを生かして』『二十一世紀に生きる君たちへ』『海の命』
単元の流れとめあて

全体のめあて 『二十一世紀に生きる君たちへ』や『海の命』を通して考えた「生き方の心がまえ」や自分の思いを入れながら、『生き方論文』を書き上げることができた。(全十七回)

	回数	学習活動	振り返り
流れ	第一回	学習のめあてと流れを知る。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
二十一世紀に 生きる君たちへ	第二回	序論から筆者が伝えたい三文を選び、交流する。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
	第三回	本論(前段)から筆者が伝えたい三文を選び、交流する。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
	第四回	本論(後段)から筆者が伝えたい三文を選び、交流する。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
	第五回	結論から筆者が伝えたい「生き方の心がまえ」について、まとめる。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
	第六回	幼いころの太一の姿について、「生き方の心がまえ」の視点から考える。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
海の命	第七回	父や与吉じいさの生き方について、「生き方の心がまえ」の視点から考える。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
	第八回	書生となった太一の姿について、「生き方の心がまえ」の視点から考える。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
	第九回	太一の選んだ生き方を、「生き方の心がまえ」の視点から考える。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
	第十回	自分、太一、父の生き方のどちらかに共感できるか考える。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
	第十一回	太一の生き方に対する自分の考えをテーマに『生き方論文(前半)』を書く。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
生き方論文	第十二回	自分の「生き方の心がまえ」をテーマに『生き方論文(後半)』を書く。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
	第十三回	お互いの『生き方論文』を交流する。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由
振り返り	第十四回	学習全体の振り返りをする。	課題は達成できたか (◎ ○ △) その理由

全体のゴール 『二十一世紀に生きる君たちへ』や『海の命』を通して考えた「生き方の心がまえ」や自分の思いを入れながら、『生き方論文』を書き上げることができた。

6年生実践資料2：ワークシート例

学習のめあて 筆者の伝えたい二十一世紀を生きるための「心がまえ」について考える。	序論		筆者の伝えたいこと
	「筆者の伝えたい「生き方の心がまえ」」	選んだ理由	
	(本論) (後段)	(本論) (前段)	選んだ理由 自分たちが二十一世紀を生きていく中で「大切な心がまえ」
	結論		
学習のめあて 筆者の伝えたい二十一世紀を生きるための「心がまえ」について考えることができた			

学習のめあて 太一の行動を「生き方の心がまえ」に照らして太一の生き方が一番感じられる一文を理由とともに選んで交流できたか	① 自然や人間同士を尊敬すること	学習プリント 「海の命」
	② 自分に厳しく、相手にはやさしく、すなおで、かしい自己を確立すること	
	③ 根っこの感情(いたわり・やさしさをしっかり根っこのこ)	
学習のめあて 太一の行動を「生き方の心がまえ」に照らして太一の生き方が一番感じられる一文を理由とともに選んで交流できたか	選んだ一文	その理由

学習のめあて

自分は太一の生き方と父の生き方のどちらの生き方に共感できるのかを理由を
はつきりさせて考え、伝え合おう。

自分が共感できるのは

の生き方

理由は

--

前理由に対する感想

名

前理由に対する感想

名

前理由に対する感想

名

学習のゴール

自分は太一の生き方と父の生き方のどちらの生き方に共感できるのかを理由を
はつきりさせて考え、伝え合うことができたか。

学習のめあて
最後の場面の太一の行動を「生き方の心がまえ」に照らして分類し、太一の生き方
が一番感じられる一文を理由とともに選んで交流しよう。

①自然を大切にすること

②自分に厳しく、相手にはやさしく
③お互いに支え合い、助け合う

--	--	--

選んだ一文

その理由

学習のゴール
最後の場面の太一の行動を「生き方の心がまえ」に照らして分類し、太一の生き方
が一番感じられる一文を理由とともに選んで交流できたか。

7 特別支援学級の実践

なかよし2組 国語科学習指導案

指導者 八木 元美

1. 単元名 このおと なあに

2. 目標

Mにつけたい力

- | | |
|--------------------------------|-----------|
| ① 書かれている内容を理解し読むことができる。 | (評価力・判断力) |
| ② 書かれている事柄に、自分なりの考えを持つことができる。 | (思考力・判断力) |
| ③ 感じたこと、思ったことをわかりやすく伝えることができる。 | (表現力・論理力) |

- ・聞いた音を、声や文字で表現する。・・・①
- ・簡単な文を作る。・・・②
- ・音のイメージを絵で表す。・・・③

3. 指導について

なかよし2組に在籍するMは、1学期は交流学級で学習していた。Mは文字を書くことが大変好きで、1学期は「ひらがな」を書くことに大変意欲的に取り組んでいた。黒板の字を正確に書き写すこともできた。1学期の終わりごろには50音のうち5音以外は書くことできた。しかし、「聞く」「読む」ことに苦手さが見られ、簡単な単語や文章を読むことも難しかったため、2学期にはいり個別で学習することとなった。「書く」意欲はとても強く、好きなひらがなを羅列して楽しんでいる。

なかよし学級で学習するにあたり、「聞く」「読む」「書く」「話す」ことがバランス良くはいるように、①絵本、②カルタ、③カード、④プリント、の4つの活動を順番に入れ、1時間の流れが本人にもわかるようにした。①では数冊の絵本を用意し、読み聞かせを中心に行っている。Mが絵を見ながら話をすることもある。この頃は絵本のだいたいのあらすじがわかるようになってきた。②では50音のカルタからスタートし、今は「3ヒントカルタ」で答えを推測して取ることをしている。3つのヒントはどれも重要で、集中して聞けなければ答えに至らない。Mはこのカルタが大変好きで、集中して聞けるようになってきている。③では濁点や詰まる音を読む練習と、2文字から4文字の「ひらがな」を読んで、絵を取る練習をしている。繰り返すことで、字をまとまりとして読めるようになってきている。1対1の学習なのでクラスでしているような集団の学習が難しいが、なるべく指導者側が同じ目線にたち、読みあいつこや掛け合いなども取り入れている。Mは挨拶や日常的な会話はきちんと答えられるが、質問になると成り立たないことが多い。しかし、相手に意志を伝えようとする意欲を大変感じる。

Mが「なぞなぞ」が好きなこともあり、2学期には「なぞなぞ なあに」という簡単な絵本をきっかけに、なぞなぞ遊びを楽しんだ。今回は、「なぞなぞ なあに」と同じ流れで、音に関する「なぞなぞ」にしたい。音をもとにした簡単な絵本をまねて、いろんな音に注意深く耳を傾けたり、音集めを楽しんだりしながら、抽象的な音を具体的な言葉に表現することがねらいである。また、発音した「ぼん ぼん」などの簡単な音を文字化する事でできればと思っている。絵の好きなMなので答えを絵にし、絵本を作り、友だちや保護者に発表することをゴールとして楽しんで取り組んでいきたい。

4. 単元の指導計画と評価計画（全7時間）

次	目標	時数	学習活動	評価
1次 1時間	・学習のめあてと流れをつかむ。	1	・繰り返しの言葉が載っている絵本を見て、学習の計画をたてる。	・楽しんで絵本を見て、学習の見通しを持つことができる。（関心・意欲・態度）
2次 2時間	・音を聞き文字に変える。	1	・音を聞き、声に置き換える。	・音に近い音を声にして出せる。（表現力）
		1	・絵を見て、その絵が出す音を声に置き換えたり、文字に置き換えたりする。	・絵を見て、声や文字に置き換えられる。（思考力・判断力）
3次 2時間	・音集めをして、簡単な文に変える	1	・身の回りの音集めをする。	・自分の周りにある音を文字に変えられる。（思考力・判断力）
		1	・集めた音の中から選び、「このおとなあに」の問いと答えの文に置き換える。	・決められた文型で文章を書ける。（表現力・論理力）
4次 2時間	・2語文を絵で表す	2	・作った文をもとに、絵を描き、絵本にまとめる。 ・クラスで発表する。	・絵や写真を見ながら絵を描ける。（思考力・判断力） ・自分の絵本を読める。（評価力・判断力）

5. 本時の指導

(1) 目標

- ・絵を見て、絵カードの出す音を自分なりの声で表現できる。
- ・自分の声を文字に変えることができる。
- ・最後まで落ち着いて活動することができる。

(2) 本時の展開

時間	児童の活動	指導上の留意点	評価
8分	1. 音を題材にした絵本を数冊読んだり、聞いたりする。	・パターン化された学習の流れを使い、導入をスムーズにする。 ・1人なので読み合いをする。 ・音に着目させる。	・集中して聞けたか。
5分	2. 今日の学習の内容とめあてを知る。	・学習の流れがよく分かるように絵本をみせながら、学習内容とめあてを提示する。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> いろんなえのカードをみます。それはどんなおとがするのかな。えほんをみながら、どんなおとがするのかわいてみよう。どんなおとかわいてみよう。 </div>			

5分	3. 読み札が音で、音を出すものが取り札になるようなカルタで遊ぶ。	・ 1人なので読み手、取り手を交代する。 ・好きなものをカルタに選んでおく。 ・身近なもののカードを用意しておく。	・音をきいて該当する絵をとれたか。
15分	4. 音を出すもののカードの中から、いくつか選び、どんな音になるか言う。	・自分なりの音であれば良いとする。 ・書いた文字を読ませながら確認する。	・自分なりの音を表現できたか。
15分	5. 出した音を文字にする。		・音を聞いて、近い文字を書けたか。
2分	6. 本時の活動の振り返りを3枚の表情カードから選ぶ。	・できたところを一つずつ確認しながら良かった所をほめる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> えカードをみてどんな おとか いえたか。 どんな おとか かけたか。 </div>			

(3) 授業の視点

- ・集中して音を聞けたか。
- ・自分なりの声で表現したものを、文字に変えることができたか。

なかよし3組 国語科学習指導案

指導者 平野 真生

1. 単元名 ポケモン卒業壁画をつくろう

2. 目標

Hにつけたい力 ① 書かれている事柄の順序や場面の様子など気づきながら、読むことができる。(評価力・判断力) ② 書かれている事柄に、自分なりの考えを持つことができる。(思考力・発想力) ③ 感じたこと思ったことを分かりやすく伝えることができる。(表現力・論理力)	Nにつけたい力 ① 順序や場面の様子・言葉の意味を考えながら内容を考えることができる。(評価力・判断力) ② 書かれている事柄に、自分なりの考えを持つことができる。(思考力・発想力) ③ 理由をはっきりさせて、相手に分かりやすく伝えることができる。(表現力・発想力)
---	--

- ・1年間を振り返ってどんな行事があったか、どんなことに取り組んできたか思い出し、見つける。①
- ・それぞれが取り組んできた思い出の行事を集める。・・・②
- ・思い出の行事を好きなポケモンキャラクターの吹き出し文に書く。・・・③

3. 指導について

HとNは、小学校生活最後の年であり、ポケモンのキャラクターは二人にとって大変興味深いものである。本単元では、二人が興味・関心を持ってそうなキャラクターを使い、思い出に残る物として工夫したい。自らの思いを表現し、体験してきたことを思い出して、自分の力で考えることができるように学

習を進め、思い出に残る壁画を作りたいと考えた。また学習のゴールとして出来た作品を卒業式前に中央廊下などに飾り、全校のみんなに見てもらい、感想などをもらう予定である。

日常生活では、HはNの行動が気になり、違った課題を出すとき気になってしまうことがあるが、集中すると最後まで諦めず取り組める力がある。そのため授業の時は机を離し、集中できるように配慮している。今まで、授業ごとに学校生活のルールとして決めた内容が守れたかどうかの評価を続けてきた。この評価を意識しながら学校生活を送っている。

一方Nは、比較的穏やかに過ごしているが、Hの行動によって時々イライラしてしまうことがある。意欲を持てる課題には集中して取り組むことができる。だが時間に対してこだわりが強く、時間内に授業が終わらず延長すると気持ちの不安定が続く。Hとの関係が上手くいかない時もあるが、Hの様子を見て気持ちを理解し、落ち着くことができる。

学習にあたり、「聞く」「読む」「話す」「書く」の活動を取り入れた。二人は「聞く」「読む」に関しては意欲的に取り組むことができる。「聞く」では読み聞かせを中心にし、内容を確認しながらあらすじを話せるようになってきた。「読む」では短い文を、感情を出して読めるようになってきた。しかし「書く」「話す」がとても苦手であり、思ったことが上手く伝えられなかったり、文字として書くことに戸惑うことが多い。経験してきたことを話し、感じたことを簡単に文に書けたらと思っている。壁面には、二人が一生懸命取り組んだ成果や体験してきたことを表現し、卒業前に思い出に残る作品をつくり、全校のみんなに思いを伝えることをゴールとしたい。

4. 単元の指導計画と評価計画（全8時間）

次	目標	時数	学習活動	評価
1次 3時間	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージをつかみプリントに描く。 ・今までどんな行事があったのか、考え話す。 ・行事名をプリントに書き、印象に残ったことも書く。 ・行事ベスト3をそれぞれが決める。 ・プリントに記入した行事名と印象に残ったことをカードに書き写す。 ・目や口、パーツを考え描く。 	1	・イメージを思い描き壁画にしたいキャラクターを考え想像する。	・イメージを思い描きキャラクターを考え、プリントに描くことができる。(意欲)
		1	・思い出せた行事を話し、書き表す。	・思い出した事、印象に残ったことを書くことができる。(表現力) ・思い出のベスト3を決めることができる。(思考力・発想力)
		1	<ul style="list-style-type: none"> ・行事名と印象に残った事をカードに書き写す。 ・キャラクターの輪郭にパーツをつける。 	・表情を表すことができたか。(表現力)
2次 3時間	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの吹き出し口にカードを貼り合わせ、ベスト3を中心に貼る。 ・輪郭をなぞり、下書きの 	1	<ul style="list-style-type: none"> ・ベスト3を中心に吹き出し口に行事名を貼り合わせる。 ・鉛筆で書かれた輪郭や 	・壁画になる想像をもち、立体感を出して、下絵に貼り合わせることができる。(表現力)

	絵を完成する。		顔の表情を描く。	
	・完成した下絵に色画用紙や色紙などを貼り合わせる。	2	・キャラクターに合う色画用紙を考えて貼り合わせる。	
3次 2時間	・掲示の準備に取り組む。 ・自分自身の振り返りをする。	1	・意見箱の設置と作品紹介の感想カードをつくる。	・意見箱と感想カードを作ることができる。(意欲)
		1	・感想カードを見て今までの振り返りをする。	

5. 本時の指導 【なかよし3組】

(1) 目標

- ・メモに書いた行事名をカードに書き写すことができる。
- ・ポケモン図鑑やカレンダーを参考にしながら、ポケモン思い出壁画をつくることができる。

(2) 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
5分	1. 本時の学習を知る。	・学習の手順を復唱させる。	・学習の課題と流れが分かったか。
自分の気持ちにピッタリあうポケモンの顔をつくりましょう。			
2分	2. 見本壁画を再度確認し、できあがりのイメージを持つ。	・見本の他に、目や口の部分の見本も見せ、イメージを持たせる。	・イメージを持つことができたか。
15分	3. 事前にプリントに書いた事をカードに書く。	・字の大きさに注意させる。	・カードに書き表すことができたか。
20分	4. 輪郭の中に目や口の形を書く。	・ポケモン図鑑や参考になる本を見て確認させる。	・図鑑や本から探し出し表情を描くことができたか。
3分	5. 学習の振り返りをする。	・良かった所を見つけて評価カードに記入させる。	・最後まで諦めず取り組めたか。
自分の気持ちにピッタリあうポケモンの顔をつくることができたか。			

(3) 授業の視点

- ・自分で選んだ行事名をカードに書き写すことができたか。
- ・自分の気持ちにピッタリ合う表情を描くことができたか。

(7-1) 2組の本時の振り返り

公開授業当日、Aはいつもより早くなかよしの教室にやってきました。前日よりたくさんの知らない人が見に来る事を伝えてはいたが、Aがいつも通り落ち着いて授業ができるかどうか不安があった。というのは、Aは入学式の写真撮影の時、周りの雰囲気と視線に耐えきれずに大泣きした事があるからである。積み木遊びで少しリラックスした後、授業がスタートした事が良かったのかもしれない。Aはいつもの調子で授業に望むことができた。

2学期からなかよし学級で勉強することになったAは集中力が続かないことや話を聞くことに困難な部分があった。そのため、授業は短い課題をつなげて構成している。①絵本、②カルタ、③カード、④プリント、最後に3種類の顔マーク（できた、もう少し、難しい）で自分の振り返りをさせて終わっている。この形を取ることによって、Aに1時間の見通しと終わりをはっきりさせている。また、なるべく絵カードや具体物を使い見たり、触ったりを取り入れながら授業を進めている。

この単元に先立ち、「なぞなぞ なあに」という単元を2学期にした。見えないものを質問から想像するこの単元では、①なぞなぞの絵本、②3 ヒントカルタ、③カードを使った「なぞなぞ」遊びというような流れを用いた。「なぞなぞ」ボックスという箱を使い、質問の後ボックスの口から答えのカードを出すということがとてもおもしろかったのか、しばらくの間、休み時間も遊んでいた。「なぞなぞ」がとてもAの意欲を高めると考えた。聞いたことに適切に答えられることも増えていった。今回の授業では、なぞなぞの内容を音に変えるだけで、同じような流れで授業を組み立てた。

今回の単元では、初めて全体の単元の流れとゴールをAに示した。ひらがなを拾い読みできるようになってはいるが、読み取る力は不十分なのでカットも入れることにした。最終的なゴールは「音の絵本作り」であるが、読んであげる相手を想像させ、学習の意欲付けを図りたいと考えた。Aは「お母さんに見せる。」とはりきった。全体の単元を見せながら、ゴールを示していくことは十分有効と感じた。

当日の授業では、生活に身近な音、パトカーや救急車などの乗り物の音と動物の音を使い音のカルタをした。「このおと なあに？」と2種類の音を同時に聞かせ、2枚のカードを取るのであるが、Aはしっかり耳をすませ2種類の音を聞き分けることができた。すでにとってしまった音には「その音とったよ」と反応してくれた。次に、楽器の絵カードを見せながら音を想像させ声で表した後、本物の太鼓やトライアングルなどに触れさせ、楽器の音を楽しんだ。具体物を用意することでAは最後まで集中して学習することができた。

授業を終えて感じたのは、Aに非常にあった課題であったということや具体物や絵カードが非常に有効であるということだった。また、課題のゴールをAが理解しておくことで学習の意欲も増すことがわかった。学習の最後に振り返りをする事は、もう習慣になっていて、こちらが忘れても自分から提示する。自分を客観的に見ることはとても大切だと感じる。ただ、1対1の授業のため、協同学習の要素を学習に入れるのは大変難しく感じた。

(7-2) 3組の本時の振り返り

なかよし3組は、情緒障がい児クラスである。公開授業は6年生2人の児童で行った。Hは津市内のドクターの指示により、お互いの視線が気にならないようにパーテンショで区切って視覚的支援をした。

Hは2学期に入り調子が崩れ出し、指示が通りにくくなってきた。1学期からNの行動が気になりNに暴言を言うてしまう日々が続いた。徐々に調子が崩れ、2学期になるとNの心もしんどくなり、顔を合わ

せると喧嘩することが増えてきた。非常に気持ちの不安定を抱えながらの公開授業を目指し取り組んだ。

彼らは5月の公開授業でも母への感謝の気持ちを伝える教材に取り組んだ。2人は一生懸命感謝の気持ちを考え「ありがとう」をテーマに色紙にした。興味ある教材には前向きに取り組めることが分かった。

今回の「卒業壁画」では、2人が一番興味をもってできるポケモンキャラクターを題材として取り組むことにした。また、6年生なので卒業年度の振り返りをするので思い出に残る卒業制作を作りあげていこうと考えた。

2人が同じ時間で学習に取り組めるときは、席を前後に離し、パーテーションで区切りをつけ1対1の授業を行っている。

今回の公開授業体制も普段と変わらず、同じ授業の方法で行った。いつも待つことが難しいHから授業の流れの説明を始めた。説明に入るまでは参観に来てくれた方の様子が気になり、緊張して、表情も硬かった。授業の始めに「集中して授業に取り組めます。」と伝えると気にせず課題に取り組めることができた。最初の課題はプリントに書いた行事名をカードに書き写す課題だった。いつもと異なる環境であったが、比較的落ち着いて最後までがんばることができた。次にBは、数回トイレに行くなど落ち着かなかったが課題を短冊に書き、「選んだベスト3をカードに書き思ったことも書き表しましょう」「あなたたちが思う目や口を描いてみましょう」という内容を順序追って説明すると学習内容の流れが分かり集中して活動できた。

2人にとってプールや運動会や修学旅行といった楽しかった行事を次々と思い出し、自分なりの言葉で表現できたと思う。また、大好きなポケモンだったこともあり、公開日当日に書き写す作業的なことを入れたのもよかった。2人とも集中して最後まで投げ出すことなく活動に取り組むことができた。

難しい授業体勢だったが個々に合わせて2人が一生懸命取り組めたと思う授業だったと思う。

また本人たちは、沢山見に来てくれた中で落ち着いて取り組めたことが自信につながりゴールに向けて一生懸命取り組んでいます。

なかよし3組実践資料：がんばりカード項目

☆ポケモンキャラクターを選びデザインをプリントに描くことができた。	
☆六年生になってからの行事を思い出し、プリントに行事名とがんばったこと楽しかったことを書くことができた。	
☆たくさんの行事からベスト3を選んでプリントに記入することができた。	
☆選んだベスト3をカードに書き写すことができた。	
☆目や口、パーツを考え自分で描くことができた。	
☆キャラクターの吹き出しに、考えて選びながら貼り合わせる事ができた。	
☆輪郭をなぞり、下書きの絵を完成することができた。	
☆色紙を貼り合わせ完成することができた。	
☆掲示の準備、ポストや感想カードをつくる事ができた。	

監修者

山本 美一 名張市立つつじが丘小学校校長
杉江 修治 中京大学教授・博士（教育心理学）

研究同人

<2008 年度>

校長 山本 美一

教頭 相樂代利子

教諭 井戸本与利子、村橋 洋子、田中真理子、稲田 清美、森下 ゆか、岩森 進、
村上 好生、鈴木 隆文、川口 尚子、北森 和代、上谷ゆかり、山本 優子、窪田 幸代、
山本 真里、垣下 智、伊藤 健二、松本 泰介、鈴木 佐知、大垣内清広、山村 理恵、
阿形 明美、間邪 陽美、福田 真知、曾我 聡子、西岡 俊充

講師 八木 元美、増田 宣子、平野 真生、福廣 真士、富山恵美子

養護 佐田 和美

事務 的場 美貴

栄養 富田 枝理

給食 榊吞千鶴子、大垣 和代、本田 美花、中野文美子、西川 泰子

校務 大瀬 春江

介助員 山本いずみ、中嶋 千佳、大園 知子、植田美耶子、高木賀代子

学習サポーター 山口 恵美

<2007 年度>

教諭 石本 京子、青山 千春、森 恭一、木村 千歳

給食 森村 則子

学習サポーター 矢口奈尾美

仲間と学び合う中で、ともに高まる子をめざして
—「話す」「読む」「聞く」「書く」活動を通して
(協同教育実践資料 9)

2009年3月25日 発行

著 者 名張市立つつじが丘小学校

監修者 山本美一・杉江修治

発 行 日本協同教育学会

〒839-8502 福岡県久留米市御井町 1635

久留米大学文学部 安永悟研究室内

TEL. 0942-43-4411 (ext. 393)

製作 一粒社出版部 (代表 都築延男)

475-0837 愛知県半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

ISBN*****

<表紙>

協同教育実践資料 9

仲間と学び合う中で、
ともに高まる子をめざして
—「話す」「読む」「聞く」「書く」活動を通して

名張市立つつじが丘小学校 著
山本美一・杉江修治 監修

日本協同教育学会